

2026 年 1 月

食料安全保障月報

(第 55 号)



令和 8 年 1 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021 年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2026 年1月食料安全保障月報(第 55 号)

目 次

概要編

I 2026 年1月の主な動き	1
II 2026 年1月の穀物等の国際価格の動向	4
III 2025/26 年度の穀物需給(予測)のポイント	4
IV 2025/26 年度の油糧種子需給(予測)のポイント	4
V 今月の注目情報「ベトナムにおけるコメの生産・輸出入動向」	5

(資料)

1-1~3 穀物等の主要輸出国の生産量(過去 10 年平均との増減比較)	1 2
1-4 穀物等の国際価格の動向	1 5
1-5 サプライチェーン等に関する状況	1 6
2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 7
3 穀物等の期末在庫率の推移(穀物全体、品目別)	1 8
4 加工食品の主な輸入原材料(穀物等を除く)の状況	2 0
5 食品小売価格の動向	2 4
6 海外の畜産物の需給動向(ALIC 提供)	2 5
7 FAO 食料価格指数	2 6

今月のコラム

「ブラジル的大豆輸出について」	2 7
-----------------	-----

品目別需給編

I 穀物	
1 小麦	1
<米国> 2025/26 年度の生産量は前年度から 0.3%増加する見込み	
<カナダ> 2025/26 年度の輸出量は前年度から 2.3%減少する見込み(AAFC)	
<豪州> 2025/26 年度の前年度から 4.3%増加する見込み(ABARES)	
<EU27> 2025/26 年度の前年度から 20.1%増加する見込み(EC)	
<ロシア> 2025/26 年度の前年度から 9.7%増加する見込み	
<ウクライナ> 2025/26 年度の輸出量は前年度から 11.1%減少する見込み	
<中国> 2025/26 年度の前年度と同水準の見込み	
2 とうもろこし	9
<米国> 2025/26 年度の前年度から 14.3%増加する見込み	
<ブラジル> 2025/26 年度の前年度から 3.7%減少する見込み	
<アルゼンチン> 2025/26 年度の前年度から 6.0%増加する見込み	
<ウクライナ> 2025/26 年度の前年度から 8.2%増加する見込み	
<中国> 2025/26 年度の前年度から 2.1%増加する見込み	

3 コメ	1 5
------	-----

- <タイ> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.1%減少する見込み
- <米国> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 7.0%減少する見込み
- <中国> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.7%増加する見込み
- <インド> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 1.3%増加する見込み
- <ベトナム> 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.8%減少する見込み

II 油糧種子

大豆	2 1
----	-----

- <米国> 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.6%減少する見込み
- <ブラジル> 2025/26 年度の生産量は前年度から 3.8%増加する見込み
- <カナダ> 2025/26 年度の生産量は前年度から 10.2%減少する見込み (AAFC)
- <中国> 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.2%増加する見込み
- <アルゼンチン> 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.1%減少する見込み

(参考1) 本レポートに使用されている各国の市場年度について (2025/26 年度)	2 7
(参考2) 単位換算表	2 7
(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎)	2 8

【利用上の注意】

表紙写真: アルゼンチン・サンタフェ州のとうもろこし圃場。現在登熟期を迎えており、収穫は3
月前半を予定している。(撮影日: 2025 年 12 月 26 日)

(概要編)

I 2026 年 1 月の主な動き

主要穀物等の生産量等について

1月の米国農務省(USDA)の需給報告によれば、2025/26年度の各品目の生産量等の状況は以下のとおり。

小麦の生産量は、トルコ等で下方修正されたものの、アルゼンチン、ロシア等で上方修正され、前月から4.4百万トン上方修正された。前年度からは、イラン、パキスタン、シリア、イラク等で減少するものの、EU、アルゼンチン、ロシア、インド、カナダ、豪州等で増加し、世界全体の生産量は842.2百万トンと史上最高となる見通し。

とうもろこしの生産量は、米国、中国で上方修正され、前月から13.1百万トン上方修正された。前年度からは、ブラジル、EU等で減少するものの、米国、中国、アルゼンチン、メキシコ、ウクライナ、ザンビア等で増加し、世界全体の生産量は1,296.0百万トンと史上最高となる見通し。

大豆の生産量は、ブラジル等で上方修正され、前月から3.1百万トン上方修正された。前年度からは、ブラジル、ロシア等で増加するものの、米国、アルゼンチン、インド等で減少し、世界全体の生産量は425.7百万トンと前年度からわずかに減少する見通し。

期末在庫量は、いずれの品目も前月から上方修正されたものの、消費需要は引き続き旺盛であり、注視が必要。

FAO(国連食糧農業機関)が公表している食料価格指数については、主に乳製品、肉、植物油の価格指数の下落が穀物や砂糖の上昇を相殺したこと等により、11月の125.1から、12月(最新値)は124.3と低下(参考:2024年12月127.4、2023年12月119.1、2022年12月133.1、2021年12月133.7、2020年12月108.5)。海上運賃については、バルチック海運指数(穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数)が、直近5カ年の平均値より約1割低い水準で推移。



写真:フランス・ヴァル・ドワーズ県の冬小麦の圃場。生育は良好。
撮影日:2026年1月5日



写真:ブラジル・パラナ州の大豆の圃場。
生育は良好。
撮影日:2025年12月29日

ウクライナの生産・輸出動向

1月の USDA の需給報告によれば、2025/26 年度のウクライナの小麦の生産量は、収穫面積は増加するものの、単収が減少することを受け、前年度から2%減少し 2,300 万トンとなる見込み。また、輸出量は、前月から 50 万トン下方修正され、前年度から 11%減少し 1,400 万トンとなる見込み。

2025/26 年度のとうもろこしの生産量は、前月からの変更はなく、収穫面積・単収が増加することを受け、前年度から8%増加し 2,900 万トンとなる見込み。また、輸出量は、前月からの変更はなく、生産量の増加等を受け、前年度から 15%増加し 2,300 万トンとなる見込み。

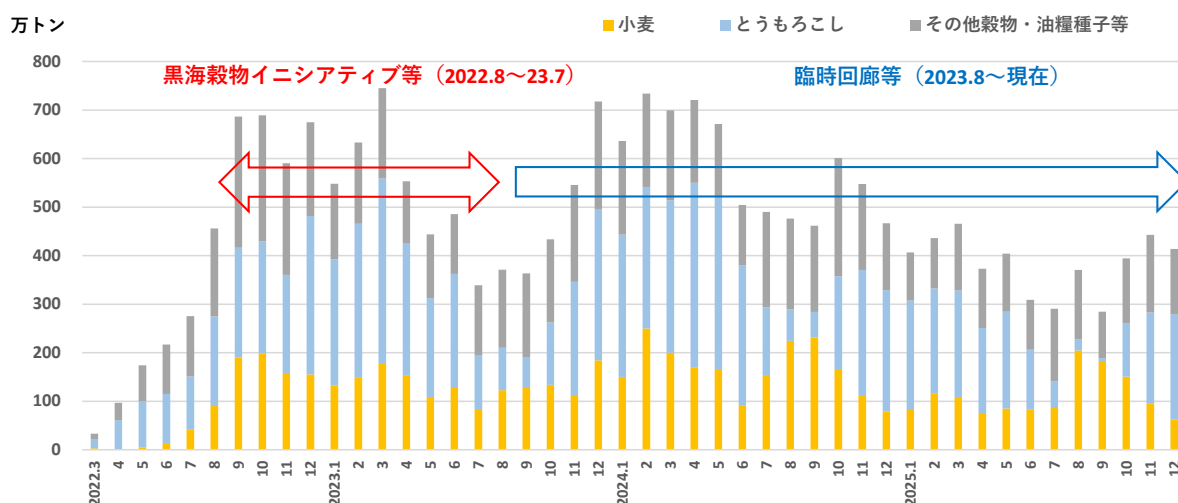
現地情報会社によれば、2026/27 年度の冬小麦の作付けは終了し、12 月末現在、越冬期を迎えている。また、1月8日現在、2025/26 年度のとうもろこしの収穫進捗率は 91%と降雨により穀粒の乾燥が進まず収穫が遅延している。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意(黒海穀物イニシアティブ)により、同年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。

黒海穀物イニシアティブの停止後、ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関(IMO)に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊のほか、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出等が行われているものの、ロシアによるウクライナの港湾インフラ等に対する攻撃が続いており、引き続き輸出動向について注視が必要。

(参考) ウクライナの輸出量の推移(月毎)(2022 年3月～2025 年 12 月)



出典:ウクライナ経済・環境・農業省、ウクライナ穀物協会のデータをもとに農林水産省で作成

注:データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計

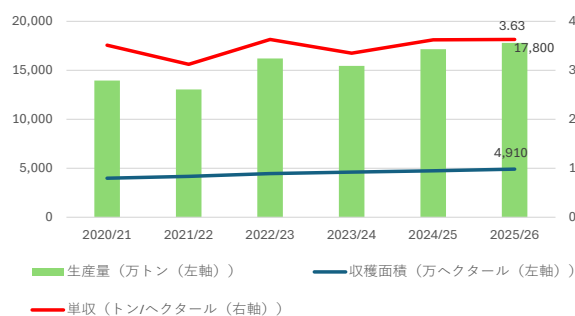
1 ブラジル:2025/26 年度の大豆は記録的な生産量となる見込み

USDA によれば、2025/26 年度の大豆生産量は、前月予測から2%上方修正され、前年度から4%増、過去5年平均から 17%増の1億7,800 万トンと史上最高となる見込み。

これは、収穫面積は、前月予測から1%増、前年度から4%増、過去5年平均から 12%増の 4,910 万ヘクタールとなるとともに、単収も、前月予測から1%増となり前年度並み、過去5年平均から5%増の 3.63 トン/ヘクタールとなることによる(図)。中国からの需要増により大豆の作付面積が拡大した。また、雨季の開始は遅れたものの、主要大豆生産地域において安定した降雨に恵まれ、単収は過去最高に近い水準となった。

中西部では収穫が始まったばかりである一方、南部では作付けが終盤を迎えている。

図:ブラジル大豆の
生産量・収穫面積・単収の推移



出典:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

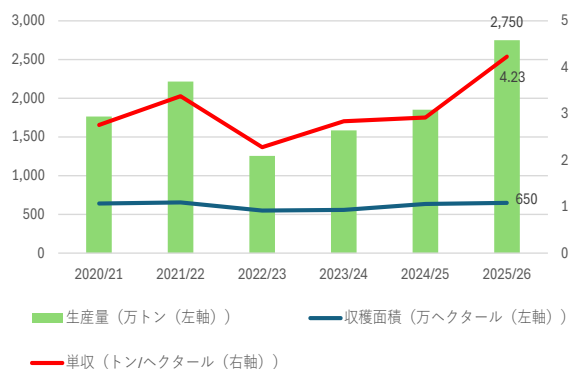
2 アルゼンチン:2025/26 年度の小麦は記録的な生産量となる見込み

USDA によれば、2025/26 年度のアルゼンチン的小麦生産量は、前月予測から 15%上方修正され、前年度から 49%増の 2,750 万トンと史上最高となる見込み。

これは、生育期間中の天候に恵まれ、収穫面積は前月予測からの変更はないものの、前年度から3%増の 650 万ヘクタールとなるとともに、単収が前月予測から 15%上方修正され、前年度からも 45%増の 4.23 トン/ヘクタールと史上最高となることによる(図)。

12 月末現在の収穫進捗率は約 95%となっており、今後、数週間で収穫は完了する見込み。

図:アルゼンチン小麦の
生産量・収穫面積・単収の推移



出典:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

3 中国:2025/26 年度のとうもろこしの生産量は史上最高を記録

USDA によれば、2025/26 年度の中国のとうもろこし生産量は、前月予測から2%上方修正され、前年度から2%増、過去5年平均から8%増の3億 120 万トンと史上最高となる見込み。

これは、単収が前年度から2%増、過去5年平均から4%増の 6.70 トン/ヘクタールと史上最高となるとともに、収穫面積が過去5年平均をわずかに上回り 4,500 万ヘクタールとなることによる。

南東部(四川省を含む)の一部地域で異常な高温と乾燥した天候に見舞われたものの、主要生産地である東北地方では良好な天候に恵まれ生産量が増加した。また、好天に加え、休耕地の削減と輪作の増加を促す政策等により作付面積は安定し、短期的にとうもろこし生産量の増加に貢献すると期待されている。

Ⅱ 2026 年 1 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、12月末、180ドル/トン台半ばで推移。1月に入り、米国における乾燥懸念及び他品目の上昇に連れ高となったこと等を受け190ドル/トン台前半まで上昇したものの、世界的に潤沢な供給等を受け下落し、1月中旬現在、180ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、12月末、170ドル/トン台前半で推移。1月に入り、他品目の上昇に連れ高となったこと等を受け170ドル/トン台半ばまで上昇したものの、米国農務省需給報告で米国のとうもろこし生産量が上方修正されたこと等を受け下落し、1月中旬現在、160ドル/トン台半ばで推移。

コメは、12月末、440ドル/トン台半ばで推移。1月に入り、世界的な供給増及び需要の低迷等を受け値を下げ、1月中旬現在、410ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、12 月末、370 ドル/トン台後半で推移。1月に入り、中国の米国産大豆の継続的な買い付け等を受け380ドル/トン台後半まで上昇したものの、米国農務省需給報告で米国の大豆生産量が上方修正されたこと等を受け下落し、1月中旬現在、370ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、コメはタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2025/26 年度の穀物需給(予測)のポイント

2025/26 年度の世界の穀物全体の生産量は、前年度から 4.2%増の 29.74 億トン。消費量は、前年度から 2.8%増の 29.58 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は前年度から増加するものの、期末在庫率は前年度を下回り 26.7%となる見込み(P17 資料2参照)。

生産量は、前年度から、小麦、とうもろこしは増加、コメは減少し、穀物全体では増加となり、29.74 億トンの見込み。

消費量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体でも増加となり、29.58 億トンの見込み。

貿易量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体でも増加となり、5.33 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.90 億トンと前年度より増加するものの、期末在庫率は前年度より減少する見込み。

(注:数値は1月の USDA「PS&D」による)

Ⅳ 2025/26 年度の油糧種子需給(予測)のポイント

2025/26 年度の油糧種子全体の生産量は、前年度を上回り 6.93 億トン。消費量は前年度を上回り 6.87 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度から増加し、期末在庫率も前年度をわずかに上回り 21.1%となる見込み。

(注:数値は1月の USDA「PS&D」による)

V 今月の注目情報:ベトナムにおけるコメの生産・輸出入動向

ベトナムでは、1980年代から経済自由化・対外開放政策(ドイモイ政策)を採用し、高い経済成長率を示した。農林水産分野においても、近年、インドに次ぐ、コメの輸出国として台頭し、2023/24年度には、過去最高の輸出量を記録した。また、ベトナムは、近年コメの輸入量でもフィリピンに次ぎ世界第2位の輸入国となっている。一方、ここ十年、塩害等の自然条件による影響に加え、最近の作付転換や品質重視の政策の進展により、主要生産地であるメコンデルタ地域ではコメの生産量の伸びが鈍化している。ベトナムにおける2025/26年度のコメの生産状況及び輸出入に係る見通し等をまとめた。

注:文中の「2025/26年度」等は市場年度で、ベトナムのコメの市場年度は2026年1月から2026年12月。

1 コメの生産動向

(1) ベトナムのコメ生産状況

ベトナムは、1980年代からの経済自由化・対外開放政策(ドイモイ政策)の採用により、高い経済成長を示したとされている。農林水産分野においては、80年代後半にかけての農業改革により集団農業生産が終了し、コメの生産量も大きな伸びを示してきた(図1)。

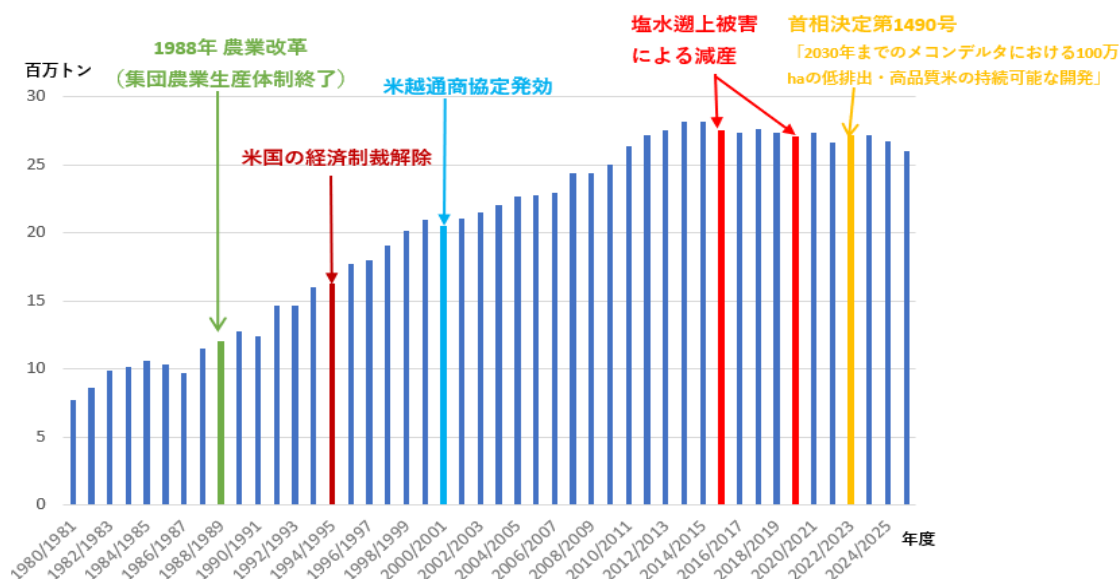
コメは、ベトナム全土で生産されているが、北部の紅河デルタ地域と南部のメコンデルタ地域が主力2大生産地である(図2)。

USDAによれば、2023/24年度の全国コメ生産量は約4,352万トン(粳米ベース)で、そのうちメコンデルタ地域が約56%、紅河デルタ地域(約15%)及び沿岸地域(約16%)が約31%を占める。

図2 ベトナムの地域区分



図1 ベトナムのコメ生産量(精米)の推移



出典:USDA「PS&D」(2026.1)をもとに農林水産省で作成

ベトナムの稲作は、地域や気象条件により期作数や作付時期に差があり、南部メコンデルタ地域では年に二～三期作が可能である(図3)。近年は、乾期の塩水浸入や用水不足の影響により、期作数を二作に減らす例や、エビ等との二毛作に転換する事例も増加しているとの報告がある。ベトナム政府の方針により、一部地域では収益性の高い果樹や養殖への転作も推奨されている。

(2) 2025/26 年度生産動向

ベトナムのコメ生産は、経済や気候温暖化等による環境要因を受け、大きな変化を遂げている。

USDA によれば、2025/26 年度の予測収穫面積は、2025 年の前四半期報告(8月:679 万ヘクタール)よりわずかに上方修正され、685 万ヘクタールとなり、総生産量は 4,200 万トン(粳米ベース)と見込まれている。国際市場におけるコメ価格の下落は、農家の収入に悪影響を及ぼし、多くの農家において水田を果樹や野菜などの収益性の高い作物への転換を選択する動きがみられている。

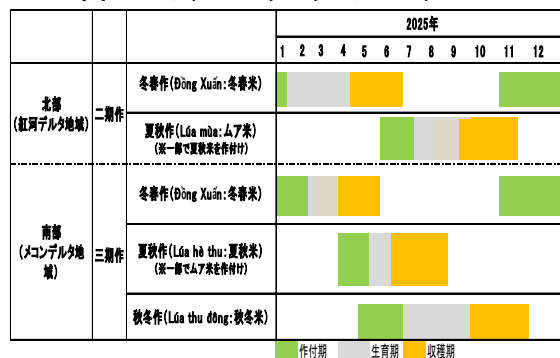
この傾向は、コメ農家に対する農業活動の多角化圧力の高まりを反映している。また、北部及び中部ベトナムのコメ生産は、寒波や台風 20 号ブアローイ、21 号マツウモの影響を含め悪天候により深刻な打撃を受けた(図4)。

(3) メコンデルタ地域の生産量予測

USDA によれば、メコンデルタ地域における 2024/25 年度の総収穫面積は 379 万ヘクタールで、前年度(383 万ヘクタール)に比べわずかに減少した。好天に恵まれ春作の作付けが加速したものの、コメ価格の大幅な下落を受け、冬作の生産量は減少した(表1)。

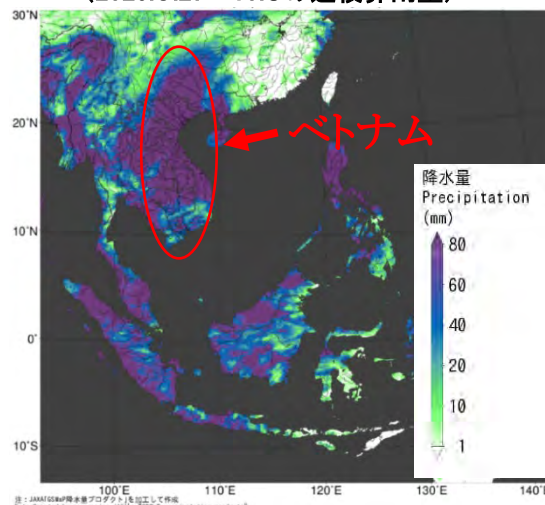
2025 年8月、ベトナムのコメ価格は 2024 年及び 2023 年同期比で約 27%下落し(図5)、この急激な下落は農家の収益性に影響を与え、生産拡大の意欲を削ぐと共に、作付面積全体の減少に寄与することとなった。農業・環境省(MAE)報告書によれば、メコンデルタ地域では約4万ヘクタールの水田が他の作物や養殖業に転用された。USDA は、2025/26 年度のメコンデルタ地域の総収穫面積が 376 万ヘクタールまで減少すると予測している。

図3 ベトナムのクロープカレンダー



資料: ベトナム国家統計局のデータをもとに農林水産省で作成

図4 台風 20 号ブアローイ(上陸日9月 29 日)及び 21 号マツウモ(上陸日 10 月3日)の降水量 (2025.9.27~10.3の週積算雨量)



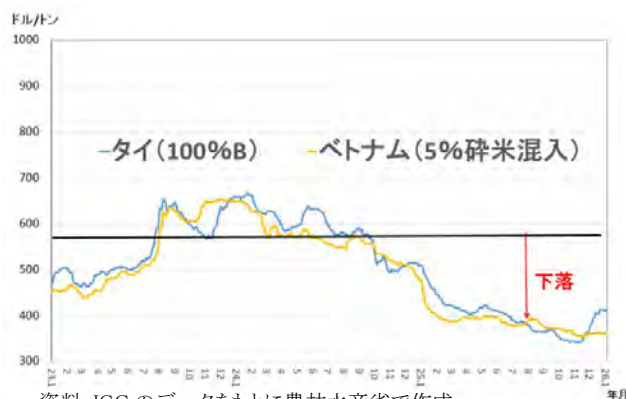
資料: 農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表1 メコンデルタ地域におけるコメ生産量 (2023/24 年度~2025/26 年度)

作付期	2023/2024			2024/2025 (概算)			2025/2026 (予測)		
	収穫面積 (千ha)	単収 (kg/ha)	生産 (万t)	収穫面積 (千ha)	単収 (kg/ha)	生産 (万t)	収穫面積 (千ha)	単収 (kg/ha)	生産 (万t)
春	1,490	7.2	10,773	1,500	7.2	10,800	1,500	7.2	10,600
秋	2,170	5.7	12,400	2,120	5.9	12,500	2,100	5.9	12,550
内主要秋作	1,470	5.8	8,500	1,440	5.9	8,500	1,450	5.9	8,550
内秋作後期	700	5.6	3,900	680	5.9	4,000	650	5.8	3,800
冬	170	5.2	890	170	5.2	880	160	5.3	850
計	3,830	6.3	24,063	3,790	6.4	24,180	3,760	6.3	23,800

資料: USDA「Grain and Feed Quarterly」

図5 ベトナム、タイのコメ輸出価格(FOB)の推



資料: IGC のデータをもとに農林水産省で作成

(4) 首相決定第 1490 号「高品質・低排出稲作 100 万ヘクタールプロジェクト」(2023 年 11 月承認)

ベトナムの高品質米生産を巡っては、複数の政策やプロジェクトが段階的に展開されてきた。その中核をなすのが、2023 年 11 月の首相決定第 1490 号「メコンデルタ地域における高品質・低排出稲作 100 万ヘクタールプロジェクト」である。本プロジェクトは、2030 年までにメコンデルタ地域で計 100 万ヘクタールの高品質・低排出稲作地帯を形成することを目標に掲げている。プロジェクト対象地域は、当時のメコンデルタ地域 12 省1市のうち、ベンチェ省を除く 11 省1市(2025 年の行政区再編前区分)ーアンザン省、キエンザン省、ドンタップ省、ロンアン省、ソクチャン省、カントー市、バクリユウ省、チャヴィン省、ハウザン省、カマウ省、ティエンザン省、ヴィンロン省で、総面積は 100 万ヘクタールに及ぶ。本首相決定は、対象圃場に関するいくつかの条件を規定している。主要要件は、①連続した大区画であること(概ね 50 ヘクタール以上)、②灌漑・排水等のインフラ整備が可能であること、③農家が持続的農法を採用していること等が含まれる。このように、同決定は、メコンデルタ地域の稲作を気候変動に適応しつつ温室効果ガス排出を抑える体系へ転換し、国際市場が求める高品質米の供給基盤を整備することを目的としている。

USDA「Grain and Feed Quarterly」(2025.11.13)によれば、ベトナムのコメ産業は、消費者の嗜好に合致し、インドやタイなどの主要輸出国と競争するため、高収量と品質向上を兼ね備えた新品種の開発を積極的に進めている。市場の需要に応え、メコンデルタ地域のコメ農家は従来の高収量・低品質な品種よりも、香り米や高品質白米の栽培を優先する傾向が強まっているとのことである。

上記首相決定プロジェクトを踏まえた戦略的な転換は、より良い価格での販売による収益性の維持を目的としている。更に、良好な天候と短期間で生育する稲作品種の普及で、メコンデルタ地域の農家は年間2～3回の作付けが可能となる。この柔軟性により、その年毎の状況に応じた作付時期や栽培地域の調整が可能となり、生産性の向上及び干ばつ、塩害、病害虫、市場変動への耐性が強化される。ベトナムは本プロジェクトを通じ、メコンデルタ地域におけるコメ生産の強化、コスト削減、農民所得の向上を目指す長期戦略を策定した。

2 コメの国内消費動向

USDA によれば、2025/26 年度の国内消費量予測は、22.7 百万トンと前年度(22.6 百万トン)に比べ、0.1 百万トン増となっている(図6)。国内消費は、主要な祝祭日の祝賀行事とベトナムを訪れる外国人観光客の増加に支えられている。2025 年1～9月の外国人訪問客数は前年度同期に比べ 21.5%増の 1,540 万人を超え、本観光需要の増加が、食料消費全体、特にコメの消費拡大に好影響を与えている。

一方、ベトナム国家統計局実施の「ベトナム世帯生活水準調査(VHLSS)」によれば、ベトナムの一人当たりのコメ月間消費量は、11.4 kg/人(2006 年)から 6.5 kg/人(2024 年)と着実に減少している。消費者は食生活を多様化させつつあり、主食としてのコメから離れ、より多くのタンパク質、果物、加工食品を食事に取り入れている。本変化により、麺類、ライスペーパー、米粉などの食品加工産業におけるコメの需要増加が見込まれる。人口増加と観光業の拡大もコメの消費量増に寄与している。

図6 ベトナムのコメの国内消費量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.1)をもとに農林水産省で作成

3 コメの輸出入動向

(1) 輸出に係る政策動向

2010 年以前のベトナムでは、主食であるコメは量的拡大が求められ、生産拡大が進められた。80～90 年代におけるコメの輸出拡大は、もっぱら価格の優位性(安価)によるものであり、ベトナム産米の品質は国際的にも評価が低いものであった。

そういった国際市場への対応のため、ベトナム政府は 2000 年 6 月 15 日に第9号政府決議を公布し、農林水産物の高品質化への転換を図った。また 2005 年6月 20 日付第 150 号首相決定におけるコメ政策では、特に輸出用米の主産地であるメコンデルタ地域における灌漑整備事業への投資を増加し、輸出入の増産を掲げた。

2007 年後半からインドがコメの輸出規制を行い、国際米価が高騰したが、ベトナム政府も物価高騰対策として 2008 年にコメの輸出規制を実施している。翌 2009 年以降、以前国際米価が高いこと、またそれに対応して国内生産が刺激され、かつ輸出余力があったことを受け輸出が急増し、2012 年には過去最高の輸出量を達成し、長年世界最大の輸出国であったタイを抜いている。しかし翌 2013 年にタイが農民保護的なコメの担保融資制度を事実上廃止するとタイ米の輸出が急増し、ベトナムのコメ輸出量は激減した。

この輸出の激減を受け、2013 年6月にベトナム政府は「高付加価値化と持続可能な発展に向けての農業部門再編の計画承認についての首相決定第 899 号」を公布し、生産量を維持しつつも、農地の効率的な活用(水田を他の農作物へ転作)を推奨するようになった。2017 年7月には、「2030 年を見据えた 2017～2020 年段階のベトナムのコメ輸出市場の発展戦略の策定に関する第 942 号首相決定」を公布し、全体のコメ輸出量の目標値のみならず輸出市場ごとに品種ごとの具体的な目標値も定められた。2013 年以降、低迷していた輸出量は、2016 年を底に回復し、2023 年には 2012 年の記録を更新し過去最高の輸出量を達成した(図7)*。

※ 「輸出に係る政策動向」については、岡江恭史著「農林水産政策研究所【主要国農業政策・食料需給】プロ研資料 第9号」(2025.3)を参考とした。

図7 ベトナムのコメの輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.1)をもとに農林水産省で作成

(2) 2025/26 年度の輸出予測

USDA によれば、2025/26 年度の輸出予測は、790 万トンに減少する一方、2024/25 年度の輸出量も 800 万トンに下方修正された。2024 年末にインドが輸出制限政策を撤廃したことで、世界のコメ市場は競争が激化している。更に主要輸入国は、食料安全保障強化のため、国内生産者支援を優先している。

例えば、インドネシアはコメの輸入を削減し、フィリピン政府は 2025 年9月1日から 10 月 30 日まで通常米及び精米の輸入の 60 日間停止措置を実施し、その後、2025 年末まで当該措置を延長した。その結果、輸出価格は更に大幅に下落した。

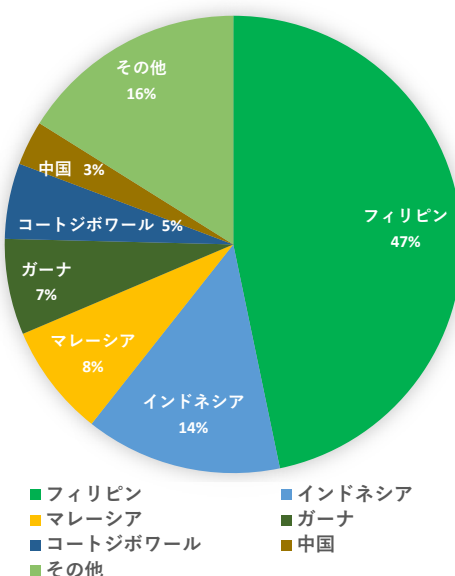
2025 年8月時点の5%碎米白米輸出価格は約 390 米ドル/トンで、前年同期比 34%減となった。多くの貿易業者や輸出業者は価格下落が利益率を圧迫していると懸念を表明しており、一部は全く利益がでていないと報告している。幸いなことに、当該期間については、良好な生産条件により、ベトナムのコメ産業は作付体系を積極的に調整し、高品質で香りの高いコメに注力しながら生産コストを削減することができた。この戦略的転換により、輸出量がわずかだが高い水準を維持することが出来た。

2025 年1月から8月までの8カ月間で、ベトナムは 640 万トン进行輸出し、前年同期比4%の増加となった。アジアとアフリカ諸国は、依然としてベトナム産米の最大の輸出市場国であり、それぞれ 67%と 27%を占めている。

ベトナム税関総局によれば、2025 年1～12 月にお

いては、フィリピンは依然として最大の輸入国であり、ベトナム産米輸出の 40%を占めている(表2)。しかし、フィリピンのコメ輸入停止政策は、今後数カ月間のベトナム産米の輸出量に悪影響を及ぼす可能性もあると懸念されている。同期間中、インドネシアとマレーシアへのコメ輸出は大幅に減少し、前年同期比でそれぞれ約 96%、28%減少した。一方、コートジボワールと中国への輸出は大幅に増加し、前年同期比でそれぞれ約 18%、62%増加した。ガーナ向け輸出も顕著な伸びを示し、約 92 万トン(50%増)を記録した。ベトナムの市場多様化努力が功を奏し、世界第2位のコメ輸出国としての地位を維持している。

図 8 ベトナムのコメ輸出先国
(2023/24 年度)



資料:ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

表2 ベトナムのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年1月～12月)			2024/25年度 (2025年1月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
フィリピン	422.1	46.7	フィリピン	320.7	39.8
インドネシア	125.7	13.9	コートジボワール	105.5	13.1
マレーシア	71.9	8.0	ガーナ	91.9	11.4
ガーナ	61.3	6.8	中国	74.7	9.3
コートジボワール	48.3	5.3	マレーシア	51.5	6.4
中国	28.5	3.2	セネガル	16.8	2.1
その他	145.5	16.1	その他	145.1	18.0
計	903.4	100.0	計	806.3	100.0

資料:ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

(3) コメの輸入動向

USDA によれば、2025/26 年度のコメ輸入量は、前年度(350 万トン)に比べ、60 万トン増の 410 万トンと予測されている。

ベトナム税関データによると、2025 年1～8月期の精米換算輸入量は約 297 万トンで、前年同期比約 68%増加した。主にカンボジア産である玄米は精米換算 250 万トンに達し、総輸入量の 85%を占めた。この量は前年同期の約2倍である。しかし、貿易関係者は、記録されていない越境取引のため、カンボジアからの実際の輸入量は公式数値を上回っているとみている。

カンボジアコメ連盟(CRF)によれば、カンボジアは 2025 年1～8月までの8カ月間で、484 万トンの玄米を近隣諸国へ輸出したが、主な輸出先はベトナムで、当該期間におけるカンボジアのコメ輸出総量の 75%が国境を越えた玄米取引が占めるとのことである。農家は乾燥・貯蔵・精米能力が不足しているため、収穫後すぐにコメを売却することが多く、輸出物流インフラの不足もこの慣行を助長しており、貿易業者はトラックや船で、玄米を、国境を越えて輸送している。

4 今後の見通し

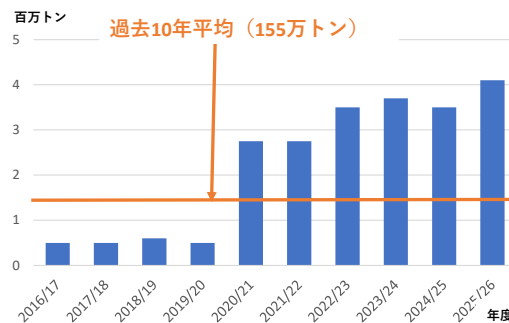
(1) 今後のコメの生産見通し

メコンデルタ地域は、ベトナム国内のみならず、アジアにおける主要なコメ供給・輸出拠点として、世界的にも重要な役割を果たしてきた。

ベトナムコメセクター協会(VIETRISA)によると、今後のメコンデルタ地域のコメ生産は内陸部を中心に、高品質・低排出型稲作を集中的に展開する地域を形成し、周辺では一部作物転換や限定的な輪作を組み合わせることで、デルタ全体としての持続性を確保していくとのことである。

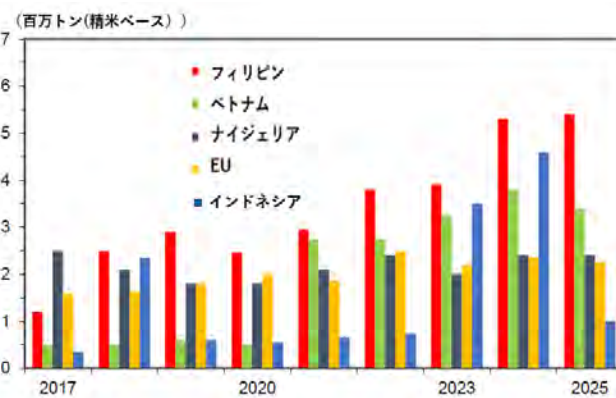
また、カントー市農業環境局(DAE)によれば、将来に向け、三期作に固執するのではなく、最大二期作とすることで塩害リスクの高い時期の作付けを回避すること、また、稲作持続のための水管理・灌漑インフラへの投資が今後一層重要とのことであった。

図9 ベトナムのコメの輸入量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.1)をもとに農林水産省で作成

図10 世界の主要コメ輸入国における輸入量の推移



資料 USDA「Rice Outlook」(2025.2.13)より

写真1 耐塩性品種(ST25)を栽培しているメコンデルタ地域のソクチャン地域の圃場。乾季にはエビの養殖を行う(2025.12.4 撮影)。



カントー市ソクチャン地域の農家では、2010年頃から「1rice(コメ)-1shrimp(エビ)」体系へ移行し、雨季には淡水で耐塩性コメ品種のST25を栽培し、乾季には汽水に切替、同じ圃場でブラックタイガーエビを養殖している。このように、稲作と水産養殖を季節的に組み合わせることで、塩水浸入により稲作が制約される時期においても圃場利用が継続される。このような営農形態は、塩害が進行する中での持続的な生計モデルの選択肢となり得ることが示唆される。ベトナムは、気候変動の影響を受けつつも、コメ生産国、輸出国として、様々な政策を打ち出しながら、引き続きその地位を継続していくと考える。

写真2 コメの外包装にエビの絵を記載し、エビの栄養素を含む付加価値米として販売(2025.12.4撮影)。

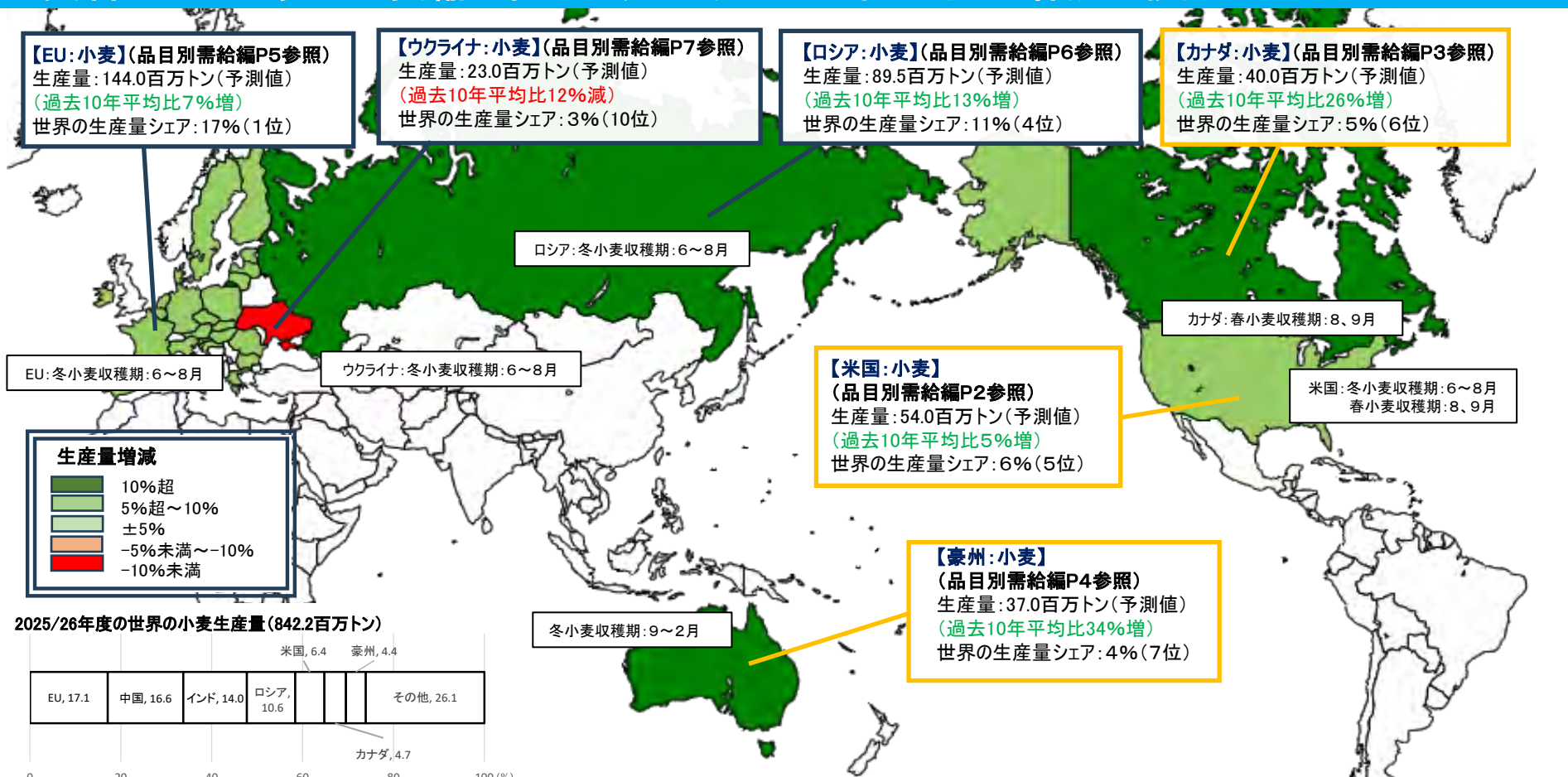


(2) 2025/26 年度のコメの輸出入見通し

USDA によれば、2025/26 年度の世界のコメ輸出では、1位インド、2位ベトナムとなる見込みであり、ベトナムはタイを抜き、引き続き世界第2位の地位を占めると予測されている。ベトナムは、塩害等の被害が懸念されるものの、その高い生産能力、したたかな輸出入戦略により、アジアにおいて重要なコメの貿易拠点となってきた。これまでコメの生産及び輸出においてアジアで主要国として位置してきたタイを抜き、今後もコメの主要輸出国としての地位を維持することが想定される。

また、輸入においては、カンボジアからの輸入が今後も継続することが予測され、世界のコメ輸入においても、ベトナムはフィリピンに次ぐ、コメの輸入国を維持することが予測される。今後もベトナムのコメの輸出入動向及びその政策を注視していきたい。

資料1ー1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(1月版)



2025/26年度の世界の小麦生産量(842.2百万トン)



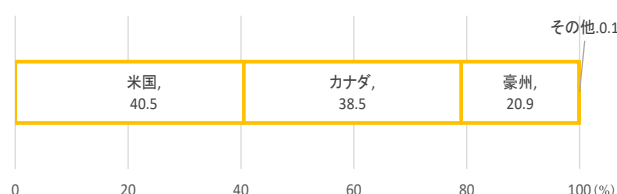
2025/26年度の世界の小麦輸出力(219.8百万トン)



2025/26年度の世界の小麦輸入量(215.5百万トン)

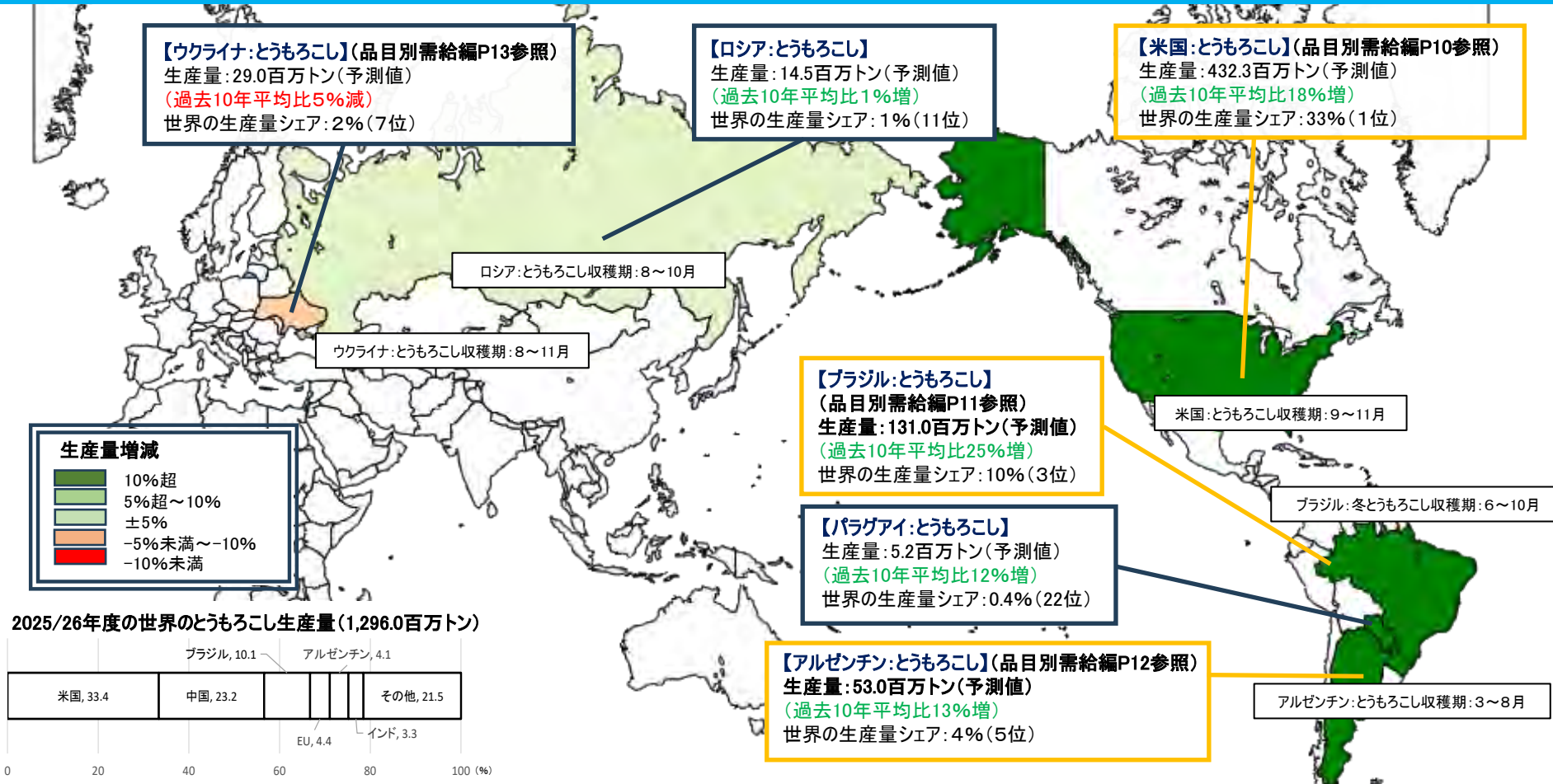


2024年の日本の小麦輸入量(5.2百万トン)

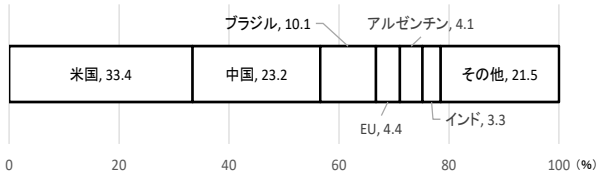


- 2024年度の日本の小麦輸入量は533万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(650万トン、うち食用は512万トン)の82.0%を占める。
- 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は256kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の11.4%を占める。

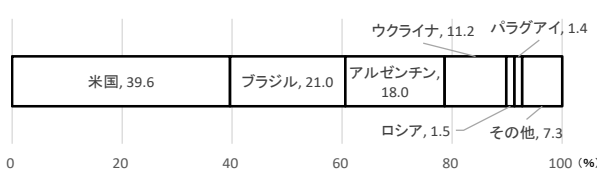
資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(1月版)



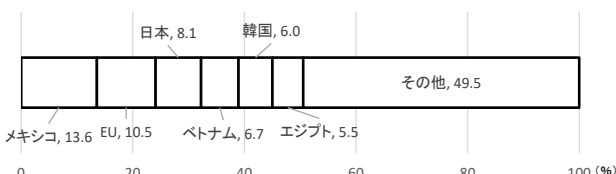
2025/26年度の世界のとうもろこし生産量(1,296.0百万トン)



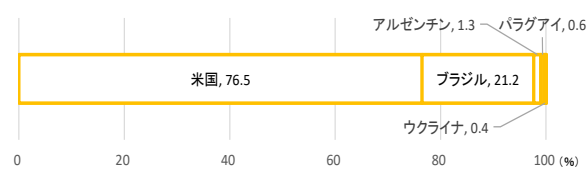
2025/26年度の世界のとうもろこし輸出量(205.1百万トン)



2025/26年度の世界のとうもろこし輸入量(190.2百万トン)



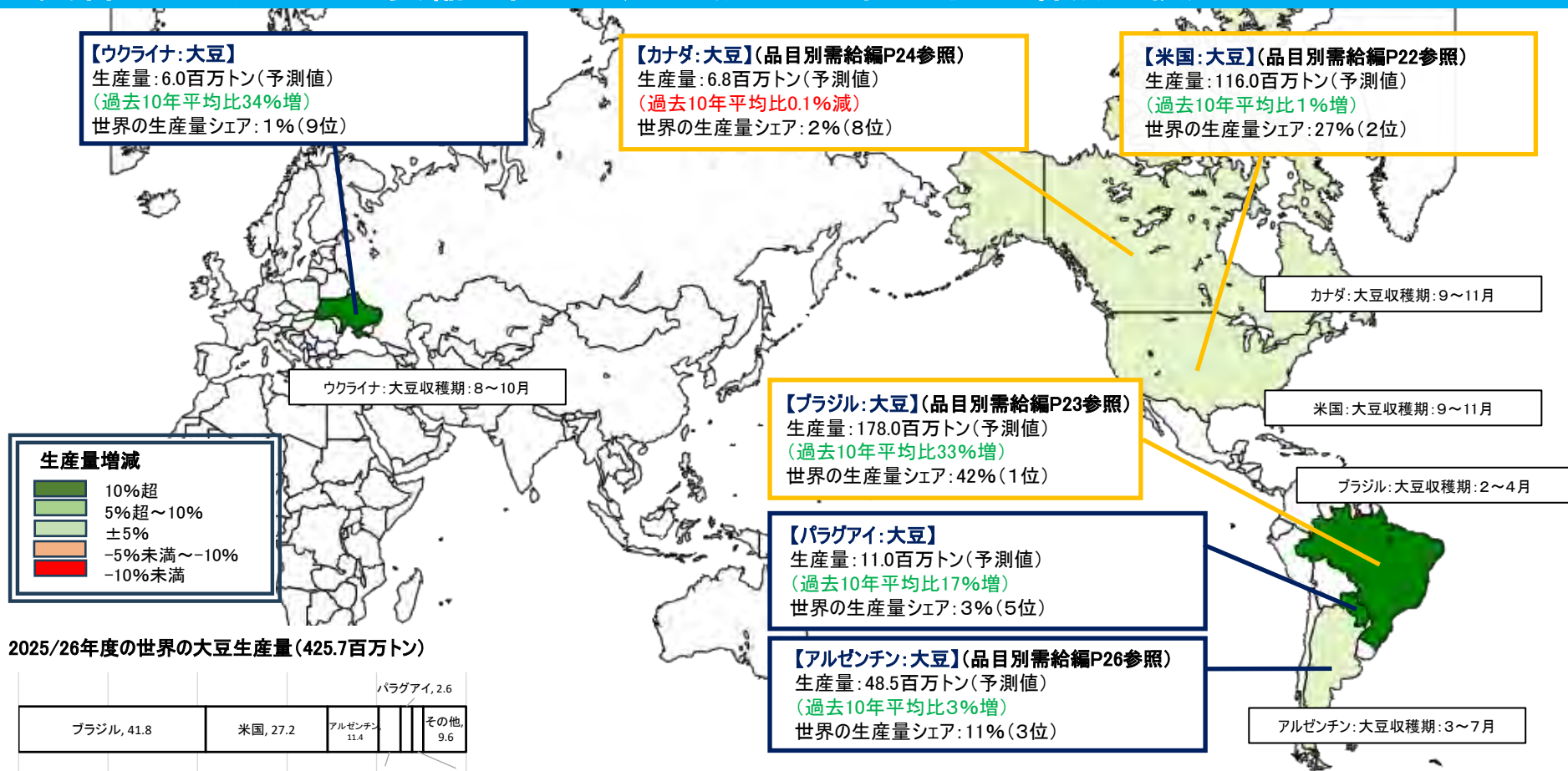
2024年の日本のとうもろこし輸入量(15.3百万トン)



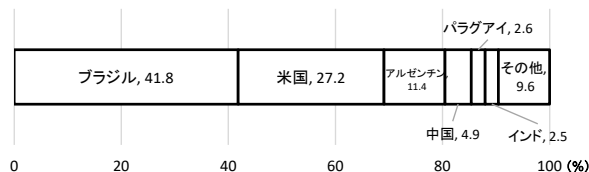
○ 2024年度の日本のとうもろこし輸入量は1,522万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,518万トン、うち飼料用は1,194万トン)のほぼ全量を占める。

出典:USDA「PS&D」(2026.1)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(1月版)



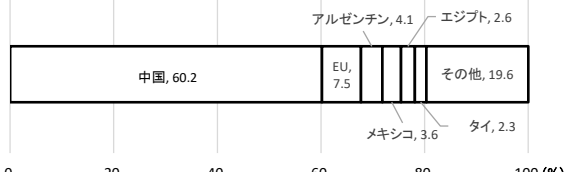
2025/26年度の世界の大豆生産量(425.7百万トン)



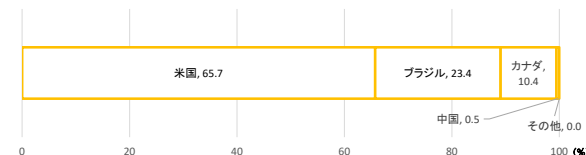
2025/26年度の世界の大豆輸出货量(187.6百万トン)



2025/26年度の世界の大豆輸入量(186.0百万トン)



2024年の日本の大豆輸入量(3.17百万トン)



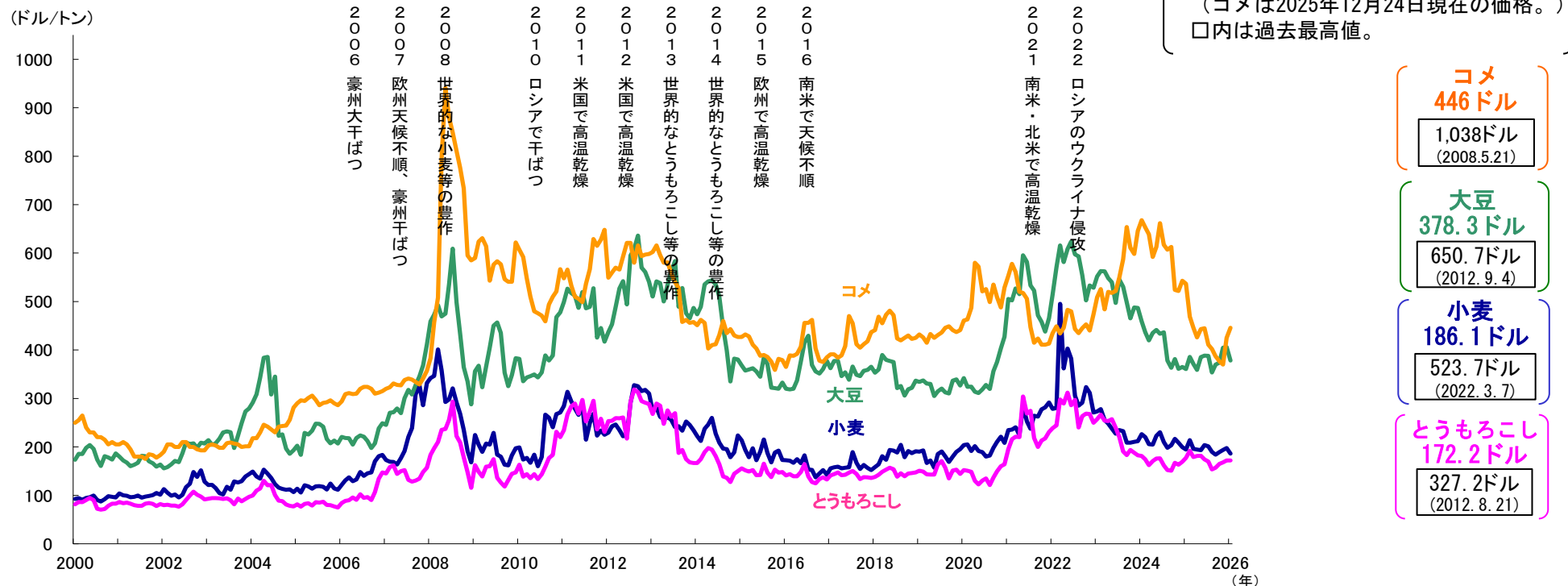
- 2024年度の日本の大豆輸入量は309万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(359万トン、うち大豆油などの加工用は256万トン、食用は88万トン)の86.2%を占める。
- 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は58kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の2.6%を占める。

出典:USDA「PS&D」(2026.1)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料 1－4 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は下落。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで下落。とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで下落。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、2024年以降、インドの輸出規制解除等を受け下落。2025年11月以降、タイの洪水被害、タイ政府のコメ政策管理委員会の政策措置（市場価格を超える価格での余剰米の買い上げ等）等を受け上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要等により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、今回のコメは2025年12月24日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料 1-5 サプライチェーン等に関する状況

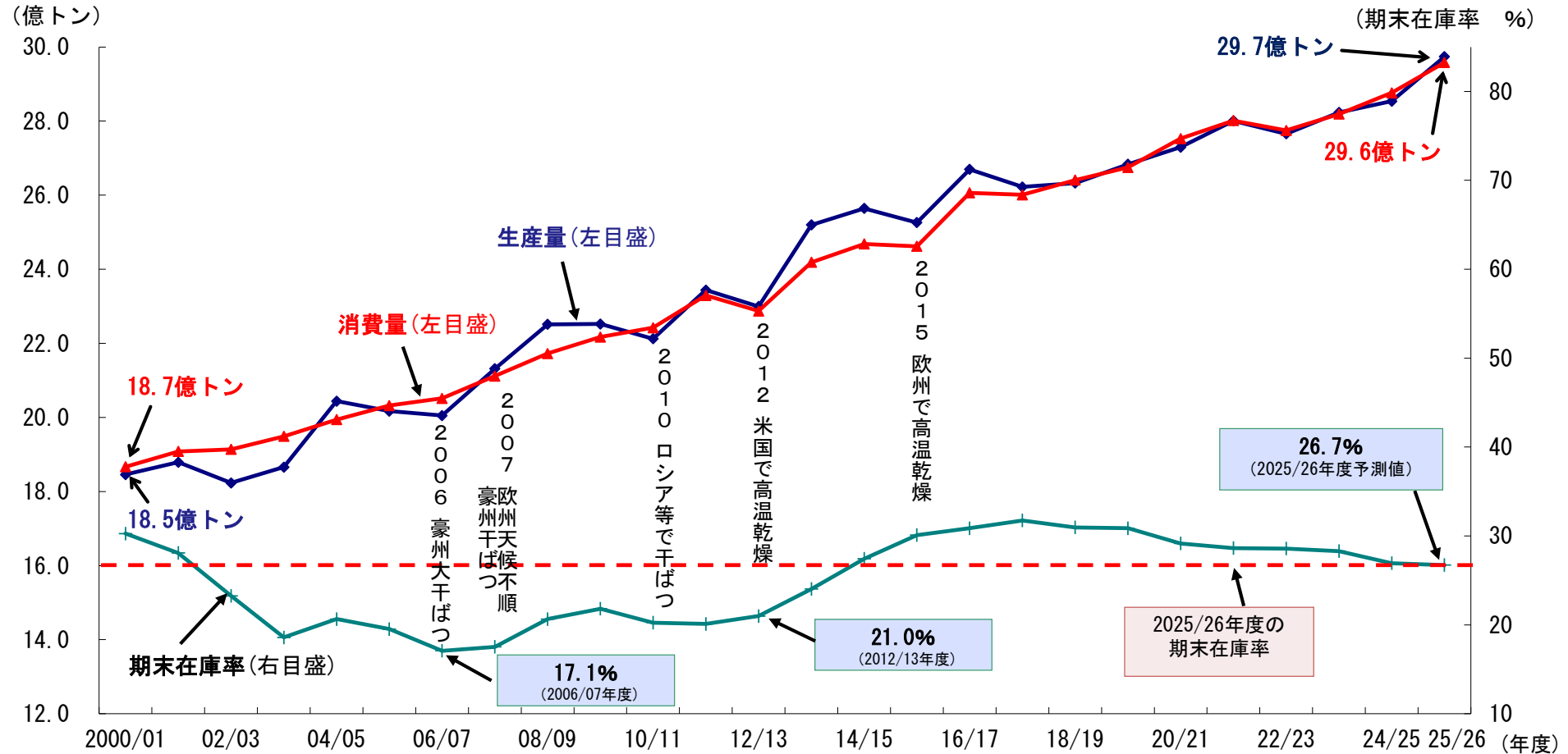
○サプライチェーン等に大きな影響を与える情報は特段なし（2025年12月23日時点）

生産国の情報	チョークポイント情報	その他
<p>○米国</p> <p>①米国ミシシッピ川上流の航行が11月下旬で終了。来季は春の水位回復後に再開予定。</p> <p>②12月25日現在、コロンビア川流域の航行に関し影響を与える情報なし。上下流域の流量は、最近28日間の平均と比較し、「普通」や「普通よりかなり多い」を示すポイントが大幅に増加。</p> <p>○ブラジル</p> <p>①ラニーニャ現象に起因する不規則な降雨の影響で主要な大豆生産地域で作付けが遅延。2025/26年生産見通しを引き下げる識者も出ている。</p> <p>②12月25日現在、アマゾン川の航行に関し影響を与える情報なし。雨季が終了し低水位期に入ったが、流量は全ての監視ポイントで「普通」。</p> <p>○アルゼンチン</p> <p>①降雨の影響で大豆の作付けが遅延。11月26日現在の作付進捗率は11%（前年同期36%、過去5年平均44%）。作付面積が100万ヘクタール程度減少する可能性。</p> <p>②パラナ川の水位は、12月に上流で雨が多くなる予測のため、中水位水準まで回復する可能性が高い。</p> <p>○豪州</p> <p>DP World（ドバイに本拠地を置く港湾運営会社）がWA州で1,800万豪ドルの鉄道接続プロジェクトを開始。2025年12月に着工し、フリーマントル港のコンテナ施設とNorth Quay鉄道ターミナルを直結し、鉄道輸送比率を22%から33%に向上させ、年間2万台以上のトラック輸送削減を目指す。</p> <p>○マレーシア</p> <p>①洪水の影響は局所的で11月のパーム油生産量は前月比でやや減少と予測。大手プランテーション企業も洪水被害は限定的で操業は概ね安定。</p> <p>②パーム油生産量が2025年に初めて2,000万トンに達する見込み。生産量増加は労働力改善と気象条件の安定によるもの。</p> <p>○インドネシア</p> <p>11月末、スマトラ島アチェ州ほかで洪水・地滑りが発生し、1,000人超が死亡・行方不明となった。この被害を受け、インドネシア環境省は被害拡大の一因として森林の違法伐採があるとの認識を示している。北スマトラ州中央タパヌリにあるパーム油プランテーション及び製油所の操業区域を封鎖し監視措置が取られた。</p>	<p>○パナマ運河</p> <p><u>パナマ運河の通航に関し特段問題なし</u>。</p> <p>11月のパナマ運河通航数は、1日平均33.9隻と、前月33.6隻、前年同月33.1隻と比べわずかに増加。</p> <p>○スエズ運河</p> <p>12月、CMA CGMとマースクの大型コンテナ船がスエズ運河を約2年ぶりに通過。ただし、現時点で定期航行の再開予定はない。</p> <p>○バブ・エル・マンデブ海峡周辺</p> <p>バルク船「Bobic」はバブ・エル・マンデブ海峡で15隻前後の小型艇による海賊襲撃を受けたが、船上警備チームが応戦し撃退。乗組員は全員無事であるものの、海運各社の同航路再開に慎重。</p> <p>○マラッカ・シンガポール海峡</p> <p>海賊行為が2024年初頭に前年同期と比べ50%減少。</p>	<p>○米中関係</p> <p>11月24日の米中首脳の電話会談の翌日に中国の国営企業COFCOが米国産大豆の調達（2026年1月の出荷契約）を実施。数量は10～15貨物。1貨物あたり約6万トン規模として約60～90万トン。</p> <p>○輸送コスト</p> <p>①穀物含むバルク船は、中国沖での天候の影響による遅延を受けた供給圧迫等により、11月末に20か月ぶりの高値に達した。フーシ派による商船攻撃により、一部船舶は喜望峰経由となり、貨物輸送時間も長くなっている。運賃は11月末の高値からやや緩和したものものの、2026年初めまで市場全体の緊張が続く見通し。</p> <p>②12月4日の記事によれば、黒海地域でロシア関連船舶への攻撃が相次いだことで、黒海地域での寄港費用がここ数日で3倍以上に増加。保険料は従来の船舶価値の0.25～0.3%から最大1%へ急騰。</p>

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2025/26年度は、2000/01年度に比べ1.6倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2025/26年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回るものの、前年度より減少し、26.7%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

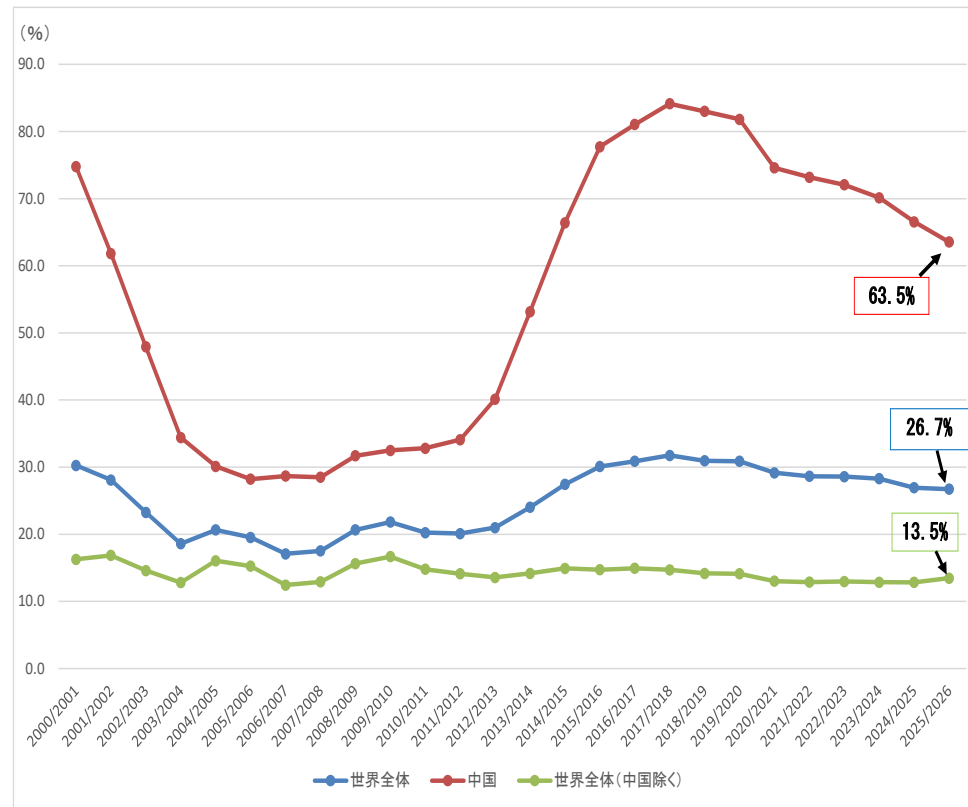


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(January 2026)、「PS&D」

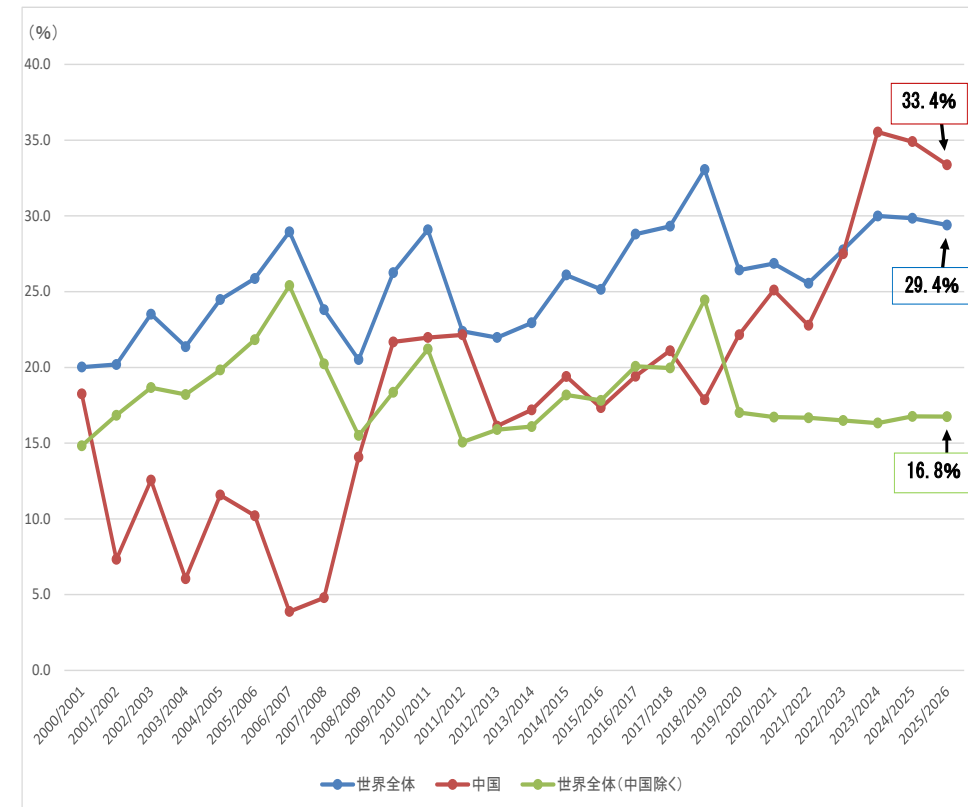
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2026)

注: 1) 穀物とはとうもろこし、小麦、コム等(大豆除く)。

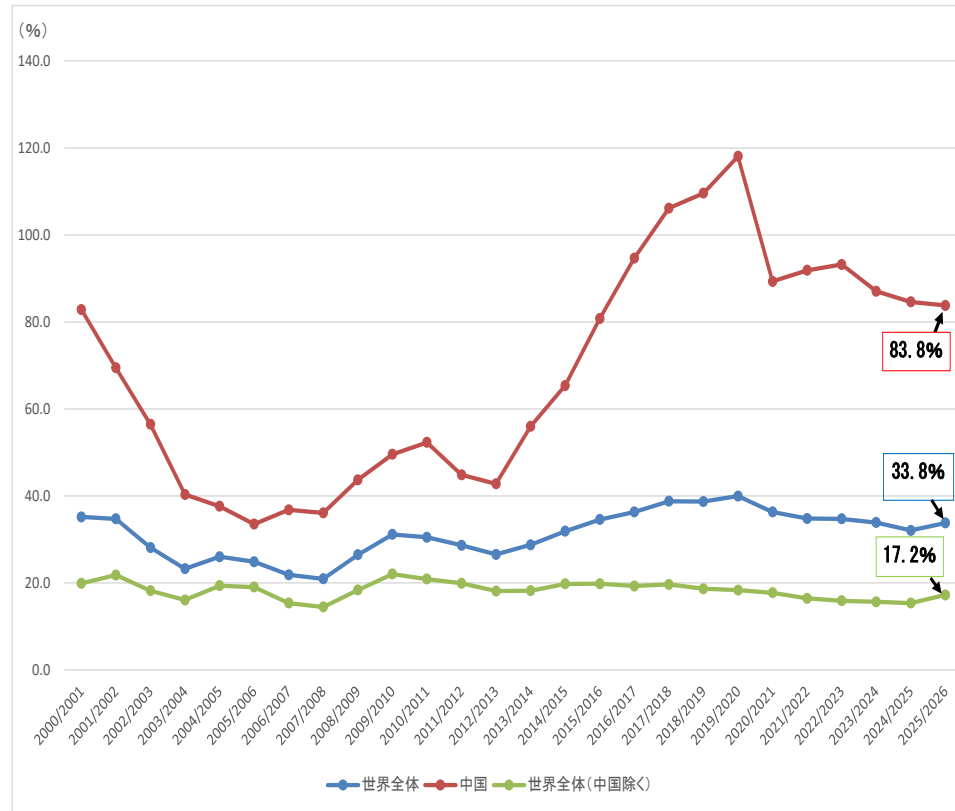
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

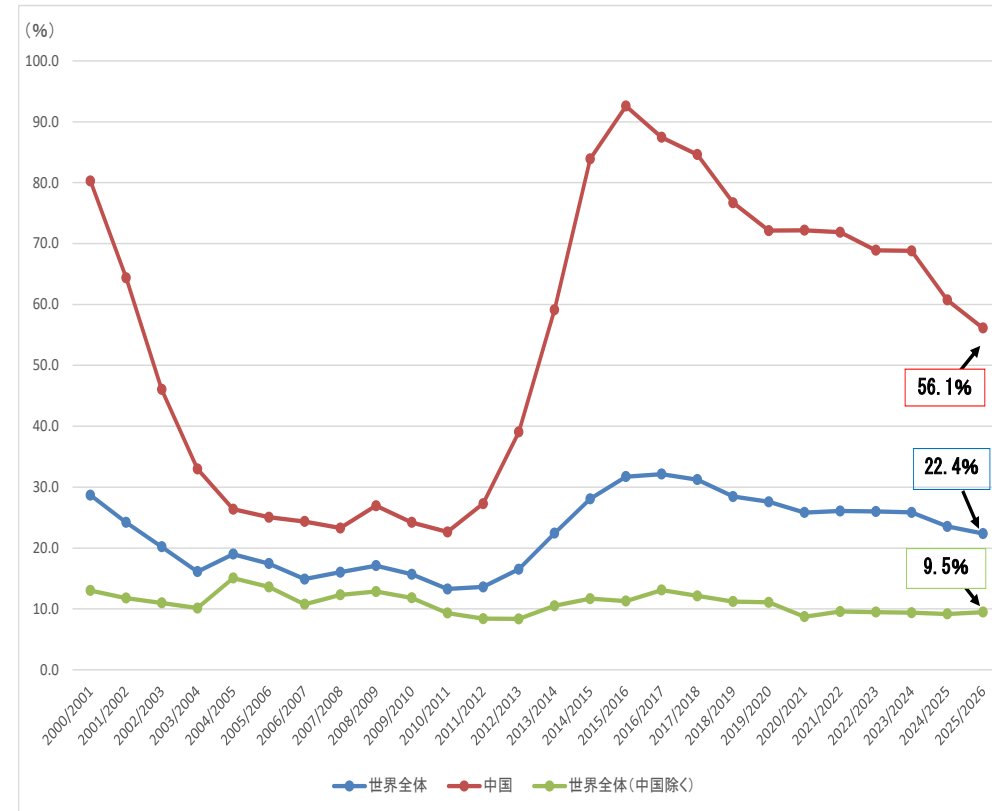
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 12, 2026)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

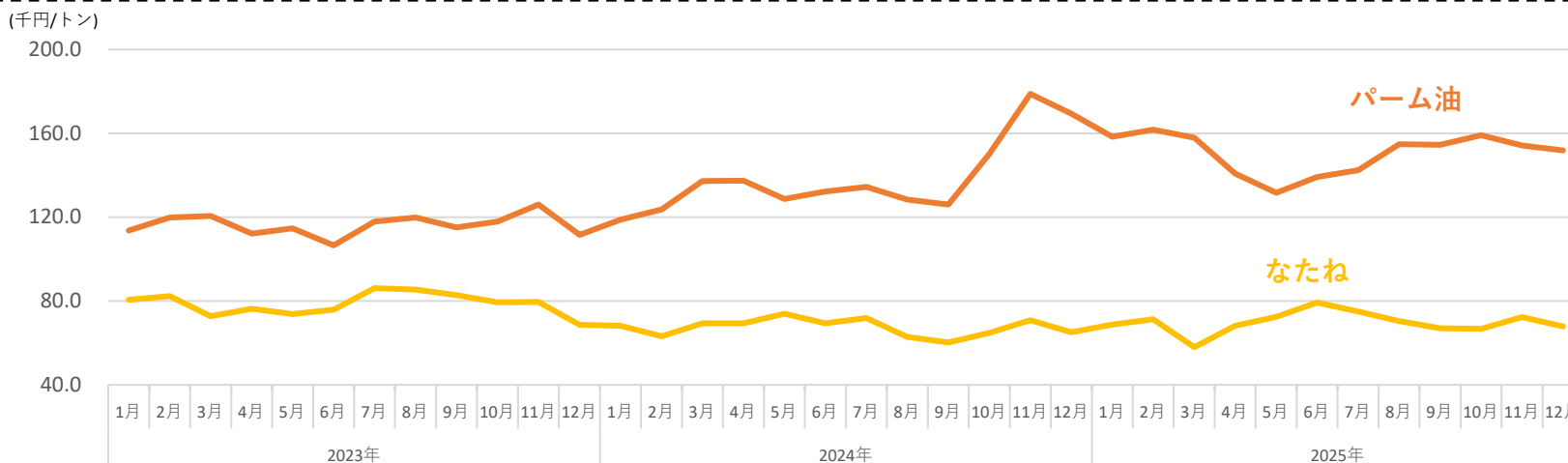
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4－1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月に一時的に上昇したが、その後マレーシアとインドネシアのパーム油生産量増加や在庫の増加見通し等により下落。2025年6月以降、インドからの堅調な祝祭需要等により再び上昇傾向で推移したが、直近ではマレーシアの輸出量減少等による在庫の増加により、下落に転じている。
- なたねについては、概ね安定している。
- コーヒーについては、ブラジルの天候不順による収穫量減少等により2024年以降上昇傾向。2025年3月以降、ブラジルの生産増加見込み等により下降傾向であったが、米国関税政策をめぐる不確実性等により上昇傾向に転じたものの、世界的な供給見通しの改善等により下降傾向。



2026年1月22日現在
□内は2023年1月以降
の最高値。

パーム油
151.8千円/トン

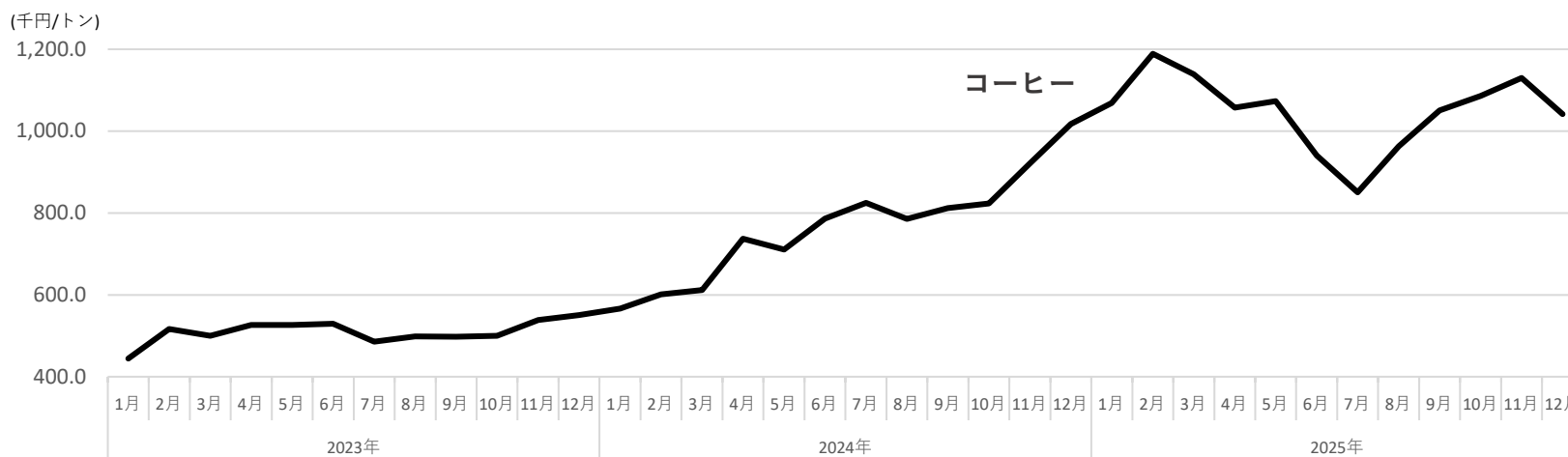
178.8千円/トン
(2024.11)

なたね
67.8千円/トン

86.2千円/トン
(2023.7)

コーヒー
1041.6千円/トン

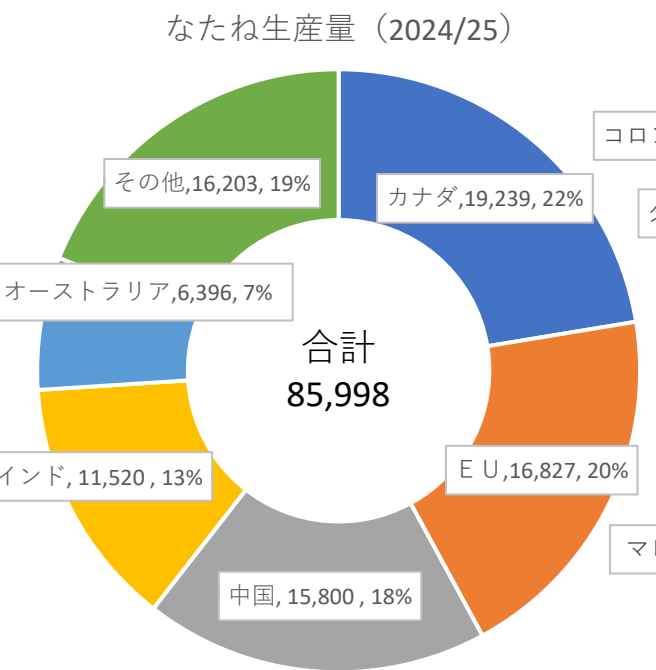
1188.8千円/トン
(2025.2)



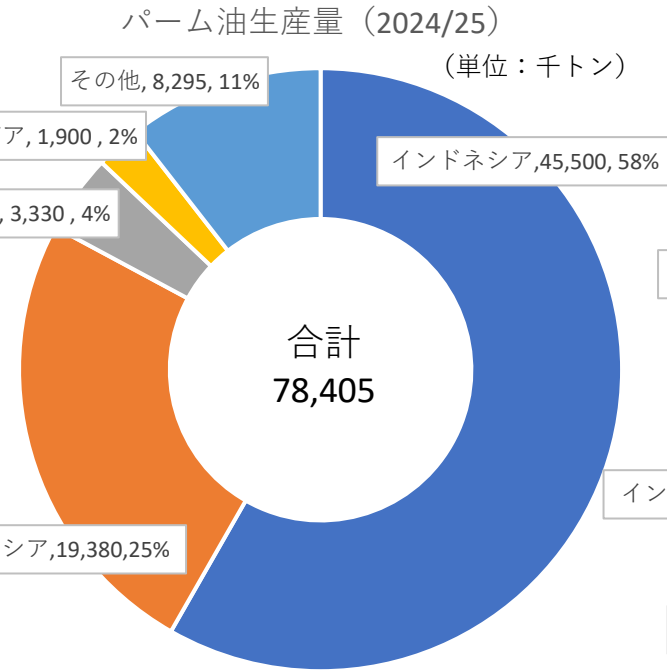
※ なたねの国際価格についてはカナダウィニベグなたね市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

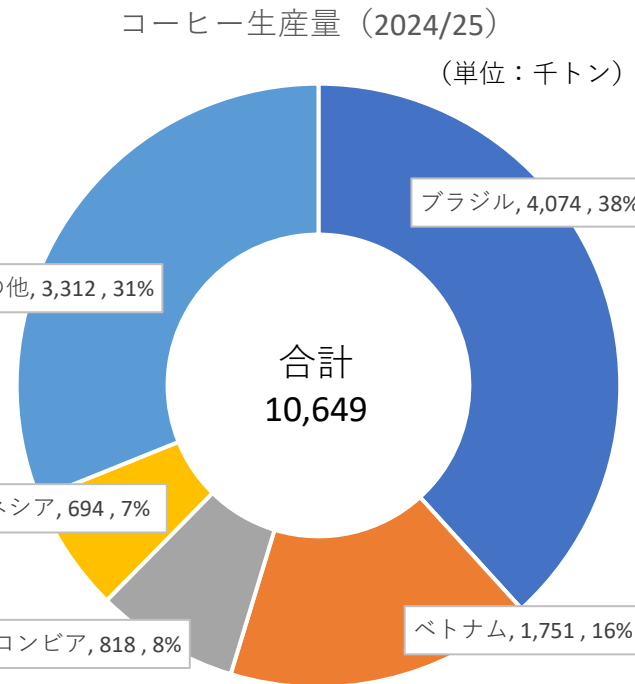
○主要生産国の生産状況（単位：千トン）



※米国農務省（PS&D）
2026年1月時点



※米国農務省（PS&D）
2026年1月時点



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料
2025年7月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2024年））

なたね	輸入量	割合
オーストラリア	1,141	54.2%
カナダ	963	45.8%
その他	0	0.0%
合計	2,104	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	561	85.6%
インドネシア	94	14.4%
その他	0	0.0%
合計	655	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	130	36.1%
ベトナム	97	26.9%
コロンビア	36	10.0%
その他	97	26.9%
合計	360	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1	68.7	71.2	58.0	68.2	72.4	79.2	74.9	70.4	67.0	66.7	72.3	67.8
前月比	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9	105.7	103.7	81.4	117.6	106.3	109.4	94.6	93.9	95.2	99.6	108.4	93.7
前年同月比	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9	100.7	112.9	83.5	98.3	98.0	114.2	104.2	112.1	111.4	103.0	102.1	104.3

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4	158.4	161.8	157.8	140.9	131.7	139.2	142.5	154.8	154.5	159.0	154.2	151.8
前月比	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7	93.5	102.2	97.6	89.2	93.5	105.7	102.3	108.7	99.8	102.9	97.0	98.4
前年同月比	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8	133.4	130.8	115.0	102.5	102.3	105.3	106.0	120.7	122.6	106.0	86.2	89.6

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2023年												2024年												2025年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コーヒー	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5	812.1	823.4	920.3	1017.3	1068.8	1188.8	1138.7	1057.4	1072.9	940.6	850.2	963.0	1050.9	1085.8	1129.9	1041.6
前月比	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2	103.4	101.4	111.8	110.5	105.1	111.2	95.8	92.9	101.5	87.7	90.4	113.3	109.1	103.3	104.1	92.2
前年同月比	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7	163.3	164.6	170.9	184.9	188.8	197.8	186.2	143.5	150.9	119.6	103.1	122.6	129.4	131.9	122.8	102.4

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和7年12月の国内の主な加工食品の消費者物価指数は114.4～162.0(前年同月比は-4.8%～15.5%)の範囲内。

消費者物価指数（総務省）

【参考】
食品価格動向調査（農林水産省）

	R5	R6	R7	直近6か月						
品目	年平均	年平均	年平均	R7 7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	118.7	122.0	126.8	127.4	127.0	126.5	126.3	126.5	126.6	3.8%
即席めん	119.7	122.4	119.4	120.5	120.6	119.1	119.2	120.0	114.4	-4.8%
豆腐	114.6	118.2	121.4	121.8	122.0	121.9	122.7	123.1	123.6	3.8%
食用油 (キャノーラ油)	160.2	148.6	149.2	150.0	144.7	147.0	150.3	154.6	151.9	1.3%
みそ	108.1	113.6	119.5	118.3	118.1	118.7	125.4	128.4	128.3	12.5%
マヨネーズ	149.5	153.1	155.8	153.0	152.3	159.0	163.5	163.5	162.0	5.8%
チーズ	131.1	133.0	139.1	139.9	145.1	144.5	144.3	137.5	134.5	4.8%
バター	108.6	119.7	119.7	133.5	137.6	138.4	139.2	139.1	138.1	15.5%
生鮮食品を 除く食料	112.6	116.9	125.2	126.0	126.4	126.7	127.7	128.3	128.2	6.7%

資料：総務省「消費者物価指数」
注：令和2年の平均値を100とした指数で表記。

	R5	R6	R7	直近7か月								
品目	年平均	年平均	年平均	R7 7月	8月	9月	10月	11月	12月	R8 1月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	114.5	117.9	124.3	125.3	124.7	124.9	123.8	124.5	124.5	124.5	0.0%	1.6%
即席めん	117.5	118.8	117.0	118.5	119.1	116.1	117.9	117.3	114.9	117.9	2.6%	2.1%
豆腐	113.0	116.4	119.3	118.5	119.3	118.9	120.2	120.2	119.8	120.7	0.8%	1.9%
食用油 (キャノーラ油)	159.4	145.8	142.0	141.3	142.2	142.9	143.8	144.1	144.1	144.1	0.0%	2.7%
みそ	105.9	109.5	114.9	113.6	113.1	114.2	123.8	126.7	125.2	126.5	1.0%	15.2%
マヨネーズ	139.8	141.2	142.5	139.6	139.9	145.4	149.2	149.2	148.9	150.3	0.9%	6.9%
チーズ	126.5	127.0	133.8	134.2	138.2	139.2	138.7	136.2	129.8	133.7	3.0%	4.6%
バター	108.0	119.3	131.4	136.2	138.5	139.4	139.8	140.1	137.4	138.9	1.1%	15.7%

資料：農林水産省「食品価格動向調査」
注1：令和2年の平均値を100とした指数で表記。
注2：調査は原則、各都道府県10店舗で実施。

資料6 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を『月報 畜産の情報』（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html）で公表

○2026年2月号（1月26日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

◆牛肉

- （米国）25年11月の牛肉生産量はと畜頭数の減少などからかなりの程度減少
- （カナダ）25年7月の総飼養頭数はわずかに増加、牛群再構築の動き
- （豪州）25年の牛肉輸出量、1カ月を残し年間輸出量の最高値を更新
- （ブラジル）25年1～11月の牛肉輸出量は好調を維持

◆豚肉

- （米国）25年11月の豚肉生産量はと畜頭数の減少などから前年同月比4.4%減
- （EU）25年11月の豚枝肉卸売価格、過去5カ年平均を下回る
- （中国）繁殖雌豚頭数はわずかに減少、豚肉輸入量もやや減少

◆牛乳・乳製品

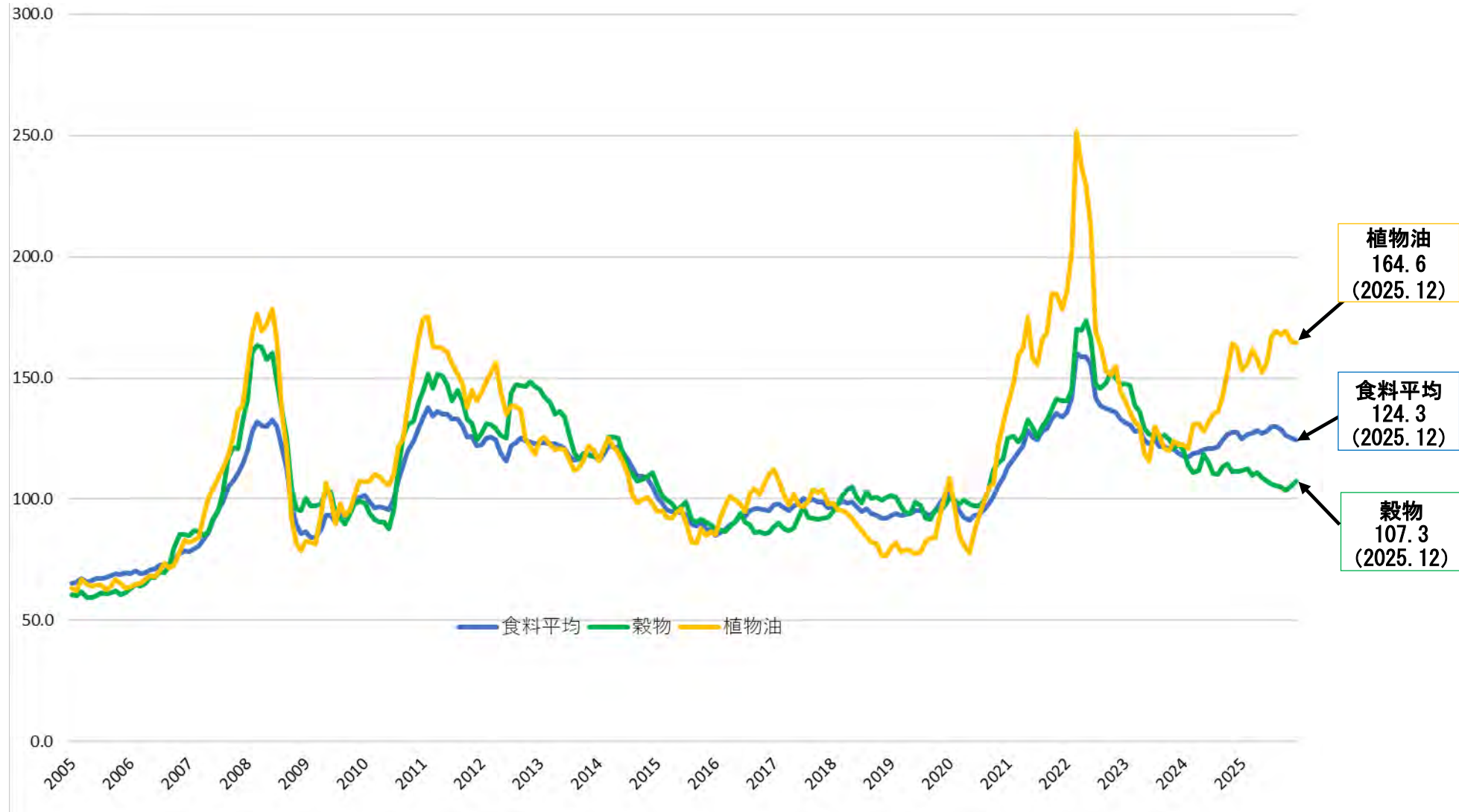
- （EU）生乳取引価格、19カ月ぶりに前年同月を下回る
- （豪州）生乳生産量は低水準、輸出量はバターおよびバターオイルが大幅に減少
- （NZ）25/26年度の生産者支払乳価、2カ月連続で引き下げ

◆飼料穀物

- （世界・トウモロコシ）25/26年度は消費量の上方修正から期末在庫は下方修正
- （世界・大豆）大豆生産量の上方修正から期末在庫も上方修正
- （米国）米国は生産量の増加などから期末在庫は大幅に増加
- （ブラジル）25/26年度の大豆生産量は過去最大の見込み
- （中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2025.12)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

ブラジルの大豆輸出について

ブラジルは、世界最大の大豆生産・輸出国として知られています。今回は、ブラジルの大豆が生産地から輸出に至るまで、どのような輸送ルートを経ているのかについて、ご紹介します。

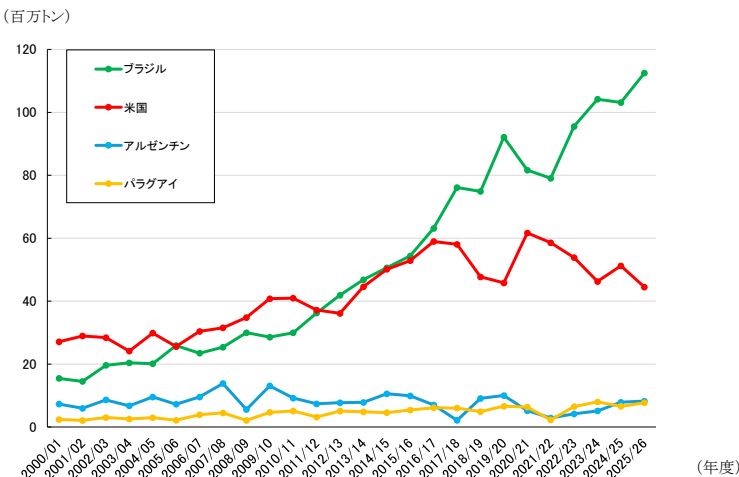
1 大豆の輸出状況

ブラジルでは南部から北東部にかけて全国的に大豆が生産されており、USDA によれば、2025/26 年度の生産量は 178.0 百万トンと見込まれ、これは世界第一位となっています。また、豊富な生産量を背景に、世界の大豆輸出量のおよそ6割をブラジルが占め、大豆の主要な輸出国（図1）でもあります。ブラジルは、世界の油糧作物市場で米国の最大の競争相手となっています。ブラジルでは、競争力を維持するため、輸送コスト削減を目的とした輸送インフラの継続的な改善が進められてきました。2007 年以降のインフラ整備の進展により、国内の輸送コストが低下しました。これにより、2013 年以降のブラジルの大豆は価格競争力において優位性を保ち、現在では米国の大豆輸出量を大きく上回っています。そして、2024 年のブラジルの大豆輸出量は2013 年に比べ2倍以上にまで増加しています。州別に見ると、主要大豆生産地である中西部のマット・グロッソ州の大豆輸出が最も多く（表1）、全体のおよそ 25%を占めています。

表1 ブラジルの州別大豆輸出量の推移

州	地域	2022		2023		2024	
		輸出量 (千トン)	シェア (%)	輸出量 (千トン)	シェア (%)	輸出量 (千トン)	シェア (%)
マット・グロッソ州	中西部	24,765	31.5	28,336	27.8	24,724	25.0
パラナ州	南部	5,038	6.4	11,606	11.4	12,134	12.3
リオ・グランデ・ド・スール州	南部	5,383	6.8	7,846	7.7	10,599	10.7
ゴイアス州	中西部	10,027	12.7	11,459	11.2	10,550	10.7
ミナス・ジェライス州	南東部	5,503	7.0	6,249	6.1	6,785	6.9
マット・グロッソ・ド・スール州	中西部	3,574	4.5	7,696	7.6	6,601	6.7
バイーア州	北東部	4,521	5.7	4,554	4.5	5,514	5.6
マラニオン州	北東部	3,449	4.4	4,187	4.1	4,367	4.4
サンパウロ州	南東部	5,060	6.4	5,767	5.7	3,960	4.0
パラー州	北部	2,424	3.1	3,199	3.1	3,490	3.5
トカチンス州	北部	3,144	4.0	3,634	3.6	3,088	3.1
ピアウイ州	北東部	1,940	2.5	2,406	2.4	2,624	2.7
ロンドニア州	北部	1,721	2.2	2,152	2.1	2,234	2.3
サンタ・カタリーナ州	南部	1,025	1.3	1,568	1.5	1,501	1.5
ブラジル連邦区	中西部	170	0.2	256	0.3	233	0.2
その他		984	1.2	951	0.9	400	0.4
計		78,726	100.0%	101,865	100.0%	98,808	100.0%

図1 大豆主要輸出国における輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」をもとに作成

資料:USDA「Soybean Transportation Guide
BRAZIL 2024」をもとに作成

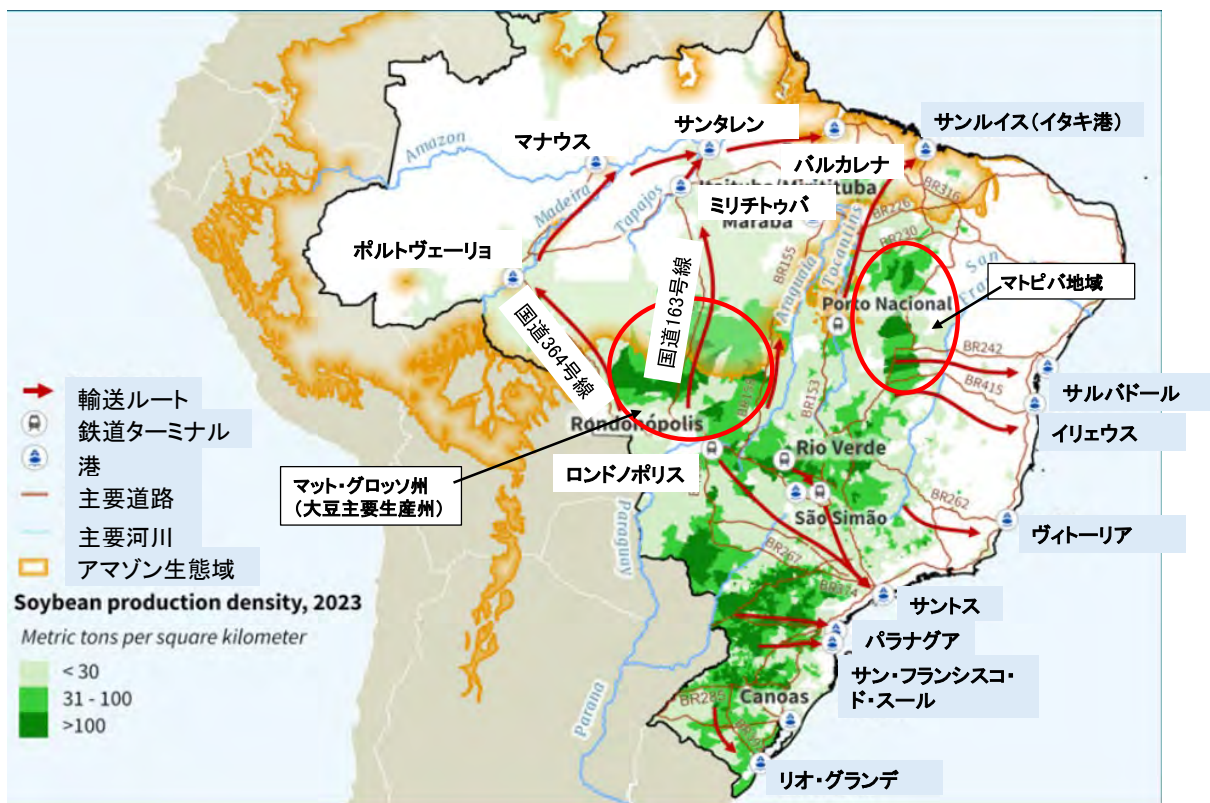
【今月のコラム】

2 国内輸送ルート、輸出港について

ブラジルでは生産地から港までの国内輸送を、トラック、バージ(はしけ)、鉄道等で行っており、生産地域や輸出先国によって、利用される国内輸送ルートや輸出港が異なります。

例えば、大豆の主要生産州であるマツト・グロッソ州では、①国道 364 号線を北上してポルトヴェーリョ港へ運ぶルート、②国道 163 号線を北上してミリチトゥバ港及びサンタレン港へ運ぶルート、③ロンドノポリスまでトラックで輸送し、そこから鉄道でサントス港へ運ぶルートなどがあります(図2)。なお、①と②のポルトヴェーリョ港とミリチトゥバ港は河川港として機能しているため、輸出港まではしけで輸送されています。

図2 ブラジル国内における大豆の主要輸送ルート



資料: USDA「Soybean Transportation Guide BRAZIL 2024」をもとに作成

主要な大豆輸出港は南部に集中しており、2024 年は、ブラジルの大豆輸出量の約 60%が南部港から輸出されました(図3)。その中でもサントス港は南部最大の大豆の輸出港で、2024 年は全体の約 28%の大豆がサントス港から輸出されています(表2)。

中国の穀物・食品大手である中糧集団(COFCO)は、2014 年以降、食料安全保障の確保を目的にブラジルの農業および物流分野へ大規模な投資を行っています。2025 年3月にはサントス港に新たな輸出ターミナルを稼働させ、当該ターミナルの穀物の取扱能力は従来の年間 300 万ト

【今月のコラム】

ンから 1,430 万トンになるなど、輸出能力の拡大が見込まれています。

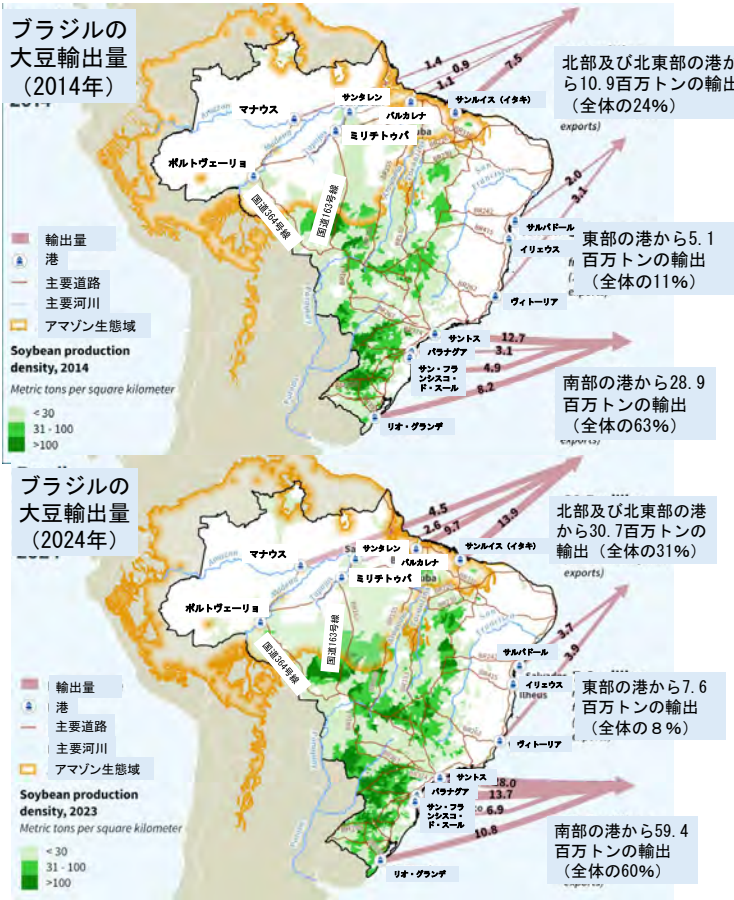
また近年、北部の輸送インフラへの投資や近接するマトピバ地域の大豆生産の拡大を背景に、北部からの輸出も増加しており、2024 年の北部及び北東部からの輸出量は全体の約 31%と、2014 年から約7%上昇しました(図3)。北部の輸送ルートの強化は、競争力の向上や輸送の集中緩和といったメリットをもたらしています。

なお、2024 年のマツト・グロッソ州大豆の輸出量を港別(トップ5)で見ると、サントス(1,065.9 万トン)、バルカレナ(707.8 万トン)、マナウス(248.0 万トン)、サンタレン(178.8 万トン)、サンルイス(170.8 百万トン)の順となっており、南部のサントス港のみならず、北部及び北東部の港からも多くの大豆が輸出されていることが分かります。

写真 サントス港の様子



図3 ブラジル大豆の港別輸出量(2014 年、2024 年)



資料:USDA「Brazil Soybean Transportation」を翻訳

表2 ブラジル大豆の港別輸出量(2013 年、2014 年、2024 年)

港	場所	2013		2014		2024	
		輸出量 (百万トン)	シェア (%)	輸出量 (百万トン)	シェア (%)	輸出量 (百万トン)	シェア (%)
サントス	南部	12.9	30.1%	12.7	27.8%	28.0	28.3%
サン・ルイス(イタキ)	北部及び北東部	3.0	7.0%	3.1	6.8%	13.9	14.1%
パナナグア	南部	7.7	18.0%	7.5	16.4%	13.7	13.9%
リオ・グランデ	南部	8.2	19.2%	8.2	17.9%	10.8	10.9%
バルカレナ	北部及び北東部	-	-	1.1	2.4%	9.7	9.8%
サン・フランシスコ・ド・スール	南部	4.0	9.3%	4.9	10.7%	6.9	7.0%
マナウス	北部及び北東部	1.3	3.0%	1.4	3.1%	4.5	4.6%
ヴィトーリア	東部	2.8	6.5%	3.1	6.8%	3.9	3.9%
サルバドール	東部	1.8	4.2%	2.0	4.4%	3.7	3.7%
サンタレン	北部及び北東部	1.0	2.3%	0.9	2.0%	2.6	2.6%
その他		0.1	0.2%	0.7	1.5%	1.1	1.1%
計		42.8	100.0%	45.7	100.0%	98.8	100.0%

資料:USDA「Brazil Soybean Transportation」をもとに作成

【今月のコラム】

また、ブラジル産大豆の輸出港から輸入先への海上輸送ルートについてですが、アジア向け輸送は、主にアフリカの喜望峰を経由して行われています(図4)。

図4 ブラジルの大豆の海上輸送ルート



※図4は USDA「Soybean Transportation Guide BRAZIL 2024」掲載の海上輸送ルートであり、実際のルートとは異なる場合がある。

資料:USDA「Soybean Transportation Guide BRAZIL 2024」を翻訳

3 おわりに

今回はブラジルの大豆の輸出状況及び主要な輸送ルートについてご紹介しました。ブラジルでは主要な輸出港が南部に集中していますが、北部の輸出港からの大豆輸出も増加してきています。本稿でも触れましたが、北部の輸出港までは、河川を利用したはしけ輸送も主要なルートとなっています。このため、河川の水位低下は、輸送に支障をきたす場合があるため、航行状況について注視する必要があります。

文責:阿部 修治(大臣官房政策課食料安全保障室)

(品目別需給編)

I 穀物

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・トルコ等で下方修正されたものの、アルゼンチン、ロシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

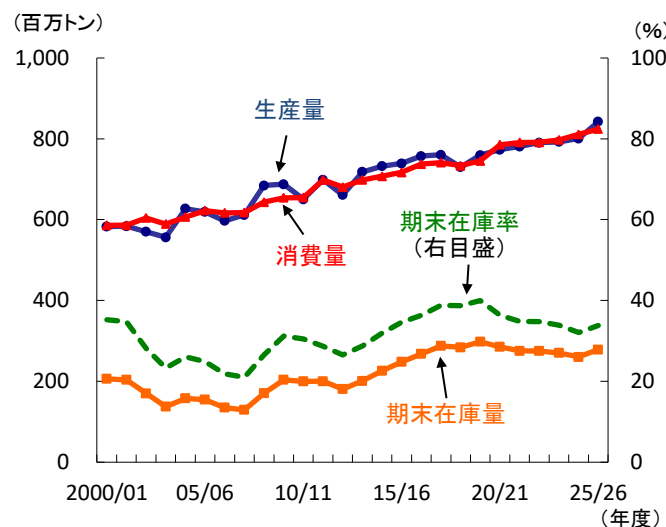
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国、パキスタン、タイ等で下方修正されたものの、ロシア、ウクライナ、モロッコ等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU、ウクライナ等で下方修正されたものの、アルゼンチン、カザフスタン等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省にて作成

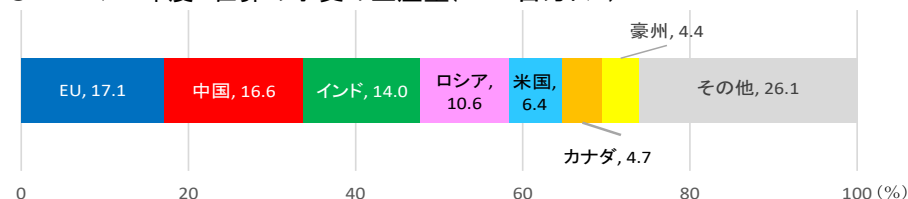
◎世界の小麦需給

(単位:百万トン)

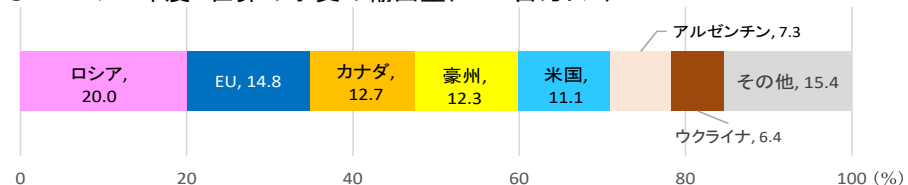
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	792.4	800.8	842.2	4.4	5.2
消 費 量	797.0	810.9	823.9	0.9	1.6
うち飼料用	159.2	157.1	165.4	0.3	5.3
輸 出 量	222.2	210.5	219.8	1.0	4.4
輸 入 量	223.2	200.3	215.5	1.2	7.6
期末在庫量	270.1	260.0	278.3	3.4	7.0
期末在庫率	33.9%	32.1%	33.8%	0.4	1.7

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2026)

○ 2025/26年度 世界の小麦の生産量(842.2百万トン)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸出量(219.8百万トン)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸入量(215.5百万トン)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 0.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積は減少するものの、単収が増加することから前年度から 0.3%増、過去5年平均(48.4 百万トン)から 11.5%増の 54.0 百万トンとなる見込み。

同「Crop Production」(2026.1.12)によれば、2025/26 年度の収穫面積は、前年度から 3.6%減の 1,507 万ヘクタールとなる見込み。種類別には、冬小麦が前年度から 2.7%減の 1,032 万ヘクタール、デュラム小麦を除く春小麦も同 7.5%減の 389 万ヘクタールとなる一方、デュラム小麦が同 4.3%増の 86 万ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の実産量は前年度から 0.3%増の 5,401 万トンとなる見込み。種類別には、デュラム小麦を除く春小麦が前年度から 8.7%減の 1,352 万トンとなる一方、冬小麦が同 3.5%増の 3,814 万トン、デュラム小麦が同 7.7%増の 235 万トンとなる見込み。冬小麦は、前年度と比べ降雨が多く、単収が増加した。一方、春小麦は、乾燥により作柄が悪化した。

同「Winter Wheat and Canola Seedings」(2026.1.12)によれば、2026/27 年度の冬小麦の作付面積は、前年度(1,342 万ヘクタール)に比べ 0.5%減の 1,335 万ヘクタールとなる見込み。銘柄別には、ハード・レッド・ウインターが前年度からわずかに減少し 951 万ヘクタール、ソフト・レッド・ウインターが前年度からわずかに増加し 248 万ヘクタール、ホワイト・ウインターが前年度から5%減少し 136 万ヘクタールとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 8.9%増、過去5年平均(22.2 百万トン)から 10.2%増の 24.5 百万トンと、5年ぶりの高水準となる見込み。同「Wheat Outlook」(2025.9.16)によれば、世界全体では米国の輸出量は依然として第5位と予想されている。ロシア、EU、カナダ及び豪州でも生産量の増加が見込まれており、主要な市場において米国産と競合するとみられる。

同「Global Agricultural Trade System」よれば、2025/26 年度のうち 2025 年6～10 月の輸出量は、前年同期(975.7 万トン)に比べ 22.1%増の 1,191.1 万トン。輸出先国別には、メキシコ 193.4 万トン(16.2%)、フィリピン 108.9 万トン(9.1%)、ナイジェリア 102.5 万トン(8.6%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、消費量の引下げ等を受け前月予測から 0.7 百万トン上方修正され、前年度から 8.4%増の 25.2 百万トンとなる見込み。同「Wheat Outlook」(2026.1.14)によれば、期末在庫量は3年連続の増加となり、6年ぶりの高水準となる見込み(図)。

小麦－米国(冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)
(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年6月～26年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.1	53.9	54.0	-	0.3
消 費 量	30.2	31.1	30.8	▲ 0.6	▲ 0.9
うち飼料用	2.3	3.1	2.7	▲ 0.6	▲ 11.4
輸 出 量	19.2	22.5	24.5	-	8.9
輸 入 量	3.8	4.1	3.3	-	▲ 19.3
期末在庫量	19.0	23.3	25.2	0.7	8.4
期末在庫率	38.4%	43.4%	45.6%	1.7	2.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.01	15.63	15.07	-	▲ 3.6
単収(t/ha)	3.27	3.44	3.58	-	4.1

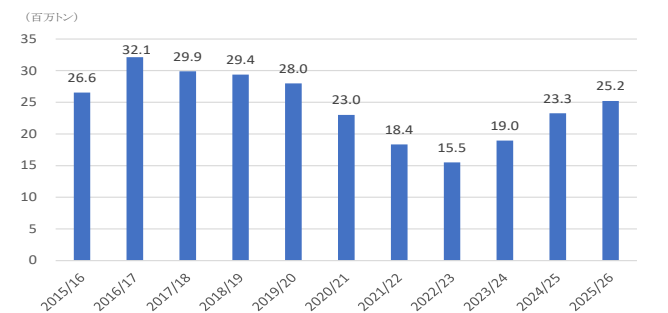
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 January 2026)

表 米国の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年6月～2025年5月)			2024/25年度 (2024年6月～10月)			2025/26年度 (2025年6月～10月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	400.8	18.3	メキシコ	158.0	16.2	メキシコ	193.4	16.2
フィリピン	245.0	11.2	フィリピン	113.2	11.6	フィリピン	108.9	9.1
韓国	238.7	10.9	韓国	95.6	9.8	ナイジェリア	102.5	8.6
日本	215.1	9.8	日本	86.2	8.8	韓国	98.3	8.3
台湾	103.5	4.7	台湾	47.9	4.9	日本	87.0	7.3
タイ	93.2	4.2	インドネシア	44.7	4.6	インドネシア	68.8	5.8
その他	897.2	40.9	その他	429.9	44.1	その他	532.1	44.7
計	2,193.5	100.0	計	975.7	100.0	計	1,191.1	100.0

資料:USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

図 米国の小麦の期末在庫量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

< カナダ > 2025/26 年度の輸出量は前年度から 2.3%減少する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.1.21)によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が増加することを受け前年度から 11.2%増、過去5年平均(32.4 百万トン)から 23.2%増の 40.0 百万トンとなり史上最高の生産量となる見込み。種類別には、普通小麦は、前年度(29.6 百万トン)から 11.0%増、過去5年平均(27.2 百万トン)から 20.6%増の 32.8 百万トンとなり史上最高となる見込み。デュラム小麦も、アルバータ州及びサスカチュワン州の単収増を受け前年度(6.4 百万トン)から 11.8%増、過去5年平均(5.2 百万トン)から 37.1%増の 7.1 百万トンとなり、2016/17 年度(7.8 百万トン)以降で最大の生産量となる見込み。生育期の適切な降雨により生産量が増加した。また、2026/27 年度の実産量は、前年度から作付面積がわずかに減少すると見込まれ、平均的な単収になると想定した場合、2025/26 年度から 12.5%減の 35.0 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦は、2025/26 年度から 10.7%減の 29.3 百万トン、デュラム小麦が、2025/26 年度から 20.6%減の 5.7 百万トンとなる見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 11.2%増、過去5年平均から 23.2%増の 40.0 百万トンとなる見込み。同「World Agricultural Production」(2025.9.12)によれば、2025 年の夏、プレーリー3州は単収向上となる降雨に恵まれ、大部分の地域で作物の生長が促進された。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、堅調な輸出を受け前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、前年度から 2.3%減の 28.6 百万トンと史上2番目の輸出量となる見込み。種類別には、普通小麦が前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、前年度から 0.9%減の 23.2 百万トン。デュラム小麦は前月予測からの変更はなく、従来からの輸出先国であるアルジェリア、モロッコ、米国等の需要減を受け同 8.1%減の 5.4 百万トン。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度から 4.4%減となるものの、過去5年平均(24.4 百万トン)から 14.8%増の 28.0 百万トンとなる見込み。

カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8～11 月の輸出量は、前年同期(879.9 万トン)に比べ 5.3%増の 926.8 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期(734.0 万トン)に比べ 7.4%増の 788.3 万トンで、輸出先国別には、中国 112.5 万トン(14.3%)、バングラデシュ 90.3 万トン(11.5%)、日本 70.8 万トン(9.0%)の順。デュラム小麦は前年同期(146.0 万トン)に比べ 5.1%減の 138.6 万トンで、輸出先国別には、イタリア 43.4 万トン(31.3%)、モロッコ 18.3 万トン(13.2%)、アルジェリア 11.6 万トン(8.4%)の順(表)。AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 82.4%増の 7.5 百万トンとなる見込み。USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 53.8%増の 6.3 百万トンとなる見込み。

小麦－カナダ(春小麦を主に栽培)

年 度	2023/24		2024/25 (見込み)		2025/26(25年8月～26年7月)		
					予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	33.4	35.9	(35.9)	40.0	(40.0)	-	(-) 11.2 (11.2)
消 費 量	9.0	8.4	(8.0)	10.4	(8.1)	-	(▲0.2) 22.8 (1.9)
うち飼料用	3.8	3.1	(3.3)	5.0	(3.6)	-	(▲0.2) 59.7 (7.7)
輸 出 量	25.4	29.3	(29.2)	28.0	(28.6)	-	(0.2) ▲4.4 (▲2.3)
輸 入 量	0.6	0.6	(0.1)	0.6	(0.1)	-	(-) ▲1.6 (23.5)
期末在庫量	5.3	4.1	(4.1)	6.3	(7.5)	-	(-) 53.8 (82.4)
期末在庫率	15.3%	10.9%	(11.1%)	16.5%	(20.5%)	-	(-) 5.6 (9.4)
(参考)							
収穫面積(百万ha)	10.71	10.65	(10.65)	10.62	(10.62)	-	(-) ▲0.3 (▲0.3)
単収(t/ha)	3.12	3.37	(3.37)	3.76	(3.76)	-	(-) 11.6 (11.6)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(12 January 2026)
AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(21 January 2026) ※()書き。

表 カナダの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～11月)			2025/26年度 (2025年8月～11月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	243.2	10.3	インドネシア	80.9	11.0	中国	112.5	14.3
中国	206.1	8.7	日本	74.9	10.2	バングラデシュ	90.3	11.5
日本	191.0	8.1	ペルー	57.6	7.8	日本	70.8	9.0
ペルー	164.2	6.9	コロンビア	55.9	7.6	インドネシア	65.2	8.3
コロンビア	143.1	6.0	ナイジェリア	47.1	6.4	エクアドル	44.2	5.6
その他	1,419.1	60.0	その他	417.6	56.9	その他	405.3	51.4
計	2,366.5	100.0	計	734.0	100.0	計	788.3	100.0

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～11月)			2025/26年度 (2025年8月～11月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
アルジェリア	156.8	27.2	イタリア	37.1	25.4	イタリア	43.4	31.3
モロッコ	124.2	21.5	モロッコ	29.3	20.1	モロッコ	18.3	13.2
イタリア	83.8	14.5	アルジェリア	15.6	10.7	アルジェリア	11.6	8.4
米国	51.0	8.8	米国	14.2	9.7	米国	11.3	8.1
日本	22.7	3.9	スペイン	9.4	6.4	日本	7.6	5.5
その他	138.2	24.0	その他	40.3	27.6	その他	46.3	33.4
計	576.7	100.0	計	146.0	100.0	計	138.6	100.0

資料:CGC のデータをもとに農林水産省で作成

< 豪州 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 4.3%増加する見込み(ABARES)

【生育・生産状況】豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2025.12.2)によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の引上げを受け前回予測(9月)から 1.8 百万トン上方修正され、前年度から単収が増加することを受け前年度(34.1 百万トン)から 4.3%増、過去5年平均(33.8 百万トン)から 5.4%増の 35.6 百万トンとなり、史上3番目の生産量となる見込み(図)。州別には、ウェスタンオーストラリア(WA 州)は 2.1 百万トン上方修正され 13.4 百万トン(前年度から 5.9%増)、サウスオーストラリア州(SA 州)はわずかに上方修正され 4.7 百万トン(同 71.1%増)、クイーンズランド州(QLD 州)は 0.3 百万トン上方修正され 2.3 百万トン(同 1.3%増)となる一方、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)は 0.1 百万トン下方修正され 11.1 百万トン(同 14.3%減)、ビクトリア州(VIC 州)は 0.5 百万トン下方修正され 4.1 百万トン(同 15.7%増)と、特に WA 州では、平年を上回る降雨と穏やかな春の気候により生産量が増加した。USDA によれば、2025/26 年度の前月予測からの変更はなく、前年度から 8.5%増、過去5年平均(33.8 百万トン)から 9.6%増の 37.0 百万トンとなり、史上2番目の生産量となる見込み。同「Grain and Feed Update」(2025.11.20)によれば、2025/26 年度シーズン当初は非常に乾燥していたものの、7、8 月の降雨量は平年並みか平年を上回った。また、WA 州では9、10 月に適時の降雨が続き、単収が向上した。

【貿易情報・その他】ABARES によれば、2025/26 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 1.2 百万トン上方修正され、供給量が増加することを受け前年度から 9.1%増、過去5年平均(25.3 百万トン)から 1.8%増の 25.7 百万トンとなる見込み(図)。USDA によれば、2025/26 年度の前月予測からの変更はなく、生産量の増加を受け前年度から 14.0%増、過去5年平均(25.3 百万トン)から 6.6%増の 27.0 百万トンとなる見込み。

同「Grain and Feed Update」(2025.11.20)によれば、世界の小麦供給は潤沢であり、先物価格も低調で短期的な需要拡大も限定的であるため、豪州の農家や穀物販売業者は慎重な販売戦略を採用し、シーズン後半の価格改善を見込んで通常より多くの在庫を保有すると予想されている。

ABARES「Trade dashboard」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～11 月の輸出量は、前年同期(171.9 万トン)に比べ 65.4%増の 284.3 万トン。輸出先国別には、フィリピン 53.4 万トン(18.8%)、インドネシア 40.4 万トン(14.2%)、イエメン 26.6 万トン(9.4%)の順となっている(表)。

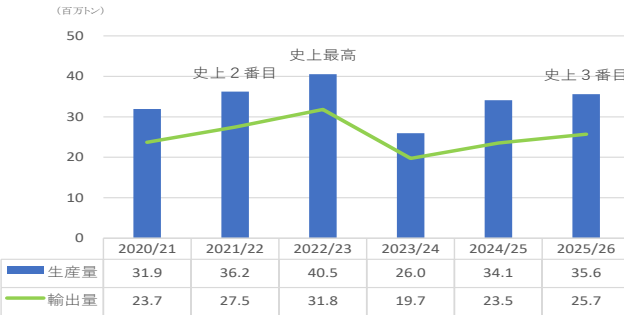
ABARES によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量及び消費量の引上げ等を受け前回予測から 0.8 百万トン下方修正されるものの、前年度から 14.7%増の 5.1 百万トンとなる見込み。USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 28.5%増の 5.1 百万トンとなる見込み。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年10月～26年9月)			
			予測値	前月(前回)予測 からの変更	対前年度増減率(%)	
生産量	26.0	34.1 (34.1)	37.0 (35.6)	- (1.8)	8.5	(4.3)
消費量	8.3	9.1 (9.0)	9.1 (9.3)	- (0.4)	-	(3.0)
うち飼料用	4.8	5.6 ...	5.5 ...	- ...	▲1.8	...
輸出量	19.8	23.7 (23.5)	27.0 (25.7)	- (1.2)	14.0	(9.1)
輸入量	0.2	0.2 ...	0.2 ...	- ...	4.5	...
期末在庫量	2.4	4.0 (4.5)	5.1 (5.1)	- (▲0.8)	28.5	(14.7)
期末在庫率	8.6%	12.1% (13.7%)	14.1% (14.7%)	- (▲3.1)	2.0	(0.9)
(参考)						
収穫面積(百万ha)	12.37	13.06 (13.06)	12.70 (12.71)	- (-)	▲2.8	(▲2.7)
単収(t/ha)	2.10	2.61 (2.61)	2.91 (2.80)	- (0.14)	11.5	(7.2)

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(12 January 2026)
ABARES「Australian Crop Report」(2 December 2025) ※()書き。

図 豪州の小麦の生産量・輸出量の推移



資料: ABARES「Australian Crop Report」(2025.12.2)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～11月)			2025/26年度 (2025年10月～11月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	449.6	19.0	インドネシア	36.9	21.5	フィリピン	53.4	18.8
フィリピン	352.7	14.9	フィリピン	34.1	19.9	インドネシア	40.4	14.2
タイ	170.9	7.2	韓国	19.4	11.3	イエメン	26.6	9.4
ベトナム	157.4	6.7	ベトナム	14.2	8.3	韓国	24.1	8.5
韓国	146.5	6.2	日本	12.8	7.4	日本	18.1	6.4
イエメン	137.6	5.8	マレーシア	6.8	4.0	ベトナム	13.5	4.8
その他	946.6	40.1	その他	47.6	27.7	その他	108.1	38.0
計	2,361.3	100.0	計	171.9	100.0	計	284.3	100.0

資料: ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 20.1%増加する見込み(EC)

【生育・生産状況】欧州委員会(EC)「EU Cereals Balance Sheets」(2025.12.18)によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の引上げを受け前月予測から2万トン上方修正され、主産国で生育期間を通じた降雨過多等により減産となった前年度から 20.1%増、過去5年平均(129.4 百万トン)から 10.1%増の 142.4 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦がスペイン等の生産量引上げにより前月予測から 18.5 万トン上方修正され、フランス、ドイツ、ルーマニア等で生産量が回復することを受け前年度から 21.1%増、過去5年平均(121.8 百万トン)から 10.3%増の 134.4 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、イタリア等の生産量引下げにより前月予測から 17.0 万トン下方修正されるものの、前年度から 5.4%増、過去5年平均(7.6 百万トン)から 6.3%増の 8.1 百万トンとなる見込み。USDA「World Agricultural Production」(2025.12.9)によれば、2025/26 年度の実産については、春先の降雨と穏やかな気温により生育に好ましい気象条件であった。その後も広範囲で良好な天候が続き、夏季には EU 全体が乾燥状態であったものの、影響は軽微であり、主産国の生産量は、フランスで前年比 28%増、ドイツは同 26%増、ルーマニアは同 32%増となった。

【貿易情報・その他】ECによれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費が増加することを受け前年度から 0.7%増の 112.0 百万トンとなる見込み。USDA「Grain and Feed Quarterly」(2025.12.4)によれば、乾燥の影響により EU の 2025/26 年度とうもろこしの生産量が減少し、小麦の飼料用消費が増加することによる。

ECによれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、関税割当制度等の再開によりウクライナからの輸入が減少すると見込まれることを受け前年度から 43.1%減の 5.7 百万トンとなる見込み。一方で EU 域内からの輸入は増加する見込み。同「EU trade for cereals」(2025.12.18)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～10 月の輸入量は、ウクライナからの輸入が大きく減少したこと等により前年同期(369.5 万トン)に比べ 34.0%減の 243.9 万トン(図)。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 41.8%減の 192.7 万トンとなる一方、デュラム小麦は同 32.9%増の 51.2 万トン(表)。

2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量が回復することを受け前年度から 21.3%増の 31.9 百万トンとなる見込み。同「EU trade for cereals」(2025.12.17)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～10 月の輸出量は、前年同期(1,015.5 万トン)に比べ 9.6%増の 1,113.1 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 2.9%増の 1,017.6 万トン、デュラム小麦が同 265.4%増の 95.5 万トン(表)。

2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から2万トン上方修正され、前年度から 49.4%増の 12.8 百万トンとなる見込み。

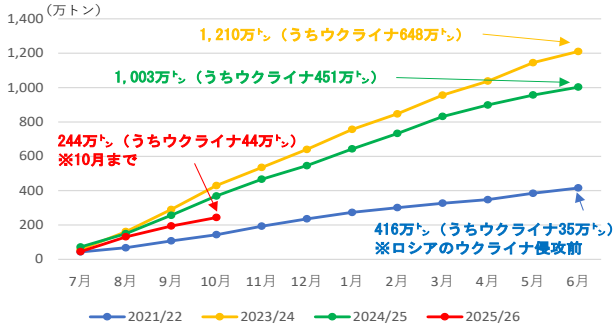
小麦－EU27 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年7月～26年6月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	135.4	122.2 (118.6)	144.0 (142.4)	- (0.02)	17.9 (20.1)
消費量	110.5	109.0 (111.2)	114.5 (112.0)	- (-)	5.0 (0.7)
うち飼料用	46.5	45.0 (46.2)	50.0 (46.6)	- (-)	11.1 (0.9)
輸 出 量	38.0	27.9 (26.3)	32.5 (31.9)	▲0.5 (-)	16.6 (21.3)
輸 入 量	12.7	10.7 (10.0)	5.5 (5.7)	- (-)	▲48.4 (▲43.1)
期末在庫量	15.8	11.7 (8.5)	14.2 (12.8)	0.5 (0.02)	21.3 (49.4)
期末在庫率	10.6%	8.6% (6.2%)	9.7% (8.9%)	0.4 (0.01)	1.1 (2.7)

(参考)
収穫面積(百万ha) 24.32 22.74 (22.52) 23.97 (23.72) - (▲0.02) 5.4 (5.4)
単収(t/ha) 5.57 5.37 (5.27) 6.01 (6.00) - (0.005) 11.9 (14.0)
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(12 January 2026)
EC「EU Cereals Balance Sheets」(18 December 2025) ※()書き。

図 EU の小麦輸入量の推移(累計)



資料:EC「EU trade for cereals」(2025.12.17)をもとに農林水産省で作成

表 EU の小麦の輸出量及び輸入量

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)				2025/26年度 (2025年7月～10月)				2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)				2025/26年度 (2025年7月～10月)			
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)		国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)		国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)		国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	
モロッコ	343.1	13.1		モロッコ	172.2	15.5		ウクライナ	450.8	44.9		カナダ	91.9	37.7	
アルジェリア	335.7	12.8		アルジェリア	116.0	10.4		カナダ	242.6	24.2		ウクライナ	43.9	18.0	
ナイジェリア	280.5	10.7		サウジアラビア	81.2	7.3		モルドバ	63.2	6.3		モルドバ	32.6	13.4	
英国	188.8	7.2		エジプト	60.5	5.4		米国	57.9	5.8		セルビア	23.8	9.8	
エジプト	175.0	6.7		ヨルダン	42.3	3.8		セルビア	57.7	5.8		英国	17.1	7.0	
その他	1,301.7	49.6		その他	640.8	57.6		その他	131.0	13.1		その他	34.6	14.2	
合計	2,624.8	100.0		合計	1,113.1	100.0		合計	1,003.1	100.0		合計	243.9	100.0	

資料:EC「EU trade for cereals」(2025.12.17)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2025/26 年度の生産量は前年度から 9.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量(クリミア地域分を含まず)は、単収の引上げを受け前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、霜害と高温乾燥により生産量が減少した前年度から単収が増加することを 受け前年度から 9.7%増、過去5年平均(85.1 百万トン)から 5.1%増の 89.5 百万トンとなり史上3番目となる見込み (図)。種類別には、冬小麦は、単収の引上げを受け前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、前年度(55.8 百万トン)から 12.9%増の 63.0 百万トン。春小麦も、単収の引上げを受け前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度(25.8 百万トン)から 2.7%増の 26.5 百万トンとなる見込み。

ロシア連邦統計庁(2025.12.26)の速報値によれば、2025/26 年度の実産量は、前年度に比べ 10.6%増の 91.37 百万トンとなっている。

USDA「World Agricultural Production」(2026.1.12)によれば、2025/26 年度の実産量について、作付面積は前年度から減少したものの、南部と極東を除く全ての地域で前年度を上回る単収となり、主に春小麦の実産量増加が作付面積の減少を補い、小麦の実産量は史上3番目の高水準に達した。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 2.3%増、過去5年平均(44.1 百万トン)と同水準の 44.0 百万トンとなり、史上3番目の輸出量となる見込み(図)。

ロシア連邦政府は、2025 年 12 月 24 日、2025/26 年度後半(2026 年2月 15 日～6月 30 日)に穀物(小麦・メスリン、大麦及びとうもろこし)に設定される輸出枠を 2,000 万トン(前年度は小麦・メスリンのみ 1,060 万トン)とすることを発表した。現地情報会社によれば、小麦は世界的に供給が潤沢で国際相場が下落していること、ロシアでは黒海沿岸地域が不作気味である一方、内陸地域が豊作で輸送コストが高くなること等により輸出枠の全量消化は難しい見込み。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～12 月の輸出量は、前年同期(2,911.5 万トン)に比べ 11.5%減の 2,578.0 万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト 463.6 万トン(18.0%)、トルコ 386.9 万トン(15.0%)、イラン 172.3 万トン(6.7%)の順(表)。トルコとイランへの輸出が増加しており、これは両国が 2025 年に不作であったため。また、バングラデシュへの輸出が減少しているが、これは同国市場におけるアルゼンチン、ブラジル及び豪州との競合のため。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、前年度から 38.7%増の 14.7 百万トンとなる見込み。

小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

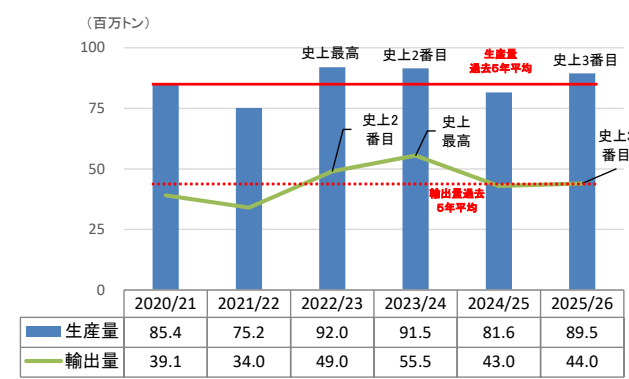
(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	91.5	81.6	89.5 (87.6)	2.0	9.7
消 費 量	39.0	40.0	41.7 (41.0)	0.5	4.3
うち飼料用	16.0	17.0	18.5 (17.4)	0.5	8.8
輸 出 量	55.5	43.0	44.0 (44.2)	-	2.3
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.5)	-	-
期末在庫量	11.7	10.6	14.7 (12.3)	1.5	38.7
期末在庫率	12.4%	12.8%	17.1% (14.4%)	1.7	4.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.83	27.80	26.30 (26.37)	▲ 0.20	▲ 5.4
単収(t/ha)	3.17	2.94	3.40 (3.32)	0.10	15.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 ロシアの小麦の実産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

表 ロシアの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2023年7月～2024年6月)			2024/25年度 (2024年7月～12月)			2025/26年度 (2025年7月～12月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
エジプト	821.2	20.2	エジプト	561.9	19.3	エジプト	463.6	18.0
トルコ	310.4	7.6	トルコ	198.7	6.8	トルコ	386.9	15.0
バングラデシュ	277.3	6.8	バングラデシュ	197.0	6.8	イラン	172.3	6.7
アルジェリア	173.4	4.3	アルジェリア	172.1	5.9	バングラデシュ	145.2	5.6
イスラエル	163.9	4.0	サウジアラビア	119.5	4.1	リビア	119.2	4.6
その他	2,327.2	57.1	その他	1,662.3	57.1	その他	1,290.8	50.1
合計	4,073.4	100.0	合計	2,911.5	100.0	合計	2,578.0	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2025/26 年度の輸出量は前年度から 11.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から1.7%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22年度、27.9百万トン)から17.6%減の23.0百万トンとなる見込み(図)。

現地情報会社によれば、2026/27年度の冬小麦の作付けは終了し、12月末現在、越冬期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26年度の輸出量は、輸出ペースの鈍化を受け前月予測から0.5百万トン下方修正され、生産量の減少等を受け前年度から11.1%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(18.1百万トン)から22.7%減の14.0百万トンとなる見込み(図)。

EUは、ウクライナ産品の輸入に関し、2022年6月から輸入関税及び関税割当を停止してきた。当該措置は2025年6月5日に失効し、「深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)」に基づき、関税割当制度等の適用を再開した。その後、6月30日に新たな貿易措置についてウクライナと合意し、EUとウクライナの連合委員会は10月14日に合意を承認し、10月29日に発効となった。これにより、小麦及びメスリン等に対する年間輸入割当数量は130万トン、小麦粉等は同3万トンに見直された。報道によれば、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは、ウクライナ産農産物に対して、2023年から独自に輸入禁止措置を行っており、10月29日の新たなDCFTA発効後も同措置を維持する意向である。

現地情報会社によれば、2025/26年度のうち2025年7～12月の輸出量は、前年同期(986.6万トン)に比べ20.3%減の786.2万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト202.8万トン(25.8%)、インドネシア141.1万トン(18.0%)、アルジェリア121.2万トン(15.4%)の順(表)。EUのウクライナ産小麦に対する関税割当制度等の適用再開により、昨年度まで輸出先第1位であったスペインへの輸出が大きく減少したことや、主要輸出先である北アフリカや中東におけるロシア産小麦等との競合が要因。また、2025年12月の輸出量は、前年同月(80.1万トン)に比べ26.8%減の58.6万トンとなっており、ロシアによる港湾や鉄道等の輸送インフラへの攻撃激化が影響しているとみられ、2026年1月に入ってもロシアによる輸送インフラの攻撃が続いており、輸出に対する大きな抑制要因となるおそれがある。

ウクライナ政府は、2025年12月31日、2026年にブルガリア、ルーマニア、スロバキア、ハンガリー及びポーランドに輸出を行う場合に、ライセンスが必要な農産物リストを承認した。対象には小麦やとうもろこし等が含まれている。

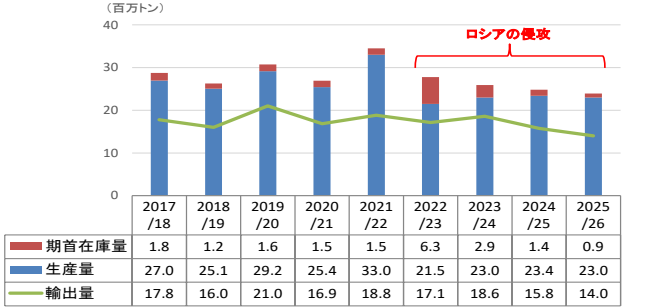
USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から107.5%増の1.9百万トンとなる見込み。

小麦－ウクライナ(主に冬小麦を栽培)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	23.0	23.4	23.0 (26.0)	-	▲ 1.7
消 費 量	6.0	8.2	8.1 (9.3)	0.5	▲ 1.2
うち飼料用	1.5	3.6	3.5 (2.5)	0.5	▲ 2.8
輸 出 量	18.6	15.8	14.0 (14.5)	▲ 0.5	▲ 11.1
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
期末在庫量	1.4	0.9	1.9 (3.1)	-	107.5
期末在庫率	5.7%	3.9%	8.7% (12.8%)	-	4.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.01	5.20	5.50 (6.35)	-	5.8
単収(t/ha)	4.59	4.50	4.18 (4.09)	-	▲ 7.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、 「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 ウクライナの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月～12月)			2025/26年度 (2025年7月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
スペイン	326.1	20.9	スペイン	235.8	23.9	エジプト	202.8	25.8
エジプト	211.1	13.5	インドネシア	155.1	15.7	インドネシア	141.1	18.0
アルジェリア	195.1	12.5	ベトナム	81.6	8.3	アルジェリア	121.2	15.4
インドネシア	158.8	10.2	エジプト	80.0	8.1	イエメン	59.3	7.5
ベトナム	104.7	6.7	アルジェリア	74.8	7.6	ベトナム	52.9	6.7
その他	566.5	36.3	その他	359.3	36.4	その他	208.9	26.6
合計	1,562.2	100.0	合計	986.6	100.0	合計	786.2	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2025/26年度の生産量は前年度と同水準の見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度と同水準、過去5年平均(137.1 百万トン)から 2.2%増の 140.1 百万トンとなり、史上最高の前年度に次ぐ生産量となる見込み(図)。

中国国家统计局「2025年糧食生産量データ」(2025.12.12)によれば、2025年の小麦の作付面積は、前年(23.59 百万ヘクタール)からわずかに減少し 23.58 百万ヘクタール。単収は、前年(5.94 トン/ヘクタール)と比べ同水準の 5.94 トン/ヘクタール。生産量は、前年(140.1 百万トン)と同水準の 140.1 百万トン。

中国中央气象台「全国農業気象月報」(2026.1.5)によれば、2026/27 年度の冬小麦について、秋の降雨の影響により、北部の冬小麦主産地では作付けが著しく遅延した。11 月末現在、北部の作付進捗率は 95%となっている。同「作物生育期監視」(2026.1.4～10)によれば、2026/27 年度の冬小麦は、黄淮地区(河南省、安徽省、江蘇省、山東省)及び華北(河北省、山西省、内モンゴル自治区等)を中心に大部分が越冬期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.3%減、過去5年平均(150.9 百万トン)から 1.9%減の 148.0 百万トンとなる見込み(図)。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、期首在庫量の減少等を受け前年度から 43.9%増となるものの、過去5年平均(10.3 百万トン)から 41.5%減の 6.0 百万トンとなる見込み(図)。

中国国務院関税税則委員会は、5月の米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表(同第7号)した。その後、8月 11 日の米中経済貿易協議の共同声明を受け、8月 12 日から更に 90 日停止、10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ 11 月 10 日から更に1年間停止すると発表(同第 10 号)した。また、11 月 10 日から同第2号の追加関税 15%の適用を停止すると発表(同第9号)した。これにより小麦は 10%の追加関税を課すこととなった。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～11 月の輸入量は、前年同期(174.6 万トン)に比べ 17.3%減の 144.3 万トンとなっている。輸入先国別には、カナダ 105.8 万トン(73.3%)、豪州 26.5 万トン(18.4%)、ロシア 5.6 万トン(3.9%)の順となっている(表)。米国からの輸入は 57トンと大きく減少している。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの前年度から 2.3%減の 124.8 百万トンとなる見込み(図)。

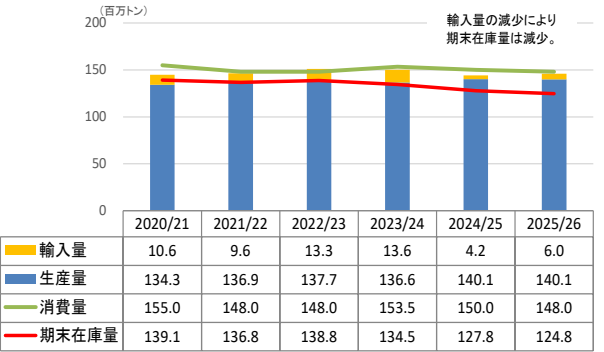
小麦－中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年7月～26年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	136.6	140.1	140.1 (140.1)	0.1	▲ 0.02
消 費 量	153.5	150.0	148.0 (146.8)	-	▲ 1.3
うち飼料用	37.0	33.0	31.0 (28.0)	-	▲ 6.1
輸 出 量	1.0	1.0	1.0 (1.2)	-	▲ 2.0
輸 入 量	13.6	4.2	6.0 (6.2)	-	43.9
期末在庫量	134.5	127.8	124.8 (135.5)	-0.1	▲ 2.3
期末在庫率	87.1%	84.6%	83.8% (91.6%)	0.04	▲ 0.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.63	23.59	23.58 (23.64)	▲ 0.02	▲ 0.04
単収 (t/ha)	5.78	5.94	5.94 (5.93)	0.01	-

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 中国の小麦生産量・輸入量等の推移



資料: USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

表 中国の小麦の輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月～11月)			2025/26年度 (2025年7月～11月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
カナダ	185.9	48.2	カナダ	57.9	33.2	カナダ	105.8	73.3
豪州	86.9	22.5	米国	46.2	26.5	豪州	26.5	18.4
米国	46.2	12.0	ロシア	24.1	13.8	ロシア	5.6	3.9
カザフスタン	30.8	8.0	カザフスタン	23.8	13.6	カザフスタン	4.0	2.8
ロシア	29.7	7.7	豪州	19.8	11.3	日本	1.7	1.2
日本	4.9	1.3	日本	2.0	1.1	フランス	0.6	0.4
その他	1.5	0.4	その他	0.8	0.4	その他	0.1	0.1
合計	385.9	100.0	合計	174.6	100.0	合計	144.3	100.0

資料: 中国海関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国、中国で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

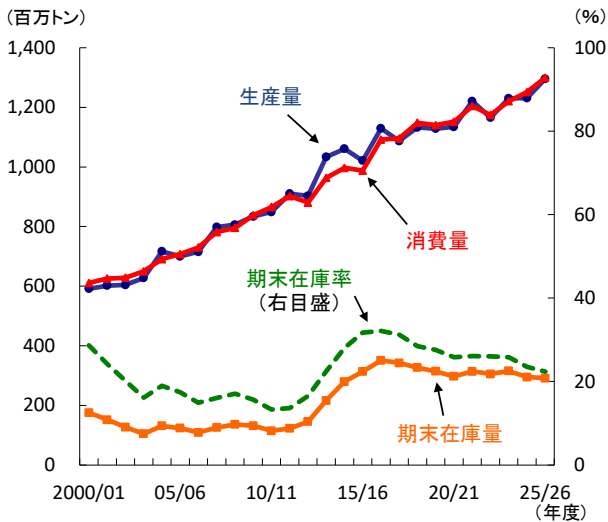
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・米国、アルゼンチン等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・ジョージアで上方修正され、前月からわずかに上方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

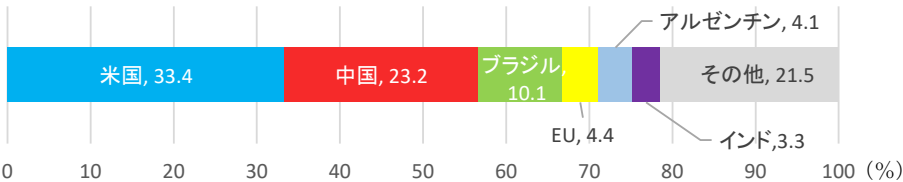
◎世界のとうもろこし需給

(単位:百万トン)

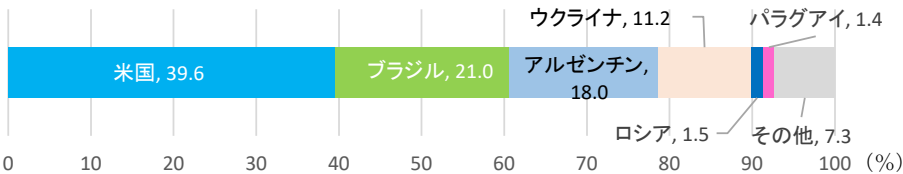
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	1,230.7	1,230.9	1,296.0	13.1	5.3
消 費 量	1,220.7	1,251.6	1,299.8	2.6	3.9
うち飼料用	769.5	787.5	813.2	2.9	3.3
輸 出 量	192.7	186.6	205.1	0.01	9.9
輸 入 量	197.6	186.1	190.2	▲ 0.2	2.2
期末在庫量	315.4	294.7	290.9	11.8	▲ 1.3
期末在庫率	25.8%	23.5%	22.4%	0.9	▲ 1.2

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2026)

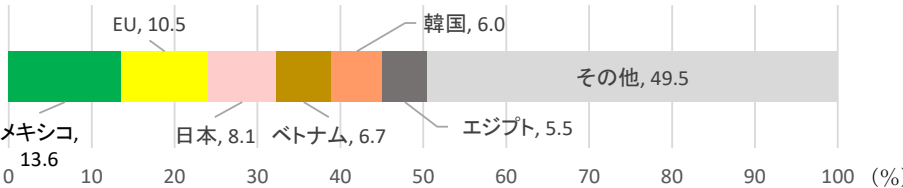
○ 2025/26 年度 世界のとうもろこしの生産量 (1,296.0 百万トン)



○ 2025/26 年度 世界のとうもろこしの輸出量 (205.1 百万トン)



○ 2025/26 年度 世界のとうもろこしの輸入量 (190.2 百万トン)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 14.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測から 6.8 百万トン上方修正され、前年度から 14.3%増、過去5年平均(370.8 百万トン)から 16.6%増の 432.3 百万トンと、史上最高の見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家が大豆から作付けを切り替えたとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 2.3 百万トン上方修正され、飼料用及びエタノール用需要の増加等を受け、前年度から 7.4%増の 334.5 百万トンと、史上最高の見込み。

同「Feed Outlook」(2026.1.14)によれば、2025 年 12 月 12 日までの週の米国のエタノール生産量は、1 日当たりの平均で 113.1 万バレルを超え、2025 年 11 月に記録された過去最高の 112.6 万バレルを上回った。エタノールの需要は、国内及び輸出市場ともに堅調に推移している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 12.0%増の 81.3 百万トンと、史上最高の見込み。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 9～12 月の輸出量は、前年同期(1,613.8 万トン)に比べ 66.5%増の 2,686.3 万トン。輸出先国別には、メキシコ 832.1 万トン(31.0%)、日本 477.1 万トン(17.8%)、韓国 280.6 万トン(10.4%)の順となっている(表)。

同「Grain: World Markets and Trade」(2026.1.12)によれば、1 月 5 日現在の輸出価格は、米国は世界的に堅調な需要に支えられ、前月から 4ドル/トン上昇し 216ドル/トン、アルゼンチンは長引く猛暑と乾燥により供給不足の懸念が高まり、前月から 5ドル/トン上昇し 221ドル/トン、ブラジルは横ばいの 225ドル/トンとなった(図)。

米国環境保護庁(EPA)は、製油業者等に対しガソリン及びディーゼルに一定量の再生可能燃料を混合することを義務付けており、2025 年 6 月に 2026～2027 年の再生可能燃料混合義務量案を発表した。この案では総混合義務量を 2025 年の 223.3 億ガロンに対して、2026 年には 240.2 億ガロン、2027 年には 244.6 億ガロンと過去最高の数量を設定。報道情報によれば、2026 年の義務量は 2026 年 3 月までに最終決定される見通し。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 5.0 百万トン上方修正され、生産量の増加等を受け前年度から 43.6%増、過去5年平均(37.0 百万トン)から 52.8%増の 56.6 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 3.3 ポイント増の 13.6%となる見込み。

とうもろこしー米国

(概ね 4～5 月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年9月～26年8月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	389.7	378.3	432.3	6.8	14.3
消 費 量	322.9	311.6	334.5	2.3	7.4
うち飼料用	148.1	138.6	157.5	2.5	13.7
エタノール用等	139.4	138.1	142.2	-	3.0
輸 出 量	57.3	72.6	81.3	-	12.0
輸 入 量	0.7	0.6	0.6	-	16.4
期末在庫量	44.8	39.4	56.6	5.0	43.6
期末在庫率	11.8%	10.3%	13.6%	1.1	3.3
(参考)					
収穫面積(百万ha)	35.01	33.61	36.93	0.49	9.9
単収(t/ha)	11.13	11.26	11.71	0.03	4.0

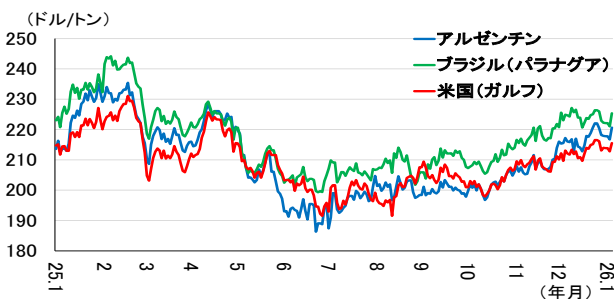
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)

表 米国のとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)			2024/25年度 (2024年9月～12月)			2025/26年度 (2025年9月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	2,212.2	32.6	メキシコ	684.5	42.4	メキシコ	832.1	31.0
日本	1,344.0	19.8	日本	255.5	15.8	日本	477.1	17.8
コロンビア	743.7	11.0	コロンビア	248.6	15.4	韓国	280.6	10.4
韓国	617.4	9.1	韓国	74.5	4.6	コロンビア	264.9	9.9
台湾	241.6	3.6	スペイン	66.1	4.1	スペイン	203.7	7.6
その他	1,617.3	23.9	その他	284.7	17.6	その他	627.9	23.4
合計	6,776.2	100.0	合計	1,613.8	100.0	合計	2,686.3	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

図 米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料:IGC のデータをもとに農林水産省で作成

＜ ブラジル ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 3.7%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 3.7%減となるものの、過去5年平均(119.0 百万トン)から 10.1%増の 131.0 百万トンと、史上3番目となる見込み。また、2024/25 年度は、2023/24 年度から 14.3%増の 136.0 百万トンと、史上2番目となる見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2026.1.15)によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の減少を受け前年度から 1.5%減の 138.9 百万トンの見込み。作付期別には、夏とうもろこし(第1期作)の実産量は、前年度から 3.8%増の 25.9 百万トンの見込み。1月上旬時点の作付進捗率は 88.3%で、リオ・グランデ・ド・スール州では既に収穫が開始された。ブラジル南部のリオ・グランデ・ド・スール州、パラナ州、サンタカタリーナ州の多くの圃場で生育期間中、嵐、雹等の気象条件の影響を受けたものの依然として実産量は良好な見込み。冬とうもろこし(第2・3期作)の実産量は、前年度から 2.7%減の 113.0 百万トンの見込み。冬とうもろこしの大部分を占める第2期作は、12月下旬から1月上旬にかけて、パラナ州、マツグロソ州及びパラ州の一部地域では作付けが予定どおり開始されたが、降雨により作業は遅延している。また、国内の大部分で前作の大豆の作付作業が遅れたことでとうもろこし以外の作物への転換等が進むと見込まれている(図)。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、エタノール向けとうもろこしの国内需要の高まりにより、前年度から 2.1%増の 96.5 百万トンと、史上最高の実込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 4.9%増の 43.0 百万トンとなる見込み。また、CONAB によれば、2025/26 年度の実輸出量は、良好な実産量に支えられ、前年度から 12.0%増の 46.5 百万トンとなる見込み。2024/25 年度の実輸出量は、国内供給量の増加に加え世界的な需要の増加を受け 41.5 百万トンとなる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3～12 月の輸出量は、前年同期(3,317.0 万トン)に比べ 8.3%増の 3,593.9 万トン。輸出先国別には、イラン 738.1 万トン(20.5%)、エジプト 641.2 万トン(17.8%)、ベトナム 386.8 万トン(10.8%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、実産量の減少等を受け前年度から 65.2%減、過去5年平均(7.5 百万トン)から 50.7%減の 3.7 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 5.2 ポイント減の 2.6%となる見込み。

とうもろこしーブラジル

(夏とうもろこしは、概ね8～翌年1月に作付けされ、2～6月に収穫される。冬とうもろこしは、大豆収穫後の概ね1～3月に作付けされ、6～10月に収穫される。)

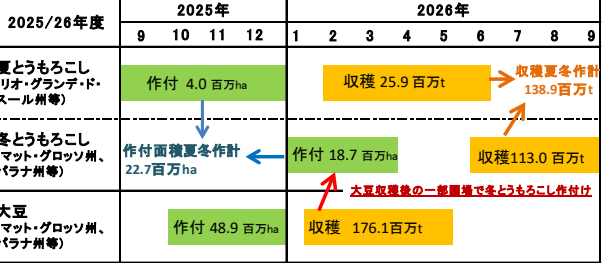
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月)				対前年度 増減率(%)
			予測値	前月予測 からの変更	26年度 実績	27年度 実績	
生 産 量	119.0	136.0 (141.0)	131.0 (138.9)	- (▲0.01)	▲3.7	▲1.5	
消 費 量	84.0	94.5 (90.6)	96.5 (94.6)	- (▲0.001)	2.1	(4.5)	
うち飼料用	62.5	66.5	66.0	-	▲0.8	...	
輸 出 量	38.3	41.0 (41.5)	43.0 (46.5)	- (-)	4.9	(12.0)	
輸 入 量	1.7	1.8 (1.7)	1.6 (1.7)	- (-)	▲8.6	(-)	
期末在庫量	8.3	10.6 (12.6)	3.7 (12.0)	0.2 (▲1.5)	▲65.2	(▲4.3)	
期末在庫率	6.8%	7.8% (9.5%)	2.6% (8.5%)	0.1 (▲1.1)	▲5.2	(▲1.0)	

(参考)

収穫面積(百万ha)	21.65	22.30 (21.84)	22.60 (22.71)	- (▲0.01)	1.3	(4.0)
単収(t/ha)	5.50	6.10 (6.46)	5.80 (6.11)	- (0.003)	▲4.9	(▲5.3)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
CONAB「Graos」(15 January 2026) ※()書き。なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

図 ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)



資料:CONAB「Graos」(2026.1.15)をもとに農林水産省で作成

表 ブラジルのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年3月～2025年2月)			2023/24年度 (2024年3月～12月)			2024/25年度 (2025年3月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
エジプト	601.1	15.7	エジプト	477.6	14.4	イラン	738.1	20.5
イラン	535.7	14.0	ベトナム	412.4	12.4	エジプト	641.2	17.8
ベトナム	450.9	11.8	イラン	365.9	11.0	ベトナム	386.8	10.8
韓国	243.3	6.4	韓国	243.3	7.3	サウジアラビア	195.2	5.4
日本	214.3	5.6	日本	214.3	6.5	中国	171.0	4.8
その他	1,772.8	46.4	その他	1,603.6	48.3	その他	1,461.5	40.7
合計	3,818.2	100.0	合計	3,317.0	100.0	合計	3,593.9	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

＜ アルゼンチン ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 6.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 6.0%増、過去5年平均(49.0 百万トン)から 8.2%増の 53.0 百万トンとなる見込み。前年度は病害虫のヨコバイによる被害が生産者の作付意欲に負の影響を及ぼしたが、被害の改善により2025/26 年度は作付面積が回復する見込み。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2026.1.15)によれば、1月 15 日現在の作付進捗率は 92%と前年同期(93%)と同水準であり、州別には、ブエノス・アイレス州 100%(前年同期 100%)、コルドバ州 99.8%(同 99%)、サンタフェ州 93%(同 97%)。作付面積が最も多いブエノス・アイレス州では、現時点で作物の状態は良好であるものの、高温による生育への悪影響が懸念されている。生育が早い圃場では登熟期を迎えている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、飼料用消費の増加を受け前年度から 1.8%増の 16.7 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、輸出可能な供給量が増加し米国やブラジルに対する競争力が高まることを受け前年度から 25.4%増の 37.0 百万トンとなる見込み。なお、2024/25 年度の輸出量は、米国やブラジルとの競争により市場シェアが縮小し 2023/24 年度から 18.6%減の 29.5 百万トンとなる見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3～12 月の輸出量は、前年同期(3,113.3 万トン)に比べ 15.9%減の 2,619.7 万トン。輸出先国別には、ベトナム 481.0 万トン(18.4%)、ペルー401.0 万トン(15.3%)、マレーシア 275.7 万トン(10.5%)の順となっている(表)。

アルゼンチン政府は、2025 年 12 月 12 日、とうもろこしの輸出税を 9.5%から 8.5%に引き下げた。政府は、9 月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出上限額に達したことで、元の税率である 9.5%に戻っていた。今回の輸出税の引下げは、生産者の税負担を軽減し、農業分野の競争力を高めることを目的としている(大豆＜アルゼンチン＞表参照)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、輸出量の増加等を受け前年度から 10.5%減となるものの、過去5年平均(3.9 百万トン)からは 52.8%増の 5.9 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 3.4 ポイント減の 11.0%となる見込み。

とうもろこしーアルゼンチン

(早植えとうもろこしは、概ね9月後半～12 月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、概ね 12 月前半～翌年2月前半に作付けされる。概ね3～8月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	51.0	50.0	53.0 (59.3)	-	6.0
消 費 量	14.6	16.4	16.7 (20.9)	0.3	1.8
うち飼料用	10.4	12.0	12.3 (15.9)	0.3	2.5
輸 出 量	36.3	29.5	37.0 (38.2)	-	25.4
輸 入 量	0.01	0.01	0.01 (0.001)	-	-
期末在庫量	2.5	6.6	5.9 (2.3)	-	▲10.5
期末在庫率	4.9%	14.3%	11.0% (3.9%)	▲0.1	▲3.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.78	6.90	7.50 (8.50)	-	8.7
単収(t/ha)	6.56	7.25	7.07 (6.98)	-	▲2.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

写真 サンタフェ州の圃場の様子(2025.12.26 撮影)



9 月中旬に作付けされ、登熟期を迎えている圃場。収穫は3月前半を予定している。

撮影者:José Daniel Peloni

表 アルゼンチンのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年3月～2025年2月)			2023/24年度 (2024年3月～12月)			2024/25年度 (2025年3月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ベトナム	667.8	18.4	ベトナム	609.0	19.6	ベトナム	481.0	18.4
ペルー	433.1	11.9	ペルー	374.9	12.0	ペルー	401.0	15.3
マレーシア	333.6	9.2	マレーシア	283.4	9.1	マレーシア	275.7	10.5
韓国	282.2	7.8	韓国	282.2	9.1	アルジェリア	227.2	8.7
アルジェリア	280.1	7.7	サウジアラビア	226.4	7.3	サウジアラビア	197.0	7.5
その他	1,628.2	44.9	その他	1,337.4	43.0	その他	1037.8	39.6
合計	3,624.9	100.0	合計	3,113.3	100.0	合計	2,619.7	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省で作成

＜ ウクライナ ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 8.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 8.2%増となるものの、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22 年度、33.6 百万トン)からは 13.8%減の 29.0 百万トンとなる見込み。

同「World Agricultural Production」(2025.12.9)によれば、湿潤な秋の天候により土壌水分量と湿度が上昇し穀粒の乾燥が妨げられ、収穫は大幅に遅れている(図)。現地情報会社によれば、2026 年1月8日時点の収穫進捗率は 91%と、2024 年 12 月 19 日時点(98%)に比べ遅れている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の減少を受け前年度から 7.7%減の 6.0 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加等を受け前年度から 14.9%増の 23.0 百万トンとなる見込み。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～12 月の輸出量は、前年同期(708.2 万トン)に比べ 28.9%減の 503.3 万トン。輸出先国別には、トルコ 130.0 万トン(25.8%)、イタリア 117.5 万トン(23.3%)、スペイン 39.8 万トン(7.9%)の順となっている(表)。今後も EU とトルコが主要な輸出先となる見込みであるが、スペインで豚熱が発生したことによる飼料用需要の減少や、価格競争力のあるブラジル・米国との競合が懸念されている。

2022 年6月より適用されてきた EU のウクライナ産品に対する輸入関税と輸入割当の停止措置が 2025 年6月5日に適用期限を迎え失効し、欧州委員会は、6月6日以降、深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)に基づく関税割当を適用している。6月 30 日には欧州委員会とウクライナが DCFTA の下で新たな貿易措置に合意したことが発表され、とうもろこしの年間の関税割当量は、現行の 65 万トンから 100 万トンに拡大された。EU とウクライナの連合委員会は 10 月 14 日に上記の合意を承認し、10 月 29 日に発効となった。期限は 2028 年末までとされ、同年に見直しが検討される予定。現地情報会社によれば、とうもろこしについては、EU の関税率は0%であるため、割当量の増減による影響はないものとみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加等を受け前年度から 1.2%増、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2.5 百万トン)からは 66.3%減の 0.9 百万トンとなる見込み。2025/26 年度の期末在庫率は、前年度から 0.2 ポイント減の 2.9%となる見込み。

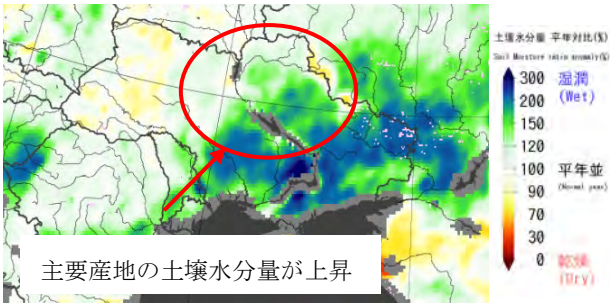
とうもろこしーウクライナ

(概ね4～5月に作付けされ、8～11 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	32.5	26.8	29.0 (30.5)	-	8.2
消 費 量	5.5	6.5	6.0 (6.1)	-	▲ 7.7
うち飼料用	4.6	5.4	4.8 (4.7)	-	▲ 11.1
輸 出 量	29.5	20.0	23.0 (23.5)	-	14.9
輸 入 量	0.01	0.02	0.01 (0.002)	-	▲ 50.0
期末在庫量	0.5	0.8	0.9 (2.0)	-	1.2
期末在庫率	1.5%	3.2%	2.9% (6.8%)	-	▲ 0.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	4.20	4.10	4.20 (4.20)	-	2.4
単収(t/ha)	7.74	6.54	6.90 (7.26)	-	5.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 ウクライナの土壌水分量平年対比(2025 年 11 月)



資料:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表 ウクライナのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～12月)			2025/26年度 (2025年10月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
トルコ	568.8	28.4	トルコ	157.9	22.3	トルコ	130.0	25.8
イタリア	273.6	13.7	スペイン	110.8	15.7	イタリア	117.5	23.3
スペイン	240.7	12.0	イタリア	109.3	15.4	スペイン	39.8	7.9
オランダ	199.1	10.0	オランダ	84.8	12.0	オランダ	31.4	6.2
エジプト	162.5	8.1	エジプト	54.3	7.7	韓国	25.7	5.1
その他	556.1	27.8	その他	191.1	27.0	その他	158.9	31.6
合計	2,000.8	100.0	合計	708.2	100.0	合計	503.3	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、中国国家统计局の最新データの発表を受け前月予測から 6.2 百万トン上方修正され、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 2.1%増、過去5年平均 (278.8 百万トン)から 8.0%増の 301.2 百万トンと、史上最高の見込み。

同「World Agricultural Production」(2026.1.12)によれば、2025/26 年度は、南東部(四川省を含む)の一部地域で異常な高温乾燥に見舞われたものの、主要生産地の東北部では良好な天候に恵まれ生産量が増加した。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加を受け前年度から 1.6%増の 321.0 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測から変更はなく、報復関税などの貿易政策の変更や国内農家の利益を守るための輸入抑制等により輸入量が大きく減少した前年度から 339.6%増の 8.0 百万トンとなる見込み(図)。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～11 月の輸入量は、前年同期 (54.6 万トン)に比べ 67.3%増の 91.4 万トン。輸入先国別には、ブラジル 77.0 万トン(84.3%)、ミャンマー10.6 万トン(11.6%)、ラオス 1.9 万トン(2.1%)の順となっている(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年 11 月号」によれば、11 月の国内価格は、東北部の高品質とうもろこしに対する旺盛な需要等により、前月 (2,280 元/トン)から上昇し 2,320 元/トン。

中国国务院関税税則委員会は、2025 年5月の米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表(同第7号)した。その後、8月 11 日の米中経済貿易協議の共同声明を受け、8月 12 日から更に 90 日間停止、10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ 11 月 10 日から更に1年間停止すると発表(同第 10 号)した。また、11 月 10 日から同第2号の追加関税 15%の適用を停止すると発表(同第9号)した。これによりとうもろこしは 10%の追加関税を課すこととなった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 6.2 百万トン上方修正されたものの、消費量の増加を受け前年度から 6.1%減、過去5年平均 (204.8 百万トン)から 12.0%減の 180.2 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 4.6 ポイント減の 56.1%となる見込み。

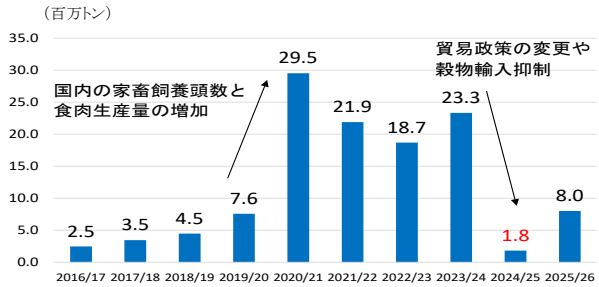
とうもろこしー 中国

(春とうもろこしは、概ね2～4月に作付けされ、7～9月に収穫される。夏とうもろこしは、概ね4～6月に作付けされ、9～10 月に収穫される。)

(単位:百万トン)						
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)			
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	288.8	294.9	301.2 (301.2)	6.2	2.1	
消 費 量	307.0	316.0	321.0 (312.2)	-	1.6	
うち飼料用	225.0	234.0	239.0 (210.0)	-	2.1	
輸 出 量	0.0	0.0	0.02 (0.1)	-	-	
輸 入 量	23.3	1.8	8.0 (6.0)	-	339.6	
期末在庫量	211.2	191.9	180.2 (179.9)	6.2	▲ 6.1	
期末在庫率	68.8%	60.7%	56.1% (57.6%)	1.9	▲ 4.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	44.22	44.74	44.96 (45.00)	0.66	0.5	
単収(t/ha)	6.53	6.59	6.70 (6.69)	0.04	1.7	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 中国のとうもろこしの輸入量の推移



資料: USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

表 中国のとうもろこしの輸入先国と輸入量

2024/25 年度 (2024年10月～2025年 9月)			2024/25年度 (2025年10月～11月)			2025/26年度 (2025年10月～11月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	72.4	39.7	ブラジル	35.5	64.9	ブラジル	77.0	84.3
ウクライナ	37.6	20.6	ウクライナ	11.8	21.6	ミャンマー	10.6	11.6
ロシア	36.8	20.2	ラオス	2.7	4.9	ラオス	1.9	2.1
ミャンマー	22.8	12.5	ロシア	1.6	3.0	ロシア	1.8	2.0
ラオス	6.4	3.5	ミャンマー	1.2	2.3	-	-	-
米国	3.9	2.1	米国	1.1	2.1	-	-	-
その他	2.3	1.3	その他	0.7	1.2	-	-	-
計	182.3	100.0	計	54.6	100.0	計	91.4	100.0

資料: 中国海関統計をもとに農林水産省で作成

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2025/26 年度

生産量

前年度比

前月比

中国、日本、バングラデシュ等で上方修正され、前月から上方修正された。

消費量

前年度比

前月比

中国、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量

前年度比

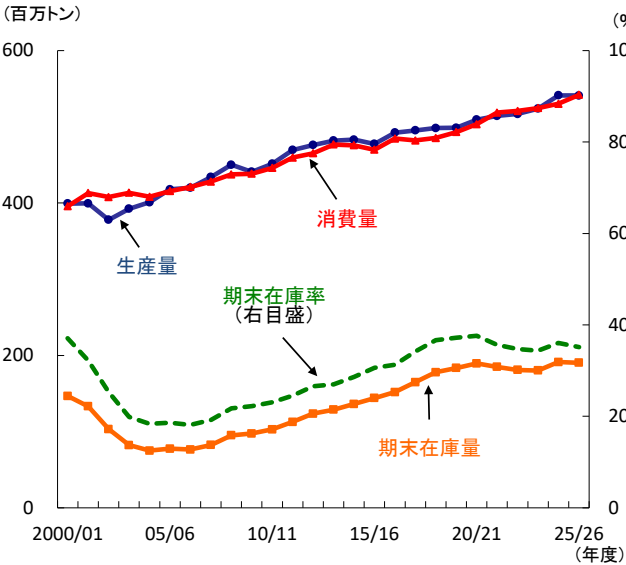
前月比

パキスタン、米国等で下方修正されたものの、中国、エジプトで上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量

前年度比

前月比



資料:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省にて作成

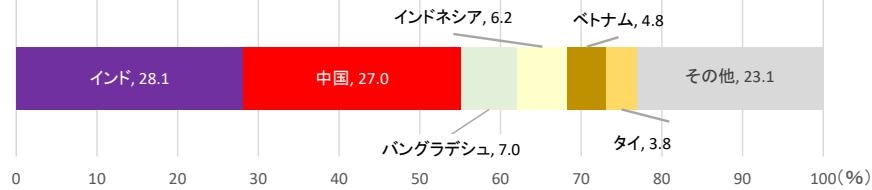
◎世界のコメ需給

(単位:百万精米トン)

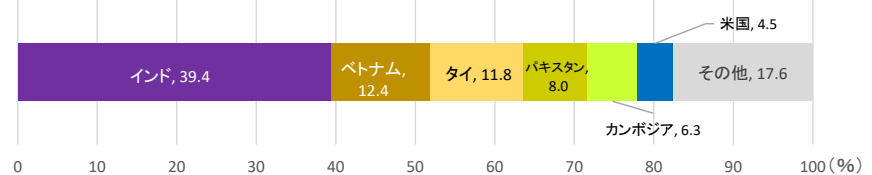
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	524.0	541.3	541.2	0.8	▲ 0.03
消 費 量	524.7	530.2	542.0	0.1	2.2
輸 出 量	56.8	60.89	63.5	0.3	4.3
輸 入 量	53.4	57.7	60.1	0.9	4.2
期末在庫量	180.2	191.2	190.3	1.5	▲ 0.5
期末在庫率	34.3%	36.1%	35.1%	0.3	▲ 0.9

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2026)

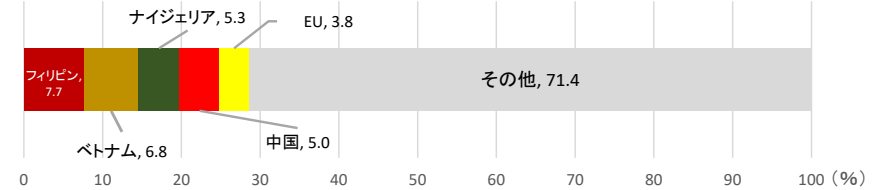
○ 2025/26年度 世界のコメの生産量(541.2百万トン)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸出量(63.5百万トン)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸入量(60.1百万トン)



(2) 国別のコメの需給動向

< タイ > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が前年度から0.28 百万ヘクタール減少(前年度比 2.5%減)することを受け、前年度から2.1%減の 20.4 百万トンの見込み。単収は過去最高の 2.86 トン/ヘクタールを維持する見込み。

タイ農業協同組合省農業経済局「農業経済」(2025.12)によれば、2025/26 年度の乾季米の作付面積は、前年度に比べ 2.1%減の 2.06 百万ヘクタールと予測している。同省「農業災害状況報告」(2026.1.8)によれば、乾季米の作付面積の内、1月7日時点で、約 50%(1.04 百万ヘクタール)で作付けが行われた。

アセアン食料安全保障情報システム(2025.12)によれば、雨季米の収穫は 12 月に完了した。総生産量は、約 2,699 万トンと推定され、作付面積の減少及び洪水被害により、前年度に比べ 0.08%減となっている。しかし、十分な水供給と好天に恵まれた多くの栽培地域では単収がわずかに増加した。一方、乾季米は作付期にあるが、主にコメ価格の下落により、作付面積は前年度に比べ減少が予測され、一部地域では継続した洪水被害により耕起や作付作業を妨げている。生育条件は、十分な灌漑用水と天然水に支えられ良好な状態を維持すると見込まれる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、インドの低価格米の市場復帰やインドネシア、フィリピン等の主要輸出先国の需要減退が要因となり、前年度から 5.1%減の 7.5 百万トンの見込み。

タイ関税局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年1～11 月の輸出量は、前年同期に比べ 21.0%減の 729.4 万トンで、輸出先国別には、イラク 94.9 万トン(13.0%)、南アフリカ 82.4 万トン(11.3%)、米国 73.4 万トン(10.1%)の順となっている(表)。政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していたインドネシア向けの輸出量は9万トンと大幅に減少し前年同期に比べ 92%減となった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正されたものの、前年度から 11.1%増の 3.0 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 1.7 ポイント増の 14.9%となる見込み。

コメ・タイ

夏期の雨季作(5～10 月作付け、同年7月～翌年5月収穫)と冬期の乾季作(11 月～翌年4月作付け、翌年2～10 月収穫)で行われる。主にインディカ米を栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(26年1月～26年12月)		
			予測値、0はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	20.0	20.8	20.4 (20.4)	-	▲ 2.1
消 費 量	12.3	12.5	12.7 (12.8)	-	1.2
輸 出 量	9.9	7.9	7.5 (7.1)	-	▲ 5.1
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.02)	-	-
期末在庫量	2.2	2.7	3.0 (3.4)	▲ 0.3	11.1
期末在庫率	10.0%	13.3%	14.9% (17.2%)	▲ 1.5	1.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.65	11.08	10.80 (10.80)	-	▲ 2.5
単収(kg/ha)	2.85	2.85	2.86 (1.89)	-	0.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026) (単収は精米t/ha)



耕起後のインディカ米(左)及びジャポニカ米(右)の圃場(1月8日撮影)

2023/24年度 (2024年1月～12月)			2023/24年度 (2024年1月～11月)			2024/25年度 (2025年1月～11月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	133.3	13.3	インドネシア	121.1	13.1	イラク	94.9	13.0
イラク	99.7	10.0	イラク	95.4	10.3	南アフリカ	82.4	11.3
米国	84.8	8.5	南アフリカ	80.0	8.7	米国	73.4	10.1
南アフリカ	83.3	8.3	米国	77.3	8.4	中国	60.4	8.3
フィリピン	61.8	6.2	フィリピン	55.2	6.0	セネガル	28.7	3.9
セネガル	46.2	4.6	セネガル	44.6	4.8	アンゴラ	23.9	3.3
その他	489.6	49.0	その他	449.2	48.7	その他	365.7	50.1
計	998.7	100.0	計	922.8	100.0	計	729.4	100.0

資料:タイ関税局「Electronic Service」をもとに農林水産省で作成

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 7.0%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、単収が引き上げられたものの、収穫面積の引下げを受け、前月予測から0.02百万トン下方修正され、前年度から7.0%減の6.6百万トンの見込み。2025/26年度の収穫面積は、前月予測から0.01百万トン下方修正され、前年度に比べ4.3%減の1.11百万ヘクタールの見込み。収穫面積の下方修正が最も大きい州は、カリフォルニア州及びルイジアナ州だった。

同「Crop Production」(2026.1.12)によれば、種類別生産量は、長粒種は4.9百万トンと前年度(5.5百万トン)から11%減の見込み。一方、中・短粒種は1.7百万トンと、前年度(1.6百万トン)から5.5%増の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の輸入量は、前月予測から0.03百万トン下方修正され、前年度から1.3%減の1.6百万トンの見込み。同「Rice Outlook」(2026.1.14)によれば、当該下方修正は、タイからの香り米(ジャスミン米)の輸入実績が予測を下回ったことによる。

USDAによれば、2025/26年度の輸出量は、前月予測から0.1百万トン下方修正され、前年度から1.4%減の2.8百万トンの見込み。同「Rice Outlook」(2026.1.12)によれば、当該下方修正は、米国産長粒種の最大購入国であるメキシコ向け販売の低迷が続いていること、中米市場向け販売も低調なことによる。

同「Exports Sales Query System」によれば、2025/26年度のうち2025年8～11月の輸出量は76.3万トンで、輸出先国別には、ハイチ13.6万トン(17.8%)、日本12.0万トン(15.8%)、メキシコ8.9万トン(11.7%)の順(表)。種類別には、長粒種は、輸出量51.1万トンで、輸出先国別には、ハイチ13.6万トン(国別シェア26.5%)、メキシコ7.2万トン(同14.0%)、ホンジュラス6.0万トン(同11.7%)。中・短粒種は、輸出量25.3万トンで、輸出先国別には、日本12.0万トン(国別シェア47.6%)、韓国7.7万トン(同30.4%)、メキシコ1.7万トン(同6.9%)。

同「Grain: World Markets and Trade」(2026.1.12)によれば、米国産米(長粒種、4%碎米混入)の1月8日までの週の価格は、中米市場向け販売が低調なことを受け、前月(12月8日)から1ドル/トン下落し552ドル/トンとなった(図)。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、前月予測から0.1百万トン下方修正され、前年度から8.2%減の1.6百万トンの見込み。

コメ・米国

長粒種の生産量は7割、中・短粒種の生産量は3割を占め、長粒種の6割をアーカンソー州が、中・短粒種の7割をカリフォルニア州が占める。

(単位:百万精米トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	6.9	7.1	6.6	▲ 0.02	▲ 7.0
消 費 量	4.9	5.3	5.4	0.2	2.5
輸 出 量	3.2	2.9	2.8	▲ 0.1	▲ 1.4
輸 入 量	1.4	1.6	1.6	▲ 0.03	▲ 1.3
期末在庫量	1.3	1.7	1.6	▲ 0.1	▲ 8.2
期末在庫率	15.8%	20.9%	19.0%	▲ 1.5	▲ 1.9

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.16	1.16	1.11	▲ 0.01	▲ 4.3
単収(粍t/ha)	8.56	8.69	8.45	0.04	▲ 2.8

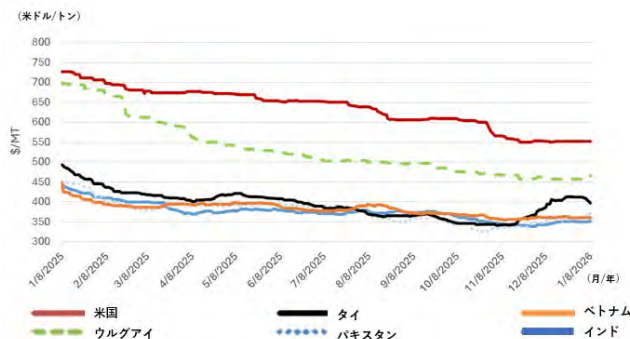
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)

表 米国のコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～11月)			2025/26年度 (2025年8月～11月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	68.6	23.5	メキシコ	24.8	24.1	ハイチ	13.6	17.8
日本	39.4	13.5	ハイチ	9.7	9.4	日本	12.0	15.8
ハイチ	28.6	9.8	日本	9.4	9.1	メキシコ	8.9	11.7
ホンジュラス	27.4	9.4	ホンジュラス	8.7	8.4	韓国	7.7	10.1
イラク	22.0	7.6	韓国	8.0	7.8	ホンジュラス	6.0	7.8
韓国	13.4	4.6	ニカラグア	6.8	6.6	イラク	4.4	5.8
その他	91.9	31.6	その他	35.5	34.5	その他	23.8	31.2
計	291.2	100.0	計	102.9	100.0	計	76.3	100.0

資料:USDA「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

図 長粒種の輸出価格(FOB)の推移(2025.8月～2026.1月)



資料:USDA「Grain: World Markets and Trade」

＜ 中国 ＞ 2025/26 年度の生産量は、前年度から 0.7%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA「Rice Outlook」(2026.1.14)によれば、2025/26 年度の実産量は、中国国家统计局による単収増の公表を受け、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度から 0.7%増の 146.3 百万トン(精米ベース)となる見込み。

中国国家统计局「2025 年糧食生産量データ」(2025.12.12)によれば、2025 年の稲の作付面積は、前年(29.01 百万ヘクタール)と比べ同水準の 29.01 百万ヘクタール。単収は、前年(7.15 トン/ヘクタール)と比べ増加し 7.21 トン/ヘクタール。生産量は、前年(207.5 百万トン)から増加し 209.0 百万トン(粳米ベース)。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、飼料及び工業用への古米在庫の放出増を要因として前年度から 1.4%増の 146.9 百万トンとなる見込み。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国際市場におけるコメ価格の下落と国内コメ価格の高止まりによりミャンマー、タイ、ベトナムからの輸入が増加するとの予測を受け前年度から 28.2%増の 3.0 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 7～11 月の輸入量は、前年同期(53.0 万トン)に比べ 147.8%増の 131.2 万トンとなっている。輸入先国別には、ミャンマー58.8 万トン(44.8%)、タイ 28.9 万トン(22.0%)、ベトナム 23.4 万トン(17.9%)の順となっている(表)。

USDA「Rice Outlook」(2026.1.14)によれば、2025/26 年度の輸出量は、コートジボワール、ギニアビサウ及びリビアを含むアフリカ市場における競争力のある中粒種の需要拡大を背景に、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度から 65.2%増の 1.9 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 7～11 月の輸出量は、前年同期(50.2 万トン)に比べ 65.1%増の 82.9 万トンとなっている。輸出先国別には、トルコ 9.0 万トン(10.9%)、日本 7.3 万トン(8.8%)、ギニアビサウ及びベナン 6.7 万トン(8.1%)の順となっている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、生産量の増加予測や政府の備蓄プログラム等を受け前年度から 0.5%増の 105.0 百万トンの見込み(図)。同「Rice Outlook」(2026.1.14)によれば、政府の在庫政策の影響で、中国(55%)とインド(25%)が世界在庫のほとんどを占めている。

コメー中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域(華南、華中、西南高原地域)で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年7月～26年6月)		
			予測値、〇はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	144.6	145.3	146.3 (146.0)	0.3	0.7
消 費 量	148.1	145.0	146.9 (145.7)	0.3	1.4
輸 出 量	1.6	1.2	1.9 (1.9)	0.5	65.2
輸 入 量	1.5	2.3	3.0 (2.8)	-	28.2
期末在庫量	103.0	104.5	105.0 (103.4)	0.5	0.5
期末在庫率	68.8%	71.5%	70.6% (70.1%)	▲ 0.1	▲ 1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.95	29.01	29.00 (29.00)	-	▲ 0.02
単収(稲t/ha)	7.14	7.15	7.21 (5.03)	0.02	0.8

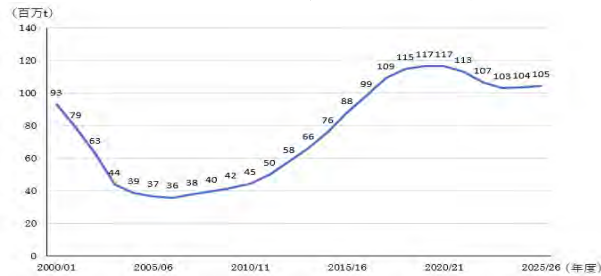
資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC 「Grain Market Report」(15 January 2026) (単収は精米/ha)

表 中国のコメの輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月～11月)			2025/26年度 (2025年7月～11月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ミャンマー	67.4	28.9	ミャンマー	26.0	49.1	ミャンマー	58.8	44.8
タイ	56.1	24.0	タイ	11.9	22.5	タイ	28.9	22.0
ベトナム	49.6	21.3	パキスタン	5.4	10.1	ベトナム	23.4	17.9
インド	24.1	10.3	ベトナム	4.7	8.9	インド	8.5	6.4
パキスタン	20.7	8.9	カンボジア	2.0	3.8	カンボジア	6.6	5.0
カンボジア	11.7	5.0	ラオス	1.8	3.4	パキスタン	3.3	2.5
その他	3.8	1.6	その他	1.2	2.2	その他	1.8	1.3
合計	233.5	100.0	合計	53.0	100.0	合計	131.2	100.0

資料: 中国海関統計をもとに農林水産省で作成

図 中国のコメの期末在庫量の推移



資料: USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

< インド > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 1.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.3% 増、過去5年平均(135.5 百万トン)から 12.2%増の 152.0 百万トンと史上最高の見込み。10 年連続の記録更新が見込まれている。

同「Rice Outlook」(2025.12.11)によれば、収穫面積の増加は、主に9～10 月の降雨量が平年を上回り、土壌水分量が良好となったこと、また灌漑用の貯水池や地下水利用が改善されラビ米の作付けが促進されたことによる。

インド農業・農民福祉省によれば、2025/26 年度のラビ米の作付面積は、12 月 26 日時点で前年度同期から 1.89%増の 140 万ヘクタールとなっている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、インド政府が国内市場及びエタノール製造業者向けに補助価格で過剰米の在庫処分を進めることによる需要増が見込まれ、前年度から 4.8%増の 127.0 百万トンと予測されている。また生産量の増加により、政府は食料安全保障法に基づく公的食料配給制度(PDS)の継続実施が可能となっている。政府は PDS により市場からコメ等を調達し、低所得世帯(8.14 億人以上)に無償又は低価格で配給している。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 9.5%増の 25.0 百万トンの見込み。

インド輸出入統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月の輸出量は、168.1 万トンと前年同期(164.2 万トン)に比べ 2.4%増となっている。輸出先国別には、ギニア 16.3 万トン(9.7%)、コートジボワール 13.7 万トン(8.2%)、ベナン 12.5 万トン(7.5%)の順となっている(表)。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、前月予測及び前年度からの変更はなく48.0百万トンとなるが、政府が望む在庫水準(10.25百万トン)は大幅に上回る見込み。同「Grain and Feed Update」(2025.12.4)によれば、2025/26年度期首在庫が、政府の基準在庫の4倍以上に達し、次期作では最低支持価格(MSP)による調達量の増加が見込まれることから、インド政府は食料安全保障プログラムやエタノール生産者への補助米の供給拡大を通じ「負担」在庫を解消する圧力に直面する見込み。インド食品公社(Food Cooperation India)によれば、2025年12月時点の期末在庫量は、39.4百万トン(精米)と前年同期に比べ26.3%増の見込み。

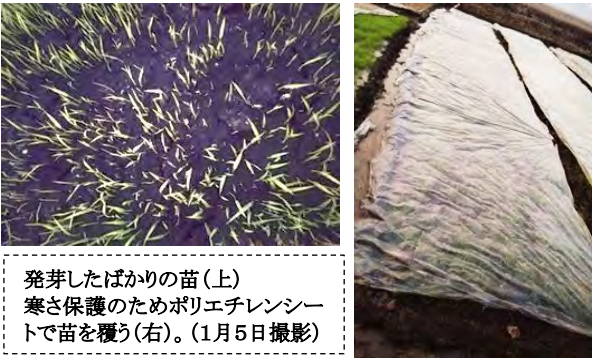
コメーインド

カリフ米:雨季/モンスーン期(5～10 月)に栽培。
ラビ米:冬季の 11 月～翌3月に栽培。
夏季米:3～6月に栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、0はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	137.8	150.0	152.0 (153.0)	-	1.3
消 費 量	116.4	121.2	127.0 (125.2)	-	4.8
輸 出 量	14.4	22.8	25.0 (22.7)	-	9.5
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	42.0	48.0	48.0 (53.5)	-	-
期末在庫率	32.1%	33.3%	31.6% (36.2%)	-	▲ 1.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	47.83	51.42	52.00 (51.50)	-	1.1
単収(kg/ha)	4.32	4.38	4.39 (2.97)	-	0.2

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026) (単収は精米t/ha)

写真 インド・西ベンガル州の圃場



発芽したばかりの苗(上)
寒さ保護のためポリエチレンシ
ートで苗を覆う(右)。(1月5日撮影)

表 インドのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月)			2025/26年度 (2025年10月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ベナン	216.7	9.4	ベナン	18.9	11.5	ギニア	16.3	9.7
バングラデシュ	149.9	6.5	コートジボワール	12.1	7.4	コートジボワール	13.7	8.2
サウジアラビア	139.8	6.1	トーゴ	11.8	7.2	ベナン	12.5	7.5
ギニア	114.5	5.0	サウジアラビア	10.4	6.3	バングラデシュ	11.7	7.0
トーゴ	113.9	5.0	ギニア	10.1	6.1	ケニア	11.5	6.9
コートジボワール	111.2	4.8	アラブ首長国連邦	6.2	3.8	サウジアラビア	8.6	5.1
その他	1,454.8	63.2	その他	94.8	57.8	その他	93.7	55.7
計	2,300.8	100.0	計	164.2	100.0	計	168.1	100.0

資料:インド農業・加工食品輸出振興局(APEDA)「Agri Xchange」をもとに農林水産省で作成

< ベトナム > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.8%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から2.8%減の26.0百万トンの見込み。

ベトナム総統計局(2026.1.5)によれば、2025年(USDA:2024/25年度)の全国水稻の作付面積は、前年に比べ0.11万ヘクタール減の713万ヘクタールの見込み。これは、経済性の高い他作物への転換や非農業用途への土地転用が続いていることによる。一方、新品種の導入及び栽培技術の改善により、2025年の平均単収は6.11トン/ヘクタールと、前年に比べ0.01トン/ヘクタール増。その結果、全国生産量は、4,350万トン(粳米ベース)と、前年に比べ8.86万トン増となっている。

アセアン食料安全保障情報システム(2025.12)によれば、北部では雨季米(夏秋作)の収穫が終了している。この時期は、冬作物の播種時期と重なり、乾季米の作付けはまだ始まっていない。南部では、雨季米(秋冬米及びムア米)が依然として収穫期にあり、作付面積128万ヘクタールの内、収穫面積は78万ヘクタールに達している。温暖な気候及び灌漑設備の改善に支えられ、単収は約5.8トン/ヘクタールと前年度並みと予測されている。一方、乾季米(冬春米)は作付期にあり、主にメコンデルタ地域で作付面積は70万ヘクタールに達し、安定した天候に恵まれ、作柄は良好と評価されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から17.1%増の 4.1 百万トンと、過去最高となる見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、インドやタイといった輸出国との競争激化が予測され前年度から 1.3%減の 7.9 百万トンとなる見込み。ベトナム税関総局によれば、2024/25 年度のうち 2024/25 年度の輸出量は、806.3 万トンと前年同期(903.4 万トン)に比べ 10.8%減。輸出先国別には、フィリピン 320.7 万トン(39.8%)、コートジボワール 105.5 万トン(13.1%)、ガーナ 91.9 万トン(11.4%)の順(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 18.9%減の 2.1 百万トンとなる見込み。

コメベトナム

北部で概ね二期作、南部で三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培。

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年1月～26年12月)		
			予測値、OはIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	27.2	26.8	26.0 (28.3)	-	▲ 2.8
消 費 量	22.5	22.6	22.7 (23.2)	-	0.4
輸 出 量	9.0	8.0	7.9 (8.4)	-	▲ 1.3
輸 入 量	3.7	3.5	4.1 (3.5)	-	17.1
期末在庫量	3.0	2.6	2.1 (3.4)	-	▲ 18.9
期末在庫率	9.5%	8.6%	7.0% (10.6%)	-	▲ 1.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	7.11	6.95	6.80 (7.12)	-	▲ 2.2
単収(粳t/ha)	6.12	6.16	6.12 (3.97)	-	▲ 0.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026) (単収は粳米t/ha)

写真 ベトナム南部の圃場(1月9日撮影)



分げつ期から穂ばらみ期のジャポニカ DS1の圃場。アンザン省 Binh Giang コミュニ

表 ベトナムのコメの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年1月～12月)			2024/25年度 (2025年1月～12月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
フィリピン	422.1	46.7	フィリピン	320.7	39.8
インドネシア	125.7	13.9	コートジボワール	105.5	13.1
マレーシア	71.9	8.0	ガーナ	91.9	11.4
ガーナ	61.3	6.8	中国	74.7	9.3
コートジボワール	48.3	5.3	マレーシア	51.5	6.4
中国	28.5	3.2	セネガル	16.8	2.1
その他	145.5	16.1	その他	145.1	18.0
計	903.4	100.0	計	806.3	100.0

資料:ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDA の見通し> 2025/26 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・中国で下方修正されたものの、ブラジル、米国で上方修正され、前月から上方修正された。

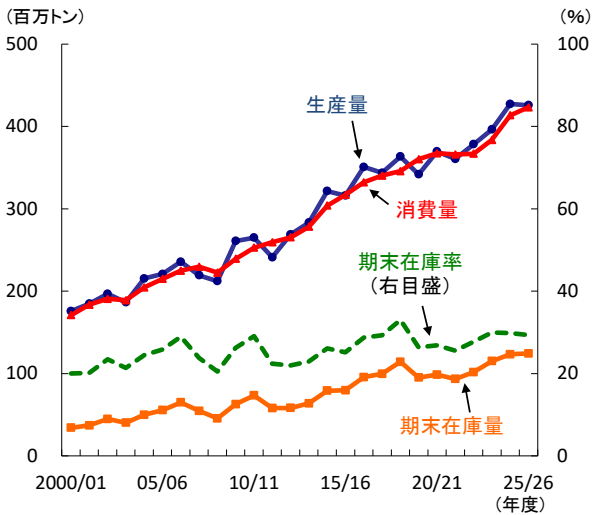
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・EU 等で下方修正されたものの、ブラジル、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジルで上方修正されたものの、米国で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

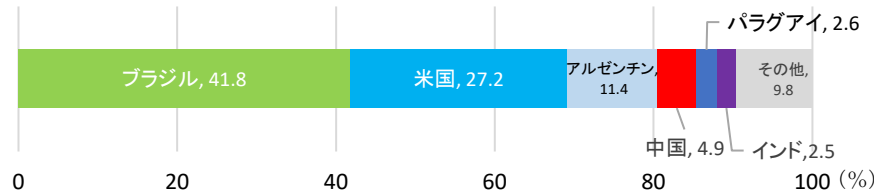
◎世界の大豆需給

(単位: 百万トン)

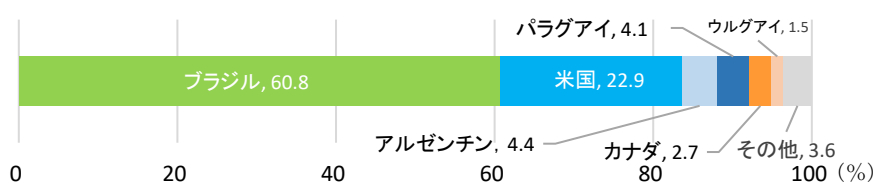
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	396.4	427.2	425.7	3.1	▲ 0.3
消費量	383.6	413.5	423.1	1.3	2.3
うち搾油用	331.2	358.7	366.4	1.2	2.2
輸出量	177.8	184.7	187.6	▲ 0.1	1.6
輸入量	178.4	179.4	186.0	▲ 0.1	3.7
期末在庫量	115.1	123.4	124.4	2.0	0.8
期末在庫率	30.0%	29.8%	29.4%	0.4	▲ 0.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 January 2026)

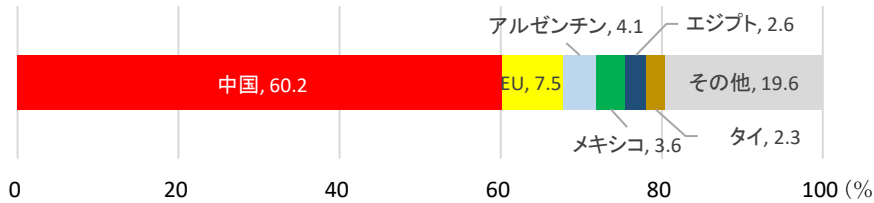
○ 2025/26 年度 世界の大豆の生産量(425.7 百万トン)



○ 2025/26 年度 世界の大豆の輸出量(187.6 百万トン)



○ 2025/26 年度 世界の大豆の輸入量(186.0 百万トン)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.6%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、収穫面積の引上げを受け前月予測から 0.2 百万トン上方修正されたものの、収穫面積の減少を受け前年度から 2.6%減の 116.0 百万トンの見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家がとうもろこしに作付けを切り替えたとみられる。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、搾油用需要の引上げ等を受け前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度から 5.6%増の 73.0 百万トンと史上最高の見込み。

米国環境保護庁(EPA)は、6月 13 日、再生可能燃料基準制度(RFS)について、2026～27 年の混合基準量案を公表した。バイオディーゼルは、2025 年の 33 億 5,000 万ガロンに対して、2026 年は 56 億 1,000 万ガロン、2027 年は 58 億 6,000 万ガロンと過去最高の数量を設定した。報道情報によれば、2026 年の義務量は、2026 年3月までに最終決定される見通し。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、ブラジルの生産量及び輸出量の引上げ等を受け前月予測から 1.6 百万トン下方修正され、搾油用需要の増加等を受け前年度から 16.3%減の 42.9 百万トンの見込み。

国際穀物理事会会(ICG)によれば、1月8日現在、米国産の輸出価格は、431ドル/トンと、前月(12月4日)から 15ドル/トン下落した。ブラジル産は前月から 41ドル/トン下落し 410ドル/トン、アルゼンチン産は前月から 29ドル/トン下落し 405ドル/トンとなった(図)。USDA「Oilseeds: World Markets and Trade」(2026.1.12)によれば、今後数週間以内に出荷が始まるブラジル産の記録的な豊作により、大豆主要輸出国の輸出価格は下落した。一方、米国産の輸出価格は、中国向けの販売が需要を下支えしており、ブラジル産と比べ高水準を維持している。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度の輸出量のうち 2025 年9～12 月の輸出量は、前年同期(2,956.7 万トン)に比べ 44.5%減の 1,640.3 万トン。輸出先国別には、メキシコ 217.8 万トン(13.3%)、エジプト 201.9 万トン(12.3%)、中国 124.0 万トン(7.6%)の順(表)。

報道情報によれば、米国は、10 月末の米中協議後、中国が 2025 年末までに米国産を 1,200 万トン購入することで合意したと発表した。その後、この購入達成は当初想定より遅い2月末までに達成される見通しであることが示された。

報道情報(2026.1.7)によれば、米中協議の合意後、中国は米国産を約 850 万トン～1,000 万トン購入したと推定され、今後も数百万トンの追加購入が見込まれている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げ等を受け前月予測から 1.6 百万トン上方修正され、輸出量の減少等を受け前年度から 7.7%増、過去5年平均(8.0 百万トン)から 19.5%増の 9.5 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 0.9 ポイント増の 8.2%となる見込み。

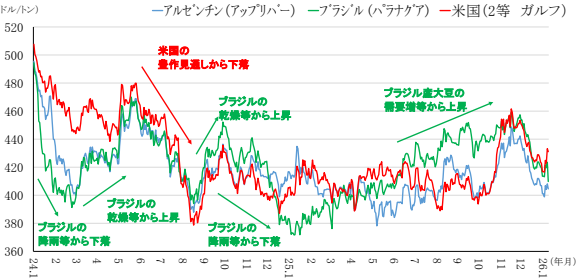
大豆－米国

(概ね5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年9月～26年8月)		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	113.3	119.1	116.0	0.2	▲ 2.6
消 費 量	65.4	69.1	73.0	0.5	5.6
うち搾油用	62.2	66.6	69.9	0.4	5.1
輸 出 量	46.3	51.2	42.9	▲ 1.6	▲ 16.3
輸 入 量	0.6	0.8	0.5	-	▲ 31.6
期末在庫量	9.3	8.8	9.5	1.6	7.7
期末在庫率	8.3%	7.3%	8.2%	1.5	0.9
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.29	34.89	32.55	0.05	▲ 6.7
単収(t/ha)	3.40	3.41	3.56	-	4.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)

図 米国、ブラジル、アルゼンチン大豆
輸出価格(FOB)の推移



資料:ICG のデータをもとに農林水産省で作成

表 米国の大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)			2024/25年度 (2024年9月～12月)			2025/26年度 (2025年9月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	2,232.5	44.7	中国	1,631.1	55.2	メキシコ	217.8	13.3
メキシコ	498.5	10.0	メキシコ	207.1	7.0	エジプト	201.9	12.3
エジプト	369.2	7.4	イタリア	159.7	5.4	中国	124.0	7.6
ドイツ	273.1	5.5	エジプト	140.0	4.7	イタリア	122.3	7.5
イタリア	210.0	4.2	ドイツ	119.4	4.0	インドネシア	102.4	6.2
その他	1,415.2	28.3	その他	699.4	23.7	その他	871.9	53.2
合計	4,998.7	100.0	合計	2,956.7	100.0	合計	1,640.3	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly
Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

＜ ブラジル ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 3.8%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、収穫面積及び単収が史上最高となることを受け前月予測から 3.0 百万トン上方修正され、前年度から 3.8%増の 178.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2026.1.15)によれば、2025/26年度の実産量は、コメなどの他作物から収益性が高い大豆に作付けがシフトすること等による作付面積の増加を受け前年度から 2.7%増の 176.1 百万トンと史上最高の見込み。11 月に高温乾燥の影響を受けた地域では、12 月に安定した降雨に恵まれ、土壌が改善した。この結果、作付作業は大きく進展し、1月初旬の作付進捗率は 98.2%と過去5年平均をやや上回っている。10 月以降、降雨の不安定さがみられ作付けが遅れていたものの、生育状況は大半の州で概ね良好である。収穫は主要生産州のマト・グロッソ州などで開始されており、1月下旬にはさらに本格化する見込み。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、搾油用需要の引上げ等を受け前月予測から 1.1 百万トン上方修正され、前年度から 3.9%増の 64.4 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル政府は、大豆油のインフレ懸念により 14%からの引上げが延期されていたバイオディーゼル混合率について、2025 年8月1日から 15%へ引き上げた。これにより化石燃料輸入量の減少、脱炭素化、農家の所得向上等が期待されている。報道情報によれば、3月に予定されているバイオディーゼル混合率 16%への引き上げは、技術的な検証が完了していないため、延期される可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、生産量の引上げを受け前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、中国との強固な貿易関係等を受け前年度から 10.5%増の 114.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～12 月の輸出量は、前年同期(926.9 万トン)に比べ 54.4%増の 1,430.8 万トン。輸出先国別には、中国 1,279.8 万トン(89.4%)、タイ 69.6 万トン(4.9%)、スペイン 32.4 万トン(2.3%)の順となっている(表)。

業界情報誌「OIL WORLD Weekly」(2026.1.9)によれば、ブラジルの中国向け輸出は、米国の中国向け輸出の増加を受け、2026 年の初めの数ヶ月間は鈍化が予想されている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引上げ等を受け前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、生産量の増加等を受け前年度から 0.3%増、過去5年平均(32.0 百万トン)から 15.2%増の 36.9 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 1.6 ポイント減の 20.7%となる見込み。

大豆—ブラジル

(概ね9～12 月に作付けされ、1～4月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)			
			予測値		前月予測からの変更	
			2025/26	2024/25	2025/26	2024/25
生産量	154.5	171.5 (171.5)	178.0 (176.1)	3.0	(▲1.5)	3.8 (2.7)
消費量	58.3	62.0 (60.8)	64.4 (64.3)	1.1	(1.1)	3.9 (5.8)
うち搾油用	54.4	58.0 …	60.0 …	1.0	…	3.4 …
輸出量	104.2	103.1 (108.2)	114.0 (111.8)	1.5	(▲0.2)	10.5 (3.3)
輸入量	0.9	0.7 (1.0)	0.5 (0.5)	-	(-)	▲31.5 (▲48.4)
期末在庫量	29.7	36.8 (10.7)	36.9 (11.3)	0.4	(▲1.6)	0.3 (5.3)
期末在庫率	18.3%	22.3% (6.4%)	20.7% (6.4%)	▲0.1	(▲1.0)	▲1.6 (0.1)
(参考)						
収穫面積(百万ha)	46.15	47.40 (47.35)	49.10 (48.67)	0.30	(▲0.26)	3.6 (2.8)
単収(t/ha)	3.35	3.62 (3.62)	3.63 (3.62)	0.04	(▲0.001)	0.3 (▲0.1)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
CONAB「Grãos」(15 January 2026)※()書き。なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

表 ブラジルの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～12月)			2025/26年度 (2025年10月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	7,968.8	77.3	中国	705.9	76.2	中国	1,279.8	89.4
スペイン	396.3	3.8	タイ	94.0	10.1	タイ	69.6	4.9
タイ	365.5	3.5	イラク	34.1	3.7	スペイン	32.4	2.3
トルコ	184.8	1.8	スペイン	28.3	3.1	イラン	14.4	1.0
イラン	146.3	1.4	ロシア	26.0	2.8	パキスタン	12.5	0.9
その他	1,252.1	12.1	その他	38.4	4.1	その他	22.0	1.5
合計	10,313.8	100.0	合計	926.9	100.0	合計	1,430.8	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

写真 マット・グロッソ州の大豆圃場(12 月 28 日撮影)



撮影者:Rafael Rohenkohl Silva

当圃場の大豆は、9月27日に作付けされた。収穫は1月20日を予定している。単収は約3.7トン/ヘクタールと見込んでいる。

< カナダ > 2025/26 年度の生産量は前年度から 10.2%減少する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.1.21)によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 10.2%減の 6.8 百万トンの見込み(図)。

カナダ統計局「Production of principal field crops, November 2025」(2025.12.4)によれば、州別の生産量は、マニトバ州では、収穫面積の増加を受け前年度から 12.3%増の 1.9 百万トンとなるものの、最大生産州のオンタリオ州では、前年度から18.2%減の 3.6 百万トン、ケベック州では前年度から15.6%減の 1.2 百万トンの見込み。各州とも単収が前年度を下回り、マニトバ州が 3.2%減、オンタリオ州が 11.8%減、ケベック州が19.2%減の見込み。カナダ東部(オンタリオ州及びケベック州等)では、生育期間を通じて高温乾燥に見舞われ、大豆の作柄が大きく悪化した。

【需要状況】AAFC によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用需要等の減少を受け前年度から 14.8%減の 2.1 百万トンの見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の減少等を受け前年度から 12.5%減の 2.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 3.2%減の 5.3 百万トンの見込み。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 6.4%減となるものの、過去5年平均(4.7 百万トン)から 9.1%増の 5.1 百万トンの見込み。

カナダ統計局によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8～9月の輸出量は、前年同期(34.3 万トン)に比べ 1.9%増の 34.9 万トン。輸出先国別には、日本 6.5 万トン(18.6%)、インドネシア 5.2 万トン(14.9%)、米国 5.1 万トン(14.6%)の順となっている(表)。

AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 20.8%減の 0.4 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 1.0 ポイント減の 5.4%となる見込み。

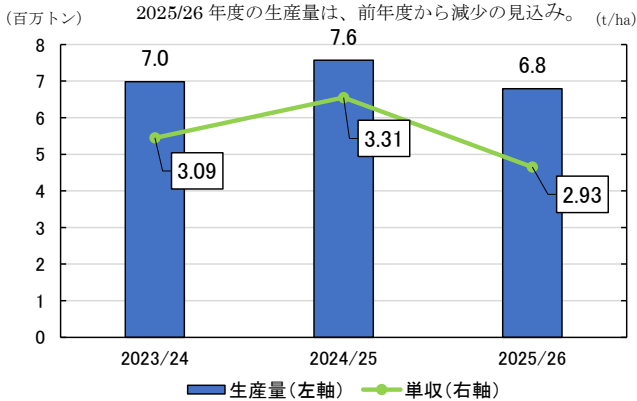
大豆－カナダ

(概ね5～6月に作付けされ、9～11 月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	7.0	7.6 (7.6)	6.8 (6.8)	- (-)	▲10.2 (▲10.2)
消 費 量	2.3	2.4 (2.5)	2.1 (2.1)	- (-)	▲12.5 (▲14.8)
うち搾油用	1.7	1.6 (1.7)	1.4 (1.7)	- (-)	▲9.7 (1.3)
輸 出 量	4.9	5.4 (5.4)	5.1 (5.3)	- (-)	▲6.4 (▲3.2)
輸 入 量	0.3	0.2 (0.3)	0.4 (0.5)	- (-)	44.6 (68.5)
期末在庫量	0.6	0.5 (0.5)	0.5 (0.4)	- (-)	▲8.8 (▲20.8)
期末在庫率	7.9%	6.8% (6.4%)	6.7% (5.4%)	- (-)	▲0.04 (▲1.0)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.26	2.29 (2.29)	2.32 (2.32)	- (-)	1.3 (1.4)
単収(t/ha)	3.09	3.30 (3.31)	2.93 (2.93)	- (-)	▲11.2 (▲11.5)

資料:USDA「PS&D」(12 January 2026)
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 January 2026)※()書き

図 カナダの大豆の生産量と単収の推移



資料:AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2026.1.21)をもとに農林水産省にて作成

表 カナダの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～9月)			2025/26年度 (2025年8月～9月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	104.3	19.0	日本	7.2	21.1	日本	6.5	18.6
イラン	76.5	14.0	米国	6.3	18.5	インドネシア	5.2	14.9
アルジェリア	54.9	10.0	アルジェリア	4.4	12.8	米国	5.1	14.6
米国	43.2	7.9	イスラエル	3.4	10.1	アルジェリア	4.0	11.4
日本	40.0	7.3	インドネシア	3.1	9.1	ノルウェー	3.4	9.9
インドネシア	31.8	5.8	マレーシア	1.8	5.3	中国	2.8	8.1
その他	197.5	36.0	その他	7.9	23.1	その他	7.9	22.5
合計	548.2	100.0	合計	34.3	100.0	合計	34.9	100.0

資料:カナダ統計局のデータをもとに農林水産省で作成

大豆－中国

(概ね4～6月に作付けされ、9～10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	20.8	20.7	20.9 (20.9)	▲ 0.1	1.2
消費量	121.8	127.4	132.9 (135.1)	▲ 0.1	4.3
うち搾油用	99.0	103.5	108.0 (111.4)	-	4.3
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
輸 入 量	112.0	108.0	112.0 (113.0)	-	3.7
期末在庫量	43.3	44.5	44.4 (50.0)	-	▲ 0.2
期末在庫率	35.5%	34.9%	33.4% (37.0%)	0.03	▲ 1.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.47	10.33	10.30 (10.42)	▲ 0.20	▲ 0.3
単収(t/ha)	1.99	2.00	2.03 (2.01)	0.03	1.5

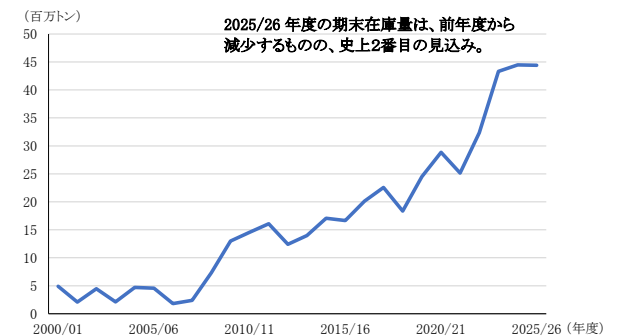
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

表 中国の大豆の輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～11月)			2025/26年度 (2025年10月～11月)		
国名	輸入量 (万吨)	シェア (%)	国名	輸入量 (万吨)	シェア (%)	国名	輸入量 (万吨)	シェア (%)
ブラジル	7,610.9	69.6	ブラジル	947.4	62.2	ブラジル	1,296.9	73.7
米国	2,438.9	22.3	米国	333.3	21.9	アルゼンチン	334.4	19.0
アルゼンチン	476.6	4.4	アルゼンチン	160.5	10.5	ウルグアイ	113.1	6.4
ウルグアイ	244.3	2.2	ウルグアイ	75.8	5.0	ロシア	10.8	0.6
カナダ	118.6	1.1	ロシア	6.2	0.4	カナダ	2.8	0.2
ロシア	45.0	0.4	カナダ	0.8	0.1	ウクライナ	1.0	0.1
その他	2.1	0.0	その他	0.1	0.0	その他	0.0	0.0
合計	10,936.3	100.0	合計	1,524.2	100.0	合計	1,759.0	100.0

資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

図 中国の大豆の期末在庫量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.1.12)をもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、収穫面積の引下げを受け前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、単収の増加を受け前年度から 1.2%増の 20.9 百万トンと史上最高の見込み。

中国国家统计局「農村司司長魏鋒華解説糧食生産状況」(2025.12.12)によれば、2025 年の生産量は、前年から 1.3%増の 20.9 百万トンとなる見込み。これは、作付面積が 10.27 百万ヘクタールと前年から 0.6%減少したものの、単収が 2.04 トン/ヘクタールと前年より 1.9%増加することによる。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、搾油用需要の増加等を受け前年度から 4.3%増の 132.9 百万トンと史上最高の見込み。

中国農業農村部「中国農業展望報告(2025-2034)」(2025.4)によれば、豚肉生産量の増加に伴い短期的には飼料用需要の増加が見込まれるものの 2034 年までの見通しでは、養豚施設の大規模化等により飼料用需要は今後安定的に推移する見込み。一方、飼料用大豆粕減量の取組が進み大豆粕需要は徐々に減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 3.7%増の 112.0 百万トンと、2023/24 年度と並び史上最高の見込み。中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～11 月の輸入量は、前年同期(1,524.2 万吨)に比べ 15.4%増の 1,759.0 万吨。輸入先国別には、ブラジル 1,296.9 万吨(73.7%)、アルゼンチン 334.4 万吨(19.0%)、ウルグアイ 113.1 万吨(6.4%)の順(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2025 年 11 月号」によれば、中国の関内(主に山東省、河南省、安徽省、江蘇省が含まれる)の良質かつ高タンパクな大豆の供給が不足し、買付対象が東北部の高タンパク大豆にシフトしたことから、11 月の国内価格は 4,460 元/トンと、前月(4,380 元/トン)から上昇した。

中国国务院関税税則委員会、5月の米中共同声明を受け、5月 14 日から税委会公告 2025 年第4号の追加関税 34%のうち 24%の適用を 90 日間停止するとともに、同第5号及び第6号の追加関税を停止すると発表(同第7号)した。その後、8月 11 日の米中経済貿易協議の共同声明を受け8月 12 日から更に 90 日間停止、10 月末の米中経済貿易協議の合意を踏まえ 11 月 10 日から更に1年間停止すると発表(同第 10 号)した。また、11 月 10 日から同第2号の追加関税 10%の適用を停止すると発表(同第9号)した。これにより大豆は 10%の追加関税を課すこととなった。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 0.2%減、過去5年平均(34.8 百万トン)から 27.4%増の 44.4 百万トンと、史上2番目の見込み(図)。期末在庫率は、前年度から 1.5 ポイント減の 33.4%となる見込み。

＜ アルゼンチン ＞ 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度から 5.1%減の 48.5 百万トンの見込み。前年度は病害虫のヨコバイによる被害によりとうもろこしから大豆に作付けがシフトしたが、2025/26 年度は被害の改善により大豆からとうもろこしに作付けがシフトしたとみられる。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の週報(2026.1.15)によれば、1月 15 日現在の作付進捗率は 95%と前年同期(98%)を下回っている。州別には、大豆主要生産州のブエノスアイレス州が99%(前年同期99%)、コルドバ州 100%(同 100%)、サンタフェ州 96%(同 99%)とほぼ完了している。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2026.1.13)によれば、1月上旬、ブエノスアイレス州、コルドバ州南部及びサンタフェ州南部では乾燥した状態が続き、降雨はほとんど見られなかった(図)。

ブエノスアイレス穀物取引所(2026.1.15)によれば、生育段階は 20%が着莢期、残りは開花期を迎えている。この生育段階での水不足は単収に影響を及ぼす可能性があるため、懸念が高まっている。また、直近1週間の高湿乾燥の影響により作柄が悪化し、「良～優良」の割合は、10 ポイント減の 65%となった。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の減少等を受け前年度から 4.6%減の 48.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、同国への大豆主要供給国であるパラグアイの実産量増加等を受け前年度から 21.8%増の 7.7 百万トンの見込み。2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、9月に輸出税が一時的に撤廃されたこと等を受け前年度から 4.8%増の 8.3 百万トンの見込み。

業界情報誌「OIL WORLD Weekly」(2025.10.10、12.5)によれば、2025 年8～11 月の中国向け輸出量は前年同期(0.9 百万トン)から 7.2 百万トンと大幅に増加している。9月に一時的に輸出税が撤廃され、中国が大豆を大量に購入した。

アルゼンチン政府は、2025 年 12 月 12 日、大豆の輸出税を 26%から 24%に引き下げた。政府は、9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、元の税率である 26%に戻っていた(表)。報道情報によれば、今回の輸出税の引下げは、生産者の税負担を軽減し、農業分野の競争力を高めることを目的としている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 1.1%減、過去5年平均(22.5 百万トン)から 1.4%増の 22.8 百万トンの見込み。期末在庫率は前年度から 0.9 ポイント増の 40.5%となる見込み。

大豆－アルゼンチン

(大豆は、概ね 10～1月に作付けされ、3～7月に収穫される。)

(単位:百万トン)

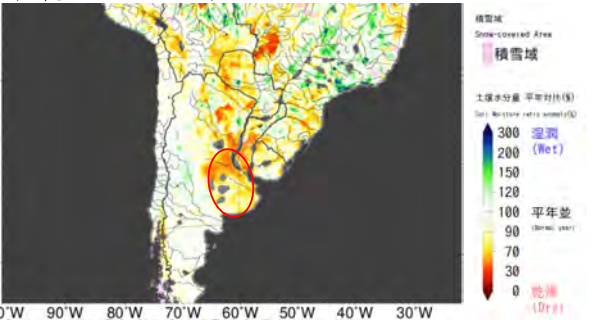
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	48.2	51.1	48.5 (47.8)	-	▲ 5.1	
消 費 量	43.8	50.5	48.2 (49.5)	-	▲ 4.6	
うち搾油用	36.6	43.2	41.0 (43.0)	-	▲ 5.1	
輸 出 量	5.1	7.9	8.3 (5.4)	-	4.8	
輸 入 量	7.8	6.3	7.7 (6.0)	-	21.8	
期末在庫量	24.1	23.1	22.8 (2.6)	-	▲ 1.1	
期末在庫率	49.1%	39.5%	40.5% (4.7%)	-	0.9	

(参考)

収穫面積(百万ha)	16.37	17.46	16.50 (16.75)	-	▲ 5.5
単収(t/ha)	2.95	2.93	2.94 (2.85)	-	0.3

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 January 2026)
IGC「Grain Market Report」(15 January 2026)

図 アルゼンチンの土壌水分量平年対比
(1月1日～15日)



○ブエノスアイレス州、コルドバ州南部、サンタフェ州南部

資料:農業気象情報衛星モニタリングシステム(JASMAI)

表 アルゼンチンの輸出税率の変遷
(2022 年 12 月 30 日以降)

(単位:%)

政 令	公 布 日	小 麦	とうもろこし	大豆	大豆油 大豆粕
政令851/2021号	2022年12月30日	12	12	33	31
政令38/2025号	2025年1月27日	9.5	9.5	26	24.5
政令439/2025号	6月27日	9.5	12	33	31
政令526/2025号	7月31日	9.5	9.5	26	24.5
政令682/2025号	9月22日	0	0	0	0
政令526/2025号	9月24日(※)	9.5	9.5	26	24.5
政令877/2025号	12月12日	7.5	8.5	24	22.5

※9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、以前の輸出税が復活した。

資料:ロサリオ穀物証券取引所「Evolución de los derechos de exportación para productos agroindustriales seleccionados」をもとに農林水産省にて作成

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について（2025/26年度）

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	25年6月～26年5月	25年9月～26年8月	25年8月～26年7月	25年9月～26年8月
カナダ	25年8月～26年7月			25年8月～26年7月
豪州	25年10月～26年9月		26年3月～27年2月	
EU	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
中国	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月
ロシア	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		25年9月～26年8月
ウクライナ	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
ブラジル		26年3月～27年2月	26年4月～27年3月	25年10月～26年9月
アルゼンチン	25年12月～26年11月	26年3月～27年2月		25年10月～26年9月
タイ			26年1月～12月	
インド	25年4月～26年3月		25年10月～26年9月	
ベトナム			26年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
例えば、2025/26年度は、米国の小麦では2025年6月～2026年5月、ブラジルのとうもろこしでは2026年3月～2027年2月です。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>（「Reference Data」タブを参照）

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel （ブッシェル） （穀物により異なる）	0.027216	メトリクトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリクトン	大麦	
	0.025401	メトリクトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリクトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリクトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

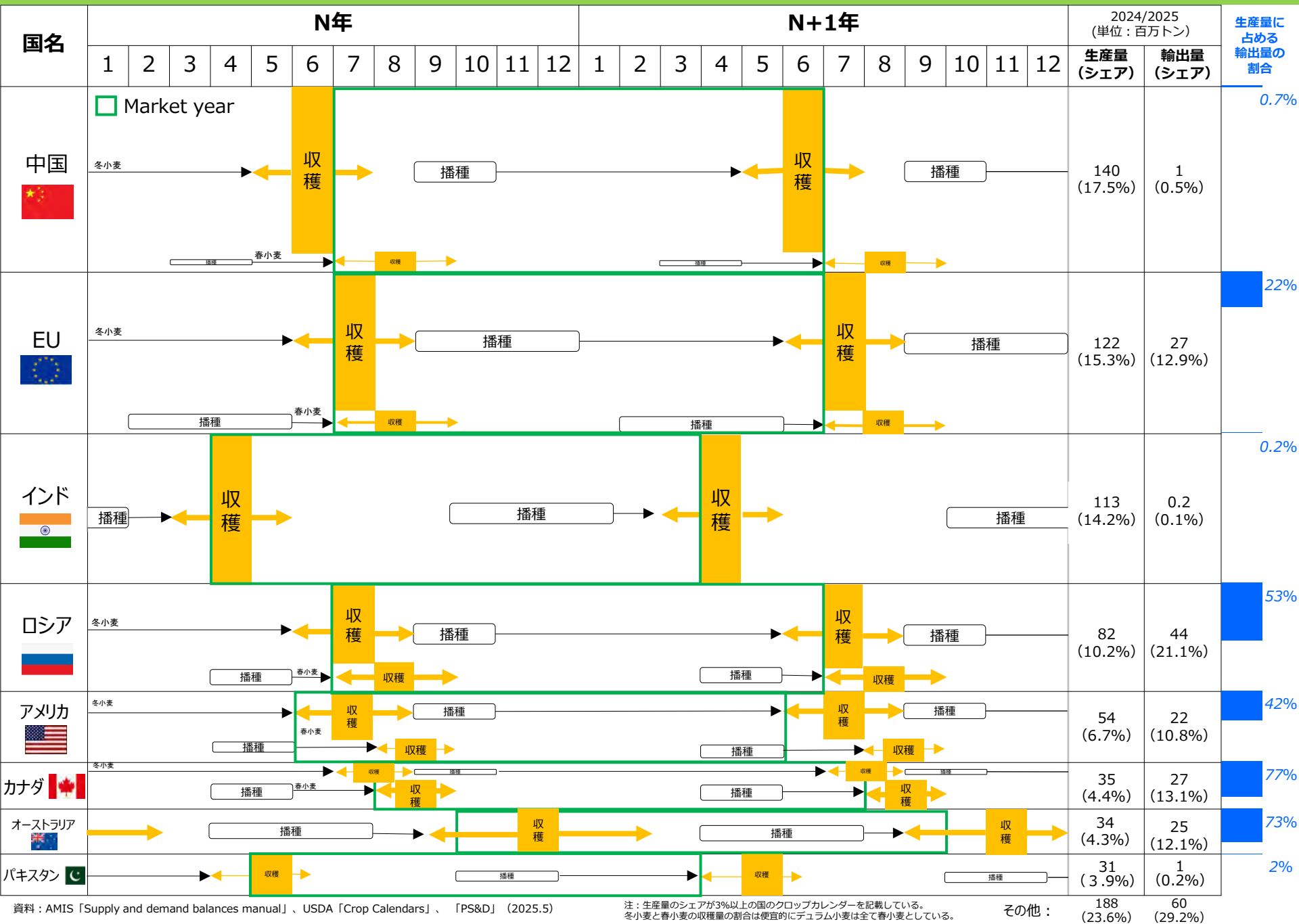
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏：℃＝(° F－32)÷1.8			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロップカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

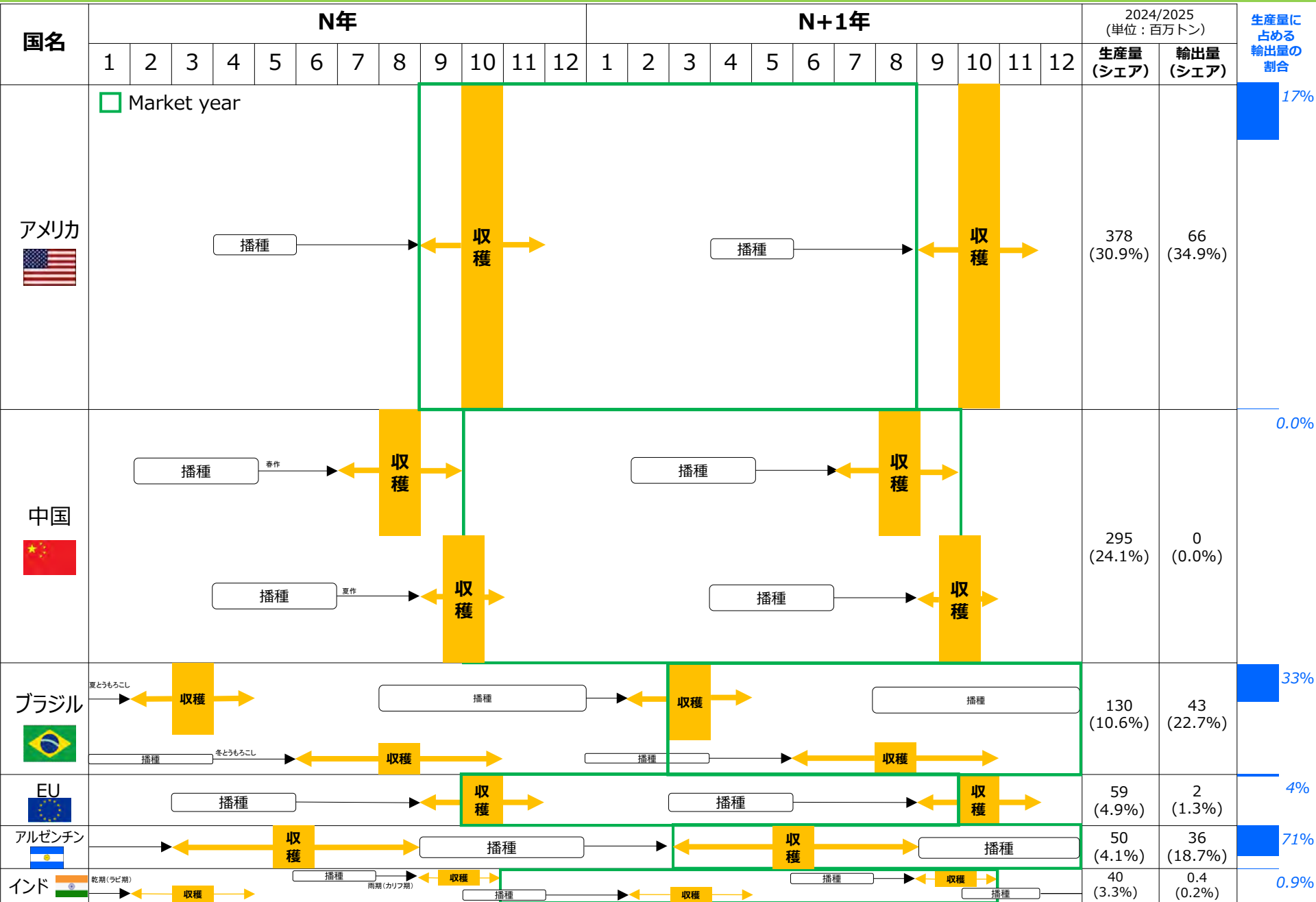


※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「Crop Calendar」、PS&D（2025.5） 注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他： 127 (23.6%) 21 (34.4%)

主要生産国のクロップカレンダー(とうもろこし)

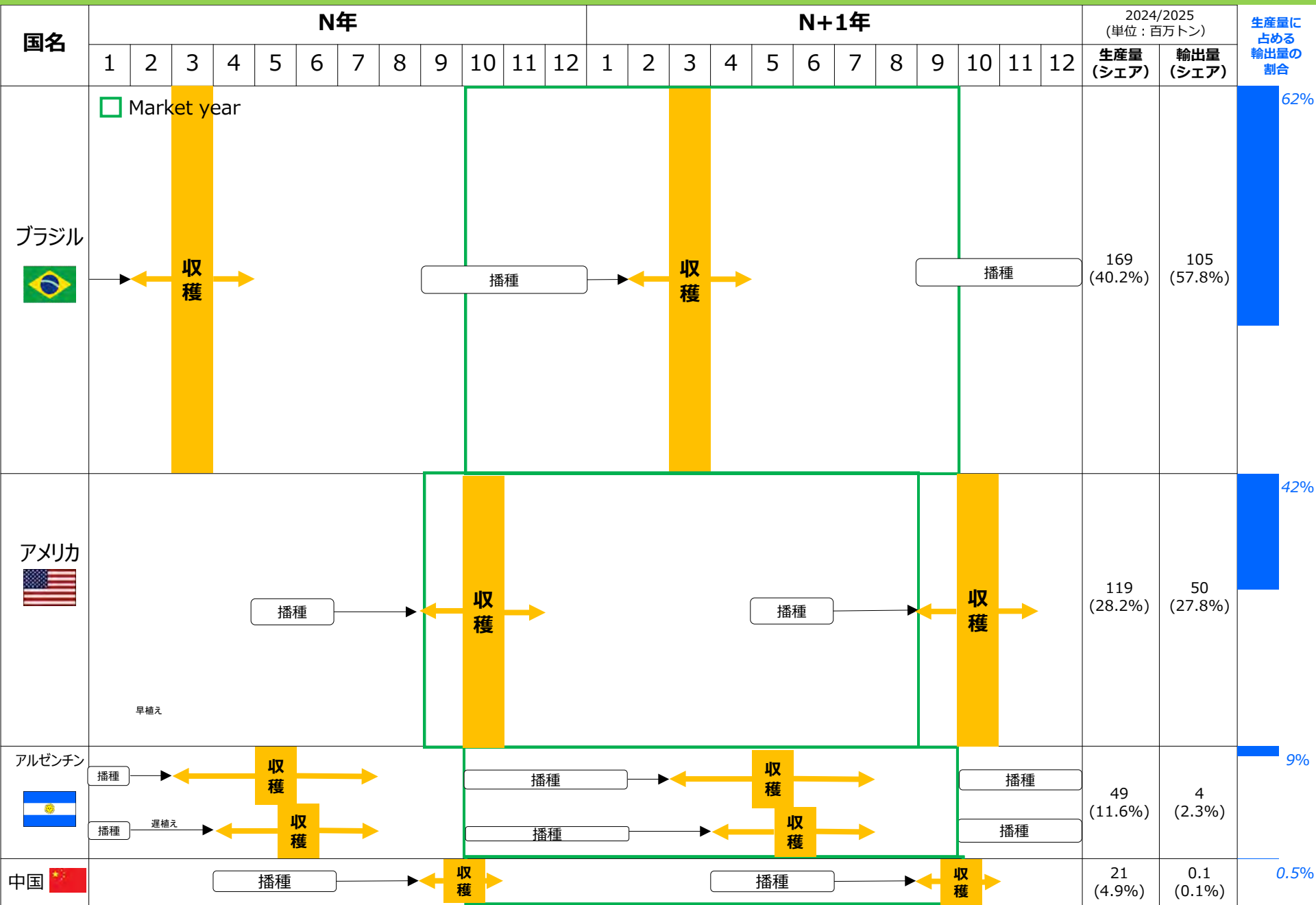
※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」（2025.5）注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他：269 (22.1%) 42 (22.2%)

主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



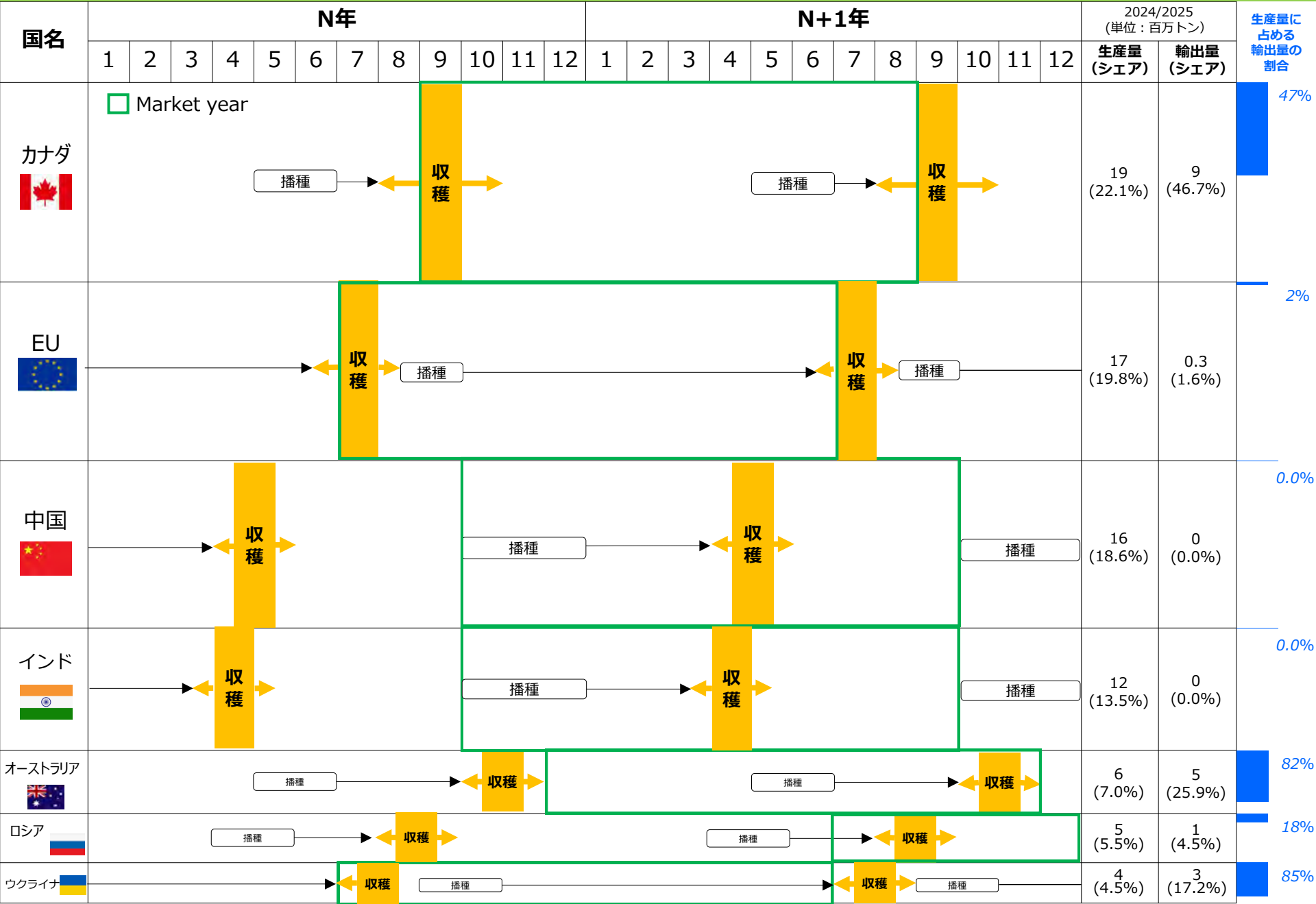
資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」（2025.5）注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。 その他：

63
(15.1%)

22
(12.0%)

主要生産国のクロップカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料：USDA「Crop Calendar」、「PS&D」（2025.5）

注：生産量のシェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

その他：⁸(9.1%)
¹(4.1%)

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2026 年1月中旬までに発表した情報を引用しています（最新年度 2025/26 年度です）。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

・食料需給表：<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>

・食品の価格動向：<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>

・米に関するマンスリーレポート：<https://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<https://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>

・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>

・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関(英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関(FAO): <https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会(IGC): <https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構(OECD)(農業・水産業分野): <https://www.oecd.org/en/topics/agriculture-and-fisheries.html>
- ・農業市場情報システム(AMIS): <http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省(USDA): <https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社(CONAB): <https://www.gov.br/conab/pt-br>
- ・カナダ農務農産食品省(AAFC): <https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局(ABARES): <http://www.agriculture.gov.au/abares>

- データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されますので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注:同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所(農林水産省発行「食料安全保障月報」)を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

○ 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

○ 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先 農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室
TEL:03-6744-2368(直通)

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10 年先）、超長期（30 年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

